
GALACTIC YANA - FOUR BATTLE FLAGS -

4260

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GALACTIC YANNA - FOUR BATTLE FL
AGS -

【Nコード】

N3966U

【作者名】

4260

【あらすじ】

超暦14976年、人類がかつて遥か15000年以上昔の地球と旧文明での最終戦争、“炎界の一月”で地球を焼き滅ぼし、破滅の危機に追い込まれたのをきっかけに、太陽系外惑星という新たな大地を求めて宇宙へと進出してから14976年が経過した遥かなる未来、超暦13776年から1200年間、銀河系全域とマゼラン雲全域を統治して来たルエンジス帝国は、当年から統治力を次第に失っていた。それによって、それから5年後の超暦1498

1年から反ルエンジス帝国勢力による反乱戦争、ルエンジス大戦が勃発し、銀河系とマゼラン雲はディオシード連合皇国・ラジギード連邦王国・アテラジア統合帝国・カルダシア同盟国家の四連合国家に分裂した。大戦終結から数年後、ディオシード連合皇国・ラジギード連邦王国・アテラジア統合帝国・カルダシア同盟国家の四連合国家による戦いが幕を上げようとしていた。

当物語の設定資料 <http://ncode.syosetu.com/n6030u/>

超能力や種族などの共通の設定資料 <http://ncode.syosetu.com/n2498v/>

星が夕空に次々と姿を現してきているな……。

もう夜は近いだろう。

それにしても今日は天気が良くて本当に良かった。

風が気持ちいい……。

ディオシード連合皇国のコーカス区画にあるアルカント王国のアルカント星系第4惑星、アルカントdにある海に面した小さな町、ピトウラの海岸沿いに住む12歳の少年、ズラブ・リュビナゼは、家の自分の部屋にあるベランダのハンモックの上で寝ていて、夕方の星が少し現れた美しい空を眺めていた。ベランダからは夕方の空に染まった広大な海が見えている。しかもその方向からは夏風が吹いていて、彼を優しく撫でていた。

ズラブには昔から夢がある。彼の夢は銀河系全域とマゼラン雲全域をいつか旅し廻ることだった。彼は今まで、アルカントdから一歩も出たことはない。だが、父はディオシード連合皇国軍の軍人であるため、何度も宇宙に行ったことがあり、今も行っている。

父はズラブが幼い頃、宇宙の話は何度も話していた。外の惑星とその文化、数々の天体、異星人など色々話していた。そのため彼は、惑星の外の世界である宇宙に行くのを数年前からとても憧れていた。ズラブには昔から気にしている事もある。それは自身がテレパシーを持っている事である。彼は幼い頃から人や動物の心が読めたり、心だけで会話ができたり、透視や軽い予知などをする事ができている。そのためズラブは、自分自身は何らかの不思議な力を隠し持っていることを確信していた。

そんなズラブであるが、彼は昔から気が強い前向きな性格で、好奇心が一杯だった。だがその反面、落ち着きが無く、慌て者であった。しかも、人の言う事を聞く事や従う事をあまり好んではいなかった。

「ズラブー、夕飯よー」

とその時、母がズラブを呼んだ。ズラブは、

「今来るからー」

と大きな声で言い返し、ハンモックを降りてベランダから出た。そして、自分の部屋を出て、一階の食卓へと急いで向かった。ズラブは、浮き浮きとした気分だった。なぜなら今日はズラブの12歳の誕生日だからである。ズラブは、超暦14984年の4月2日、つまり12年前の今日に、ビトウラで誕生した。家族は母のセレーネ・父のダヴィド・二歳年上の姉、ネオラの4人であり、ズラブはその一家の末っ子である。

「ズラブ、誕生日おめでとう」

ズラブが食卓に着くと、母はすぐに笑顔でそう言った。母は39歳であるが、見た目はまだとても若い。23歳で父と結婚し、25歳でネオラ、27歳でズラブを生んだ。父は当時も軍人だったため、父が帰ってくる事が多くなくい家庭でも、彼女は生活と子育てを上手く両立していた。

「今年も本当にありがとう、母さん。今年はお父さんがいないみたいだけど俺、大丈夫だよ。」

ズラブは笑顔でそう言った直後、すぐに自分の椅子に座った。彼の椅子はネオラの隣である。ネオラは幼いころからおっとりとした性格で、慌て者のズラブとは逆の性格だった。そのため、ズラブの世話に手を焼く事が昔から多かった。

「ねえ母さん、今年のプレゼントは何なの？」

ズラブは待ちきれない気分だった。彼は、誕生日は昔からプレゼントを何よりも一番楽しみにしていた。

「ズラブ、それは食べ終えた後からのお楽しみよ」

母は笑顔で答えた。

「そんなあ……、どうしても知りたいよ……ねえ母さん」

「じゃあ何だと思うかしら？」

「うーん、じゃあヒントは……？」

「ズラブが好きそうな物よ。ズラブが昔から憧れている事に関係あるわ。ほらズラブ、あなたはお父さんから色々お父さんの話を聞いていたでしょ？それは何の話だったかしら？」

「あつ、宇宙の事だね。でも宇宙に関係ある物って…何だろう…。自分自身で言葉から想像できるものや考えているものは絶対に当てはまらないし……」

「あら、何を想像しているの、ズラブ？」

「いや、言えないよ…。ところでそれは何グレードしたの……？」

「さすがに値段までは言えないわよ」

母は笑った。そして隣にいたネオラも笑った。

「ズラブは昔から落ち着きがないわね。素直に食べ終わった時まで

待てばいいじゃない。」

と、姉が笑顔でそう言った。そう言われるとズラブは、

「う、うん……わかった……。待つよ」

と素直に答えた。

「さて、3人席に揃った所だし、夕飯を食べましょ。お父さんは帰り遅れるみたいだから先に食べていてと言っていたからね」

周囲が落ち着くと、母は二人にそう言った。

「父さん、今までの誕生日はちゃんとしたのに……」

ズラブは不安そうだった。彼の今までの誕生日は父もいたのだった。彼は家族が全員揃わないと誕生日祝いが実感できないと思っていた。

「大丈夫よズラブ。父さんは警備の仕事が長くなっているだけだから。必ず帰ってくるわ。戦争なんて大戦終結以来このアルカントの周囲でもディオシードの中と周囲でも一つも起こっていないし。ディオシードはアテラジア・カルダシア・ラジギードと互い平穏な関係を維持しているわ」

「わかった母さん……」

「さて、ズラブの誕生日を祝って夕食を早速食べましょ。いただきます」

母が言うと、ネオラとズラブも

「いただきます。」

と言って、夕食を母と共に食べ始めた。ズラブは相変わらず誕生日プレゼントの事ばかりを考えていたため、焦って食べていた。それを見て、呆れたネオラは、

「ズラブ、プレゼントの事ばかり考えているでしょ。落ち着いて食べなさい。行儀が悪いわよ。」

と、ズラブの事を叱った。

「はあい……。」

ネオラに叱られるとズラブは気が沈み、落ち込んだ気分になった。そして、焦りも無くなった。

「ネオラは昔からしつかりしていてズラブの世話に手を焼いているわね。ズラブもお姉ちゃんみたいにしつかりしなさい」

「は、はあい……母さん……」

ズラブは更に、気が落ち着いた。落ち着きのないズラブは、一つの物にとらわれるとその事だけを考えることが昔からあった。今までの食事は、そういう事がほとんどだった。彼はいつもの夕食時は、夜の星空を観る事ばかり考えていた。

「あらネオラ、同じ物ばかり採りすぎたら駄目よ。ちゃんと2人の事を考えなさい」

ネオラは自分好きな料理ばかりを採るといふ悪い癖があった。母にそういう言われたネオラは、

「あつ、ごめん……」

と、焦って答えた。おっとりとした彼女であるが、それとは逆に抜けた面も持っていた。

「ズラブもネオラもわかりなさいね。二人ともわかったかしら？」

「はあい……」

二人は沈んだ感じの気分で同時に答えた。母は答えた直後突然、不機嫌な顔に変わった。ズラブはそれを見ていた。母は父の事を心配していたのだった。

「ねえ母さん、なんか落ち込んでいるみたいだけど、どうしたの？」

母の様子が気になったズラブは母に声をかけてみた。

「お父さんが遅いからね……。ズラブも不安なの？」

「うん、少しね」

「やっぱりズラブも不安なのね。帰りが遅くなるということは軍で何かあったのかしら。本当に何かがあったら嫌だわ……。例えば事故でもあったとか……。他には武力衝突でもあったとか」

母は更に不安になっていた。母と同じく、父の事が気になっていたズラブは精神を集中させ、父の事を深く考えてみた。すると、ズラブの頭の中には父がビトゥラに向かう列車に乗っている幻像が頭の中に写った。

「母さん、父さんはもう近いよ。必ず帰ってくるから安心して。気にしすぎは身体にも心にも悪いよ。それに武力衝突とか戦争は4年

間起こっていないし、この国とラジギードとアテラジアとカルダシアは平穏な関係を持っているってさつき自分から言ったはずでしょ」「あら、なんでお父さんの事が分かったの？ズラブ」

「まあね。いつまでも心配していたり気にしすぎていたりしたらそれより先に進めなくなるよ。母さんは前を向いて。これは俺からの注意だけだね」

「そうね、ズラブ。ありがとう……。お母さんも注意しないとね……。不安になってごめんね。それに不安な気持ちにもさせてしまつて」

母の不安はしだいに薄れて行き、気持ちも治ってきた。母は心配や不安をする事が子供の頃から多く、人見知りの性格の持ち主でもあった。彼女は今でもその性格で、それに悩んでいる。

「ズラブ・ネオラ、お母さんも注意が必要ね。ちょっと心配させてしまったかしら」

「ううん、平気だよ。お母さんは心配事が多いね。ズラブの言う通り心配と不安ばかりするのは心にも身体にも悪いわよ」

ネオラは笑顔で答えた。

「ごめんね、ズラブ・ネオラ。特にズラブ、誕生日という気分を壊してしまつたかしら？本当に大丈夫？」

「良いよ、母さん。もうあまり思い込まないで」

「ありがとう……。ズラブ」

母がそう笑顔で答えると、食事の場にあつた不安さは自然に消えていった。それからしばらくすると母はすっかり明るくなった。家族はズラブとネオラと母の3人であるときが多かつたが三人ともが仲良く、楽しそうに暮らしていた。もちろん父も3人とは 仲が良

いたため、リュビナゼ家は仲の良い家族として周囲では知られていた。落ち着いた後から数分後、母が突然、

「ところでズラブ、あなたはあなた自身の誕生日プレゼントは最初何だと想像していたのかしら？言っでごらんなさい」

とズラブに笑顔で質問した。ズラブはそう聞かれるといきなり焦り出してしまった。

「あ・・・それは・・・」

ズラブは他惑星と宇宙の旅行だと思っていた。だがそんな高い物ではあるはずがないと思い、言うのをやめてしまったのである。もし言えば、笑われてしまうのだと確信をしていた。

「ズラブ、恥ずかしくないで。怒ることなんて全くないから素直に言いなさい。我慢をする事や隠す事も身体と心には悪いわよ」

母はどうしても気になっていた。ズラブは更に焦り、とても緊張した。しかも、母もネオラもズラブの事を見ていた。ズラブはすぐに、「とりあえず適当な答えを答えて対処しよう」と決心をして、

「ああ・・・天体望遠鏡だよ。天体望遠鏡だと思っていたよ」

と、適当な答えを焦りながら答えた。

「あら、正解よ。よく分かったわね。なんで分かったのかしら？」
「えっ！？そうなの！？」

なんと、ズラブが適当に答えた答えは本当だったのだった。つま

り、偶然当たっていたのである。ズラブは非常に驚いた。それによつて、緊張は全て急速に、驚きと安心へと変わった。

「そうよ、ズラブ。鋭いわね。でもそれをあげるのは食べ終わってからよ。食べ終わるまで待っていなさい」

「うん。母さん、プレゼント本当にありがとう！」

数年前から晴れた日の夜はいつも、ベランダで夜の星空を見ていたズラブ。母はそんな彼をいつも密かに見ていた。母は、ズラブは天体望遠鏡が欲しいと思っていると、天体望遠鏡をズラブのプレゼントとして買ったのである。実はズラブも自分自身で天体望遠鏡がどうしても欲しいと思っていた。星空に移る天体をもっと大きく、細かく見たかったのである。しかし、自分で店に行ったらいずれも値段が高く、ズラブにとっては高嶺の花でしかなかった。最初、多惑星と宇宙の旅行だと思っていたのはその方の欲望が天体望遠鏡よりも大きかったからである。彼は何よりも、天体の本当の姿を自分の目で直接そのまま見たい、他の惑星にいつてみたいと思っていたのであった。

「よかったわね、ズラブ。」

ネオラはズラブが母に感謝の気持ち一杯の礼を言った後、そう笑顔で言った。

それから数分後、三人は夕食を食べ終わった。ズラブは食べ終わった後、待ちきれなかったプレゼントをもらうために母の所にすぐ行った。

「ねえ母さん、プレゼントは何処なの？」

「待ってなさい、今出すわよ。すぐだから」

母はそう言うと、大所に行った。プレゼントは大所の窓の側に置いていたのである。母はプレゼントを持ち、ズラブの所に戻った。そして、ズラブの側に置いた。プレゼントは木の箱だった。

「ズラブ、これがプレゼントよ。自分で開けなさい。待ちきれなかったでしょ」

「本当にありがとう、母さん！」

ズラブはそう礼をするとすぐに母に抱きついた。

「ズラブったら昔から落ち着きがないんだから……。でも夢を強く持っているからいいわね。それにズラブは昔から強気で前向き、しかも思いやりがあるから家族の事を強く想っていたわね」

母は、そう言いながらズラブの頭を優しく撫でた。そしてその後に、

「さてズラブ、プレゼントを早速開けてみなさい」

と言った。ズラブはそう言われた後、すぐにプレゼントの木箱を開けた。そこには大経口の天体望遠鏡が入っていた。しかもとても高級なものだ。おそらく、10万代グレードはした物だ。

「本当にありがとう……。わざわざこんな高くて高級な物を買ってくれてありがとう母さん。とても高かったでしょ。何グレードしたの？」

「14万6000グレードよ。私とお父さんとお祖父ちゃんが協力して買ったのよ。私だけじゃなくてお父さんとお祖父ちゃんにもちゃんと感謝するのよ、ズラブ。分かったかしら？」

「うん。ちゃんとするよ」

ズラブと母は笑顔でいっぴいだった。と、その直後突然父が帰って来た。

「ただいま、ズラブ・ネオラ・お母さん。ズラブ、今年は遅れて本当にごめんよ」

「あらお父さん、お帰りなさい。もう食べ終わったところよ」

と、母は答えた。

「お帰り父さん！」

ズラブは嬉しそうにそう言い、父の前までに走ってきた。

「どうしたんだ？ズラブ」

「プレゼントありがとう！！」

「ああ、天体望遠鏡の事か。ズラブ、一生大事に使うんだぞ。あれは高級で高性能な物だからな。約束するな？」

「するよ！絶対にだから！」

「そうか……偉いぞ」

「でも父さん……一つ思うんだけど」

「何だい？何でも言うてごらん」

「この望遠鏡、今から使っていていいの？」

「ああ、いいぞ。ただし、必ず俺も一緒に組み立てるからな。いいな？」

「うん、勿論いいよ！」

「よし、じゃあ早速お前の部屋に行くぞ。では行こう」

父がそう言った後、ズラブと父はズラブの部屋へと向かった。天

体望遠鏡は父が木の箱ごと持った。それを見たズラブは、階段を登ろうとした時、

「父さん、俺も持つよ」

と言った。

「ああ、わざわざありがとうズラブ」

父は嬉しく答えた。

「だって俺は少しでも恩返しをしないと。これを買ったのは母さんと父さんと祖父ちゃんですよ。それに箱はとても大きいからね」

「ああ、そういう事だな。よし、じゃあズラブは前を持ってくれ」
「うん」

ズラブはそう言うと、箱の前を持ち、父の方を見ながらゆっくりと後ろへと階段を登った。父も、同じようにゆっくりと階段を登った。

そして、ズラブの部屋の前に付くと、二人は箱を床に置き、ズラブが部屋の戸を開けた。

「ズラブ、本当にわざわざありがとうな」

「だってここは俺の部屋だし。さっきも言ったけど少しでも恩返しをしないと」

「そうだったな」

ズラブと父は再び箱を持ち上げ、箱を持ちながらズラブの部屋に入った。そして箱は部屋の真ん中に置いた。

「お疲れズラブ。では早速開けて組み立てよう。今日は天気がとても良いから星空が見えているな。もちろん天の川も」

父にそう言われたズラブは箱を開けた。まずは説明書を自身で取り出し、そして、二人で共同で組み立て始めた。組み立ては着々と進んでいった。

「ねえ父さん」

途中でズラブが父に声をかけた。

「何だい？」

「最近、他の国と惑星の付近で本当に何か問題とか起こっていないの？」

ズラブは食事前から母親と同じく気にしていたことを質問した。

「大丈夫だ。父さんはこのアルカント王国のアルカント星系を警備しているけどそんな事は一つも起こっていない。それにこの王国が構成国の一つであるディオシード連合皇国はルエンジス大戦の後、他のアテラジア統合帝国・ラジギード連邦王国・カルダシア同盟国家の3つの連合国家と平穏な関係を持っている」

「どうやってそうしたの？」

「隣にあるアテラジア統合帝国とその首国であるアテシユ皇国の前皇かつ最高元首、ラウガルスが、このディオシード連合皇国を含む他の3つの連合国家の元首と互い仲良くして平穏な関係を持つこと誓い、呼びかけたんだ。」

それにこのディオシードと、隣のラジギードとカルダシアも合意したんだ。いつかこのディオシードも、アテラジアと他の2つの連合国家とゆるやかな統一国家を結成する事もあるかもしれない。そ

れはまだ遠いかも知れないけれどな。けれど、ラウガルスは去年に病死してしまっただけでも、次に皇となったゴアルが彼の意志を継ぐと誓った」

「そうなんだ。でも統一してもいつか、6年前のルエンジンズ大戦のような事になったりはしないの？」

「国を左右させるのは我々皆次第だ。ルエンジンズ帝国は不安定な状況になったから銀河系とマゼラン雲を統治し続けられず、遂に崩壊したんだ」

「わかった。やっぱりみんながちゃんとしっかりしないとね」

「そうだぞ、ズラブ」

ズラブと父は互い会話をしながらも望遠鏡の製作を着々と進めていた。そして天体望遠鏡は完成した。

「じゃあズラブ、早速これをベランダに置いて天体を観てごらん。自分の好きなだけ、いくつでも観てもいいぞ。ただし夜更かしはしすぎるなよ」

「うん」

ズラブがそう返事すると、ズラブは完成した天体望遠鏡をすぐ側の自分の部屋のベランダに持っていった。ベランダは意外と広いため。望遠鏡を置くスペースは充分あった。ベランダに出ると、そこには星達が輝き、天の川が写っている快晴の星空があった。小さな港町であるビトウラは、天の川までが写るということは当然で普通の事だった。ベランダには父も来ていた。ズラブは最初、ある一つの紅色の散光星雲、コーカスH36を観た。ズラブの目にはその散光星雲の肉眼では決して見えない細かいところが写った。天体望遠鏡は大経口であるために、よく写っていた。

「ズラブ、何を観ているんだい？」

父は質問した。

「コーカスH36だよ。父さんも観る？観ても良いよ」

ズラブは質問に対してそう答えた。これは更に恩返しをしたのであった。

「ああ、俺も観よう」

ズラブは望遠鏡からどいて、次に父が覗いた。

「おお、凄いな。まるで本当に船の窓から観ているみたいだ」

「父さん、その星雲の近くを通ったことあるの？」

「ああ、昔あったさ」

「それっていつの事なの？」

「ルエンジス大戦よりも前の事さ。つまりまだこのアルカント王国がルエンジス帝国の一部であった頃だ。自分が軍学校を卒業したばかりで、軍の新米だった頃だ。空母の窓から観たな……。まだお前とネオラが生まれる十年以上前の話しなただけけどね」

「この天体望遠鏡に映っているように見えたの？」

「ああ大体はそうだな。だけれど実際このアルカント王国とコーカスH36は1430光年離れている。だからこの天体望遠鏡に映っている姿は実際の今の姿よりも1430年昔の姿だ。実際の姿は少し異なっている」

「例えばどこが違うの？」

「実際、俺がああ星雲を見た時、この今見ている位置から出来た原始星は多かった。だけどこの天体望遠鏡だと原始星は少ない。俺が見た時はもっと多かったな」

「そうだったんだ。ところで他の国の星系は観れないの？」

「ズラブ・・・それはこの望遠鏡よりも遙かに巨大な天文台か船から直接観るかの2条件でしかえみないさ。さすがにこの望遠鏡だと無理すぎるよ」

父は笑ってそう答えた。

「そうなんだ……。やっぱり俺、直接行って観てみたいないつか」「そうか。ズラブにはちゃんとした夢があるんだな。ちゃんと実現させるんだぞ」

「うん」

「じゃあ俺は夕食食べるから。ズラブ、就寝は忘れるんじゃないぞ」
「うん」

ズラブがそう答えると、父はベランダとズラブの部屋を出て食堂へと行った。ズラブは再び望遠鏡を覗き、コーカスH36を再び観た。その後もかれはいくつかの天体を観たのだった。

それから時間は午後10時になった。ズラブは歯磨きを終え、寝間着に着替えたため、寝ようとしようとしていた。ズラブは部屋に入ると、すぐにベッドに寝た。ズラブはまだうきうきした気分だった。なぜなら他惑星と宇宙旅行の次に欲しかった天体望遠鏡が誕生日プレゼントとして手に入り、様々な天体をいくつか見たからである。ズラブは、今日は良いことがあったため、良い夢を観ると思っていた。ズラブはそう思いながら眠った。

その日の夜の夢は考えてもいなかった夢だった。なんとその夢はビトウラに、他の国の軍隊が侵略してきた夢だった。軍隊は、そのままの者も機動兵機に乗った者もいる。そのビトウラはまさに、平和とは逆の地獄のようであった……。

ズラブは次の日の6時20分に目を覚ました。彼は自分が今朝観た、あまりのも悪夢に怯えていた。ズラブはベッドから置き、服を着替えて食堂へと向かった。

台所には母がいた。母は朝食を作っていた。

「おはよう母さん」

ズラブは台所の側で止まり、母を見て母に挨拶をした。

「あらズラブ、おはよう。どうしたの、元気がないわよ。どうしたのかしら？」

母は悪夢を観て、憂鬱になっていたズラブを見てそう言った。

「ああ……寝起きが悪かったから。二度寝してしまったからさ……」

ズラブはそうごまかし、悪夢の事を黙っておいた。それに彼は、悪夢の事を内緒にしようと思っていた。言ったとしても誰も信じてくれないだろうとも思っていたのであったからである。ズラブは答えた直後、台所の側を通り過ぎて食卓の自分の席に座った。食卓にはまだ誰も座っていなかった。ただ、母がすぐ近くの台所で料理を作っている音だけが響いていた。ズラブは今朝観た悪夢の事を考えた。

テレパシーを幼い頃から持っているズラブは、予知夢を何度も観たことがあった。しかし、今朝のような悪い夢を観た事は、今日が初めてだった。ズラブは、「あの夢は予知夢だったのか？それともただの夢だったのか？」と、頭の中で迷っていた。ズラブは昨日、母と父が言った世界の情勢の事を思い出して考えてみたが、更に迷ってしまった。「本当にこれからずっと、アテラジアを中心に4つの連合国家は仲良くやっていくのか？もしかしたらある国が裏切っ

て、このディオシードを含む他の3つの連合国家を侵略するのか？」
ズラブの思い込みは、深くなっていった。

「おはよう、お母さん」

その時、ネオラが来た。彼女は台所を通り過ぎながら母に挨拶をした。母は、

「おはよう」

と、朝食を作りながら挨拶を返した。ネオラは自分の席に座るとすぐにズラブの方を見た。ズラブはまだ、悪夢のことを思い込み続けていて悩んでいた。ネオラはそんなズラブを見て、彼に疑問を抱いた。

「ねえズラブ、どうしたの？」

ネオラはズラブに声をかけてみた。ズラブはそれに対して、

「ああ……寝起きが悪かったから頭が少し痛いだけ。昨夜夜更かしなんかしていないのに」

と答えた。ズラブはネオラにも悪夢の事を黙っておいた。ネオラは「本当にそうなのかしら？」と思った。彼女は疑問を抱き続けたのである。

「それ本当なの？ズラブ」

「……うん。二度寝してしまったからね」

ズラブはさらにごまかした。しかしそれでもネオラは頭の中では

疑問を持ち続けた。

「本当は違うんじゃないの？実は何か悩みとか持っているんじゃないの？悩みを我慢するなんて体にも心にも悪いわよ」

「いや……悩みなんか無いよ。大丈夫だから」

「じゃあ何？悪い夢でも観たとか？」

そう聞かれたとたん、ズラブの心の中には緊張が走った。ズラブは戸惑った。「これ以上、どうやってネオラの会話に対処をすればよいのか」と。

「おはよう、母さん」

その時突然、父が来た。父は台所の側で立ち止まって母の方を観て母に挨拶をした。

「あらお父さん、おはよう」

母は朝食を作るのを止めて父を見て挨拶を返した。朝食はもう完成が近い。父は挨拶した後、食卓に向かい、着くと自分の席に座った。

「あれ、二人ともどうしたんだ？」

父は、今朝見た悪夢の事を悩むズラブと、そんなズラブに疑問を持ち続けるネオラを見て疑問に思った。

「ああっ、おはよう父さん」

声をかけられたズラブはそう慌てて挨拶をした。

「あつ、おはよう」

次いでネオラも慌てて挨拶をした。

「二人とも朝からどうしたんだ？なんか調子が悪いのか？」

「うん。寝起きが悪くてね。二度寝してしまったから」

ズラブは父にも悪夢の事を黙っておいた。

「二度寝か……確かにしてしまっうな。なんと言っても眠りの誘惑は強いからな。俺だっしてしまっうよ。もちろん軌道コロニーの兵舎でもな。そっういえば友達も何人かがするな」

「だよね……。眠りの誘惑は強いよね。ところで友達っして同じ軍の？」

「ああ、そっうだよ」

「寝坊したことはあつたの？」

「ああ、あつたな。当然怒られたけどな」

父は笑いながら答えた。

「ああそっうだ、ズラブ・ネオラ、まだ言っていなかつたけど聞いってくれ」

と、突然、父は話を変えた。そっ言われたズラブとネオラは、

「何？」

と、同時に答えた。

「今日、ハイキング行かないか？久しぶりに家族そろったことだし」

「あつ、行く！」

「私も」

ズラブとネオラは元気に答えた。

「二人とも、行く気はあるんだな。さて、朝食を食べ終わったら早速準備をしよう。今日は天気が良いしな。まさにハイキング日和だし」

父はとても嬉しそうだった。毎日が軍での厳しい生活だったからである。父がそう言った直後、母が朝食を持ってきた。

「三人とも、朝食が出来たわよ。みんなも残りを持ってくるのを手伝いなさい」

ズラブ・ネオラ・父はそう言われると席を立ち、台所にあるまだ食卓に持って行っていない料理を取りに行き、それらを食卓に置いた。そして、全て置き終わると座った。

「久しぶりの4人の朝食ね。今日は家族でハイキングだから食べ終わったらず速準備をしましょ。いただきます」

家族4人が食卓に揃った後、母はそう言った。そして、父とズラブとネオラの3人も、

「いただきます」

と言い、家族4人は食べ始めた。4人全員揃った家族の食事はいつもより楽しそうだった。理由は、仲の良い家族が全員揃ったからである。しかも、4人はハイキングに行く事も楽しみだった。特に

ズラブが一番楽しみにしていた。落ち着きの無いズラブであるが、彼は落ち着いて朝食を食べた。今朝見た悪夢の事ばかり思い込んでいたからである。ネオラはまだ、ズラブに対して疑問を持っていた。

「ねえ、お父さん？ハイキングと言っても何処に行くのかしら？」

母が突然質問した。

「ああ、エディワームさ。4年ぶりにね」

エディワームとは、ビトウラから約42？離れた村とその周辺の地域である。村の近くにはとても広い水源湖があり、その周囲は森林と丘陵が広がる。リュビナゼ家は4年前の夏に行った事があった。村への移動手段は、地方内を結ぶ列車、ローカルエクスプレスである。

「エディワームね。4年ぶりだけど懐かしいわね。そういえばあそこは子どもたちは一回しか行った事がないけれど私たちは5回行ったのよね」

「そうだったな。確か、3回目は帰りが夜になってしまった上に迷ってしまったんだよな。俺はまだ覚えているぞ」

「あら、そうだったわね。どうして迷ったかは思い出せないんだけど」

「君が夜になったのを焦ってしまって知らない場所を通ったからだよ」

「……あの時はごめんね、父さん」

母は照れながら言った。父と母が3回目のエディワームに行ったのは、14年前だった。ズラブとネオラが生まれるずっと前である。その回は、帰りが夜になってしまったため、母は焦って知らない場

所を通ってしまったので2人は帰りは迷ってしまったのである。

「いいよ。もう昔の事だからな。あまり気にするな」

父は少し焦って答えた。

「そうね、お父さん……」

「まあ、4回目は帰りに雨が降ったから一番最悪だったけどな」

「あの時はお父さんが必死だったわね」

エディワームに行った事を懐かしんで話していた両親であったが、ズラブは食べるのを父と母が会話している最中に止めていて、今朝見た悪夢の事を考えていていた。母は父と話した後になんなズラブを見て、彼の事が気になり、

「ズラブ？さつきから何考えているの？」

と声をかけた。

「あつ、母さん……ただ準備の事を考えていただけ」

ズラブはまたごまかした。

「ズラブったら待ちきれないのね。確か5回目のエディワームに行くときの朝食の時も待ちきれっていなかったわね」

「まあね……どうしても待ちきれないからね」

そう答えたズラブであるが、母親はズラブが食べるのを止めて、考え込んでいた様子を見て、「今日のズラブは4年前とは違って焦って食べていないけどどうしたのかしら。4年前はあんなに待ちき

れなくて焦って食べていたのに。本当は待ちきれない気分ではない
気がする」と思って疑問を持った。

episode - 1 7年前の休日&It・前>t ; (後書き)

episode - 1 7年前の休日&It;後>

数分後、一家は食べ終わった上に準備を終え、出発をしようとしていた。4人同時に家を出て、ビトウラ駅へと向かった。この日は昨日のようにとても良い天気だった。空は快晴で雲が一つも無い。まさにハイキング日和だった。日差しは眩しい。

「今日も天気が本当に良いわね、お父さん。昨日から連続でこの天気で本当によかったわ。気持ちいいし。お父さんの言う通りハイキング日和ね」

母は手を絡めて腕を伸ばしながら笑顔で言った。

「そうだな。今日は本当に天気が良いな。風はないし」

父も母と同じく笑顔だった。

「ねえ、お父さん？今日は雨が降らないの？曇りにもならないの？」

ネオラは突然、父に質問した。

「一粒も降らないさ。心配するな。それに今日はこの通り快晴だから曇りにはならないさ」

「向こうもそうなの？」

「そうだよ、ネオラ」

「じゃあお父さんの言う通り本当にハイキング日和ね」

笑顔で答えたネオラであったが彼女はズラブの事をすっかり忘れてしまった。逆にズラブはまだ悪夢の事を思い込み続けていた。彼

は、他の3人とは逆に浮いていたのであった。他の3人は明るいのに対して、一人だけ暗いズラブは気分がまだ晴れなかった。ズラブは存在を忘れられているようだった。

「はあっ……」

ズラブはため息を吐いた。それに父が気づき、父は振り返った。

「ズラブ、どうしたんだ。昨夜とは逆な気分になっているな。何かあったのか？」

「……」

「ひょっとして天体望遠鏡の一部を壊してしまったのか？」

「いや、全然違うよ……。壊してなんかいないし……」

「そういえばズラブ、朝から気分が悪かったわよ。理由はわからないけれど」

ネオラがそう言ったとたん、ズラブの心の中は緊張が走った。彼は悪夢の事をどうしても、誰にも言いたくは無かった。言うのは怖い上にだれも信じてくれないと思っていたのである。

「寝起きが悪かったから……眠くて……」

疲れたような言い方でズラブは言った。それを聞いた母は、

「なら列車の中でたっぷり休みなさい、それにズラブ、駅はもう近いわよ」

と優しく言った。

「そうだね……」

ビトウラの駅がもう近くに見えていた。2階建ての小さな駅である。一家は駅に入ると、まず、父が切符販売機で4人分の往復の切符を買った。そして父は他の3人の切手を他の3人に渡した。その後、すぐ近くの改札口へと向かった。

改札口のゲートは4つ並んでいる。母とズラブが右から二つ目、父とネオラが一番右のゲートの改札機に切符を通して通った。出ると切符を取り出し、少し広い部屋に出た。右には二階に続く階段があり、二階に行けば第二のプラットフォームに行く橋があり、そこから第2のプラットフォームに行ける。逆に、目の前には何本のアーチ柱があるがその間を抜けると第1のプラットフォームである。一家はアーチ柱を抜けて第1のプラットフォームへと出た。エディワーム行きは第一のプラットフォームである。

プラットフォームはまだ、一家以外誰も人がいない。プラットフォームの向こうには草原が広がっており、少し遠くには森が見える。草原にも誰もいないし何も無い。一家だけのプラットフォームは静かである上に、風も無かったために無音だった。そんな静かなプラットフォームと時間の中で、一家は列車を待った。

「ねえ父さん、列車いつくるの？」

と、突然ネオラが父に聞いた。

「あと1分未満だ。もう近いな」

「わかった。それにしても人いないね……。どうしてかな？」

「あまり出かける人がいないからだろう」

「そうなんだ。4年前は10人くらいがこのプラットフォームにいたのに」

「ネオラな昔のことを良く覚えてるなあ……。しかも細かいところまで」

「まあね……」

ネオラが答えた直後、列車が来た。列車は7両の編成で、先頭が機関車、他の6両は客車である。客はたったの16人だけで、少ない。そのうち、ビトウラ駅に降りた客は、たったの4人だけだった。一家は、目の前に来た3両目の客車に乗った。3両目の客車は、一家以外には3人しかいない。一家が乗ってしばらくすると、列車は発車した。列車はビトウラの駅を離れてエディワームの方へと向かった。窓に映る風景は走馬灯のように変わっていった。窓側に座っていたズラブは、窓に映る変わりゆく風景ばかり見ていた。彼は悪夢の事を少し忘れていった。

「なあズラブ」

と突然父が話しかけてきた。父はズラブの目の前に座っている。

「なあーに？」

ズラブはだるそうに答えた。

「昨日、俺が去った後、あの望遠鏡でコーカスH36以外に何を観たんだ？それと見た数は全部でいくつなんだ？」

「ああ……19だよ。だから昨日は20も観たことになるね……」

「20か……ところで観た天体は？」

「確かコーカスH12とH85とH4とH61とH55とH73とH90とH21とH52とH76と大マゼラン雲と小マゼラン雲と……あとは何だったかな。あまり覚えていないんだよね」

さっきまではだるそうに言ったズラブであるが、誕生日プレゼントの天体望遠鏡で見た天体の事を語ると、悪夢の事は、すっかり忘

れてしまい、元氣そうに言った。

「じゃあ、かなり観たんだな。ん……？ズラブ……やっと元氣になったか」

父はズラブが悪夢の事を少し忘れて元氣な事気がついた。

「嫌な時や元氣の無い時は良い事を話したりしたら機嫌が良くなるからね」

「ようやく普段のあなたみたいになったわね、ズラブ。やっぱりあなたは元氣でないかね」

父とズラブの話を聞いていた母が笑顔で言った。

「そうだね、母さん」

ズラブはそう答えた後、再び窓を眺めた。

「なあ、ズラブ。話の続きなんだが、お父さん今日も天体望遠鏡で天体を観に来てもいいか？」

ズラブと父の会話はまだ終わっていないかった。父に聞かれたズラブは、悪夢の事を忘れて嬉しい気分になっていたのか、「あっ！そういうえば話の事を忘れていた」と気付いた。

「良いよ、勿論。そういうえば父さん、明日の朝で軍に帰るんだったね……。やっぱり今日はお父さんが使って良いよ。俺は使われないから好きなだけ使ってね、ただし壊さないように注意して」

ズラブは明日、軍に帰る父に気を配った。

「ありがとうよ……ズラブ」

父はとても嬉しそうに言った。

「あとこれも言い忘れたけど夜更かしには注意してね」

「それもそうだったな、ズラブ。わざわざ気を配ってありがとうな」

「じゃあ今日はハイキングを思いっきり満喫しようね」

「そうだな。満喫しないとハイキングにはならないから……。今日は前行っていなかった場所に行ってみようか」

「その場所って、父さんと母さんは行ったことがあるの？」

「あるさ」

「ねえ……そこってどんな場所なの？」

ズラブは、昨日の夕食の誕生日プレゼントが待ちきれない時のような落ち着きが無い気分になっていた。

「それは向こうに言ってからの楽しみだ」

「ええ……そんな……」

「ズラブったら昨日の夕食の誕生日プレゼントが待ちきれない時のようになっただわね。やっぱりズラブは落ち着きが無いのね」

と、突然母が笑いながら言った。それを聞いたズラブは焦り出した。父には昨日の夕食の時の誕生日プレゼントが待ち切れなかった時の自分の事が知られなくなかったようだ。

「あっ母さん……それは」

「ズラブはやっぱり落ち着きがない奴だな。昨日の夕食の時もそうだったのか……」

もう父本人に既に聞かれてしまったために遅いため止めることは

できなかった。ズラブはあたふたしていた。

「でも元気になって良かったでしょ、ズラブ。本当に良かったじゃない」

次に、ネオラは少し笑顔で言った。ズラブはため息を吐き、窓の方を見た。

「まあズラブ、すっかり元気になったから良いじゃないか。今日はハイキング満喫しよう」

ズラブが元気になったため、嬉しそうに言った父であった。

数十分後、列車はエディワームの駅に到着した。一家は降りて改札口のゲートを通り、駅の外の広場に出た。そこには、エディワームの村の光景が広がっていた。村は、駅よりも低い場所にある。そのため、駅の広場からは村をほとんど見ることができる。村は畑が多いが、ほとんどが小麦畑である。一方で自然地への入り口は、右の方の1.4 km先に見える。入り口の周りは森である。

「相変わらず村の光景は昔から変わらないな。でもそれが良い。この村に沢山ある小麦畑は村の大きな象徴だ」

父は嬉しそうに言った。実は父のある一人の軍の友人は、エディワームに暮らしていたため、父はたまに村に来ていた。友人の実家は小麦畑の農家である。

「そうね。この金色の小麦畑が特に良いわね」

続いて、母がそう言った。前からは緩やかな風が吹いて、一家を

優しく撫でていた。

「さて、行こう」

そして、父がそう言うと、一家は自然地へと歩き出した。入り口が少しずつ近づいてきた。

「ねえ父さん、別のルートって自然地の中にあるんだよね」

「その通りだネオラ。今回は前よりも長いしな」

「長いんだ……」

「でもその分、ハイキングを楽しめるんだからな」

「ところで父さんはそのルートを通ったことがあるの」

「ああ、勿論あるとも」

「そうなんだ。ところで例の場所ってどんな場所なの？」

父と話していたネオラは、今回のルートが少し楽しみになっていた。

「それは入ってからのお楽しみだ」

「分かった……」

ネオラは少し落ち着きが無くなっていったようであった。

それからしばらくすると入り口に着いた。入り口に入ると、周りは森だった。鳥の鳴き声だけが鳴り響いていた。無風であるために、鳥の鳴き声は、近くにいるように大きく聞こえる。森の中は一家以外に誰かいる感じがしない。

「やっぱり誰もいないね……。いる感じもしないし」

と、ズラブが無表情に呟いた。

「だな……」

ズラブの呟きに対して父はズラブと同じように無表情で答えた。

「別のルートまであとのくらいあるの？」

次にネオラが少し待ちきれない気分ですら質問した。

「あと数？先だな……。まだかかるぞ。自然値は広いし道は長い」

父はまた無表情ですら答えた。その後、ズラブは横を見て、それからずつと横だけを見ていた。彼はテレパシーを試みて、誰がいるか、動物とかがいないかを探知していたのであった。ズラブはどこかに熊がいるのを確認した。しかも、狂犬病になっているのを感じていた。それもどこかのルートであるが、今回通るルートとは考えたくはなかった。

「ズラブ、横ばかり見てどうしたの？」

母がズラブの様子に気づいた。気づかれたズラブは不安そうに、

「なんか悪い予感がするよな気がするんだけど……気のせいだったらしいね……」

と答えた。彼は熊がいる場所を今回通るルートではありませんよ
うにと心の中で何度も願いつづけていた。

「悪い予感ってなんだ？」

父が疑問に思った。

「なんか熊がいるような感じがするんだけど。何処にいるのかな」

ズラブは素直に答えた。それを聞いた父は、少し深刻な顔になった。

「熊……確かにこの自然地には熊がいるけれど俺は今までハイキングに行った時は見たことがない。まさかいるのか……？」

ズラブは、少し深刻になった父の顔を見て、「まさか、俺が素直に言ってしまったからハイキングの気分を壊してしまったかな……」と、不安になって思い込んだ。

「お父さん、まさかいるわけがないでしょう……」

母はどうしてもいるとは信じたくなかったようであった。母がそう言った後、父は歩きながら、鞆から睡眠弾拳銃を取り出した。実は、ハイキングでは毎回持ち歩いていたのである。しかし、取り出して使ったことがないため、ネオラとズラブだけではなく、母も知らなかった。

「お父さん、それは？」

睡眠弾拳銃を見たネオラは質問した。

「ああ、睡眠弾拳銃だ。お母さんも知らないかもしれないが、俺は実はこれを毎回持ち歩いていた。何かが起こった時の対処としてな」

「そうだったんだ……」

ネオラは少し驚いた。母は何も言っていないかったが「なぜ睡眠弾拳銃を持っていることを言わなかったのか」と考えていて、睡眠弾拳銃を無表情で見ている。一方でズラブは、睡眠弾拳銃をあまり信賴していなかった。彼は不安に追い詰められ、もし熊に遭ったら、どう対処をすればいいのかを必死で考えていた。そんなズラブを見た父はズラブ疑問を持ち、ズラブに、

「ズラブ、どうしたんだ？」

と、質問した。

「本当に熊に会ったらどう対処するかを考えている」

ズラブは無表情で答えた。

「まだ本当にいるかどうかは分からないぞ。それにズラブだけで止められるわけがない。危険だし絶対に無理だ。やめろ。下手をしたら死ぬぞ」

「で、でも……」

「とにかく俺は反対だ」

「はあい……」

ズラブはぼそぼそと答えた。同時に父は、睡眠弾拳銃を鞘にしまっておいた。

数分後、一家は例の別のルートとの分かれ道に着いた。別のルートは右の方の道である。

「さて、やっと着いた。例のルートだ。早速通ろう」

父はそう言うと、一家と共に別のルートの方に進んだ。ズラブは熊のことをすっかり忘れていたようであった。しかし、5mの地点で熊がこのルートの先にいることに気づいた。ズラブは不安になっていった。

「父さん……」

ズラブは素直に言う事にした。

「何だ？」

「この先、熊がいる感じがするんだけど」

「……そうか。一応睡眠弾拳銃を出そう」

父はそう言って、鞆から睡眠弾拳銃を取り出し、手に持った。ズラブがテレパシーを持っていることは、母もネオラも信じてはいなく、持っていることも分からなかったが、父だけは何故か、昔からズラブがテレパシーを持っている事に少し気づいていたようであった。そのため父は、ズラブの事を昔から信頼していた。

「お父さん、本当にいると思うの？」

母は父を疑問に思っていた。母とネオラはいるわけが無いと思いついでいたのであった。

「俺はそんな気がする……」

父は無表情で答えた。だが顔は、少し深刻で真剣になっていた。

そしてしばらく歩くと、道の真ん中に熊がいた。しかも寝ているようである。一家は熊を見ると緊張感が心の中を走った。

「ズラブが言ったことは当たっていたな……。俺が睡眠弾拳銃を持ってきたのは本当に正解だった」

一家はおそろおそろ後進した。熊は気付いて目を覚まし、一家を見つめた。そして威嚇し始めた。父は睡眠弾銃を熊に向けていた。熊は、一家が少しずつ下がるとともに少しずつ近づいてきた。熊は狂犬病にかかっているために荒々しくなっている。しかも性別は雌である。父はゆっくりと睡眠弾銃の引き金を引いた。すると、青白く光る睡眠弾が射出した。しかし熊は、それを手で素早く払った。そして熊は叫びだし、前に突進した。

「みんな避けるー!!」

父がそう叫ぶと、一家は見事に横へ避けた。熊は突進を止めると、父の方を振り返り、父だけを見つめた。ズラブは足下にあった太い木の枝と石を拾って持ち、構えた。父は何度も睡眠弾を撃ったが、熊は、手で素早く払う。そして、父に飛びかかった。

「お父さん危ない!!」

母は叫んだ。とその時、ズラブが熊に石をぶつけた。熊は父の横に着地（父は素早く横に避けた。）するとすぐに、ズラブの方を見て、ズラブを威嚇した。

「ズラブ、よせ!!危ない!!」

父は心配した。

「ズラブ、やめて！！危ないわよ！！」

母は父よりも心配した。それに、とても不安そうにズラブを見ていた。一方でズラブ自身は、太い木の枝を持って構えていた。ズラブは熊だけを見ながら構えながら少しずつ下がって行った。父は、熊がズラブだけを見ている隙に睡眠弾拳銃を熊に向けて撃つてみたが、実はさつき何度も撃つた時の最後撃つた弾が最後の弾であったので、弾は空になっていた。父はどうにもできなくなってしまった。だが、まだ不安を覚えていたため、睡眠弾拳銃を熊に向けていた。

「畜生……こんな時に弾が切れてしまうとは……」

父はとても困ってしまい、不安が増した。一方でズラブは熊に「お願い、大人しくなって。」と何度もテレパシーで伝えていた。だが、熊は大人しくなるうとはしない。そして、ズラブは決断をしたのか足を止めた。同様に熊も足を止めた。父と母とネオラは不安ながら黙然としてズラブを見ていた。

「お、おい……あいつまさか……」

父の不安と恐怖と心配は限界になっていた。周囲も黙然としており、緊張感と不安だけが走る。

「父さん、俺に任せて！！」

ズラブは自分だけで熊を対処したいと強く思っていた。

一分経つても、熊とズラブは互いを見つめ合っていた。互い黙然としている。と、その時、熊がズラブに飛びかかった。しかしズラブは見事に横に避けた。熊は着地すると狂い叫んでズラブを必死で

威嚇した。ズラブは立ち上がって、少し早歩きで後ろに下がった。それを見た熊は再びズラブに飛びかかった。しかしズラブはまた見事に横に避けた。父と母とネオラはさつきよりも少し遠くに離れていて、ズラブと熊の様子を見ていた。それに父は途中で、弾が切れた睡眠弾拳銃を鞘にしまった。弾が切れた銃をいつまでも持つていてもどうにもならないと思ったからである。

一方で、熊はまた再びズラブに飛びかかった。しかしズラブはまた横に避けた。熊は着地すると、またさっきのように狂い叫んで、ズラブを威嚇した。ズラブはそれでも慌てることなく、熊を黙然と見ていた。だが、何度も同じ事を熊と繰り返し返して来た上に体が疲れ、てしまっていたため、心の中では自信を無くしてしまつて、緊張と恐怖と不安の限界に追い込まれていた。そのため、次はどうすればいいのか分からなくなつてしまつていた。

「はっ……!?!」

と、その時突然、ズラブは心の中で何かを覚えた。何かを覚えたズラブは、それを使って熊を倒すために決心をして太い木の枝を捨て、熊にテレパシーで「さあ、もう突進して来い。」と言つた。熊は言われた通り、ズラブに向かって突進した。

「危ない!!」

心配と恐怖と不安の限界を超えた父はついにズラブを助けに走り出した。とその時、ズラブは熊の脳に集中し、熊の脳にシヨックを与えた。すると、熊の脳は混乱して目眩を起こし、ズラブのぎりぎり前で倒れた。父は熊のすぐ後ろで立ち止まつた。父と母とネオラは熊を倒したズラブを見て驚きすぎたため、何を言えればいいのかわからなくなつていた。父と母とネオラはただ、ズラブの様子を見た。

倒れた熊は、まだ荒々しくなっていないながらも、脳が混乱していて、眩暈にかかっていたため弱っていた。ズラブは熊に少しずつ近づき、熊のすぐ前で止まった。そしてズラブは熊の体に集中し、熊の狂犬病と自分が与えた混乱を治した。更には痛みと疲れも消した。すると、熊はすっかりおとなしくなり、更には元気になった。

「さあ帰りな。子供達が待っているだろう」

ズラブは、口とテレパシーで熊にそう優しく言った。それにズラブは、熊の心を読んで、熊が子供を持っている事をテレパシーで確認していたのであった。熊はゆっくりと立ち上がった。そして、自分の住処に向かって歩き出し、ゆっくりと住処へと帰って行った。

「みんな、じゃあ早速進もう」

ズラブは父と母とネオラを見てそう言った。それを聞いた父は、

「ああ、ズラブの言う通りだ。じゃあ行くよ。とりあえず、ズラブの事は後でゆっくり話そう」

と言って、進んだ。母とネオラとズラブは父について歩いて行った。

「ねえズラブ……、さっきのは一体何だったの？」

ズラブが熊を倒したのを見たネオラの心は啞然としていた。

「さあ……」

今まで自分自身は何らかの不思議な力を隠し持っていると確信し

ていたズラブであるが、なぜ突然覚えたのかを謎に思っていた。

「ネオラ、その事はお父さんがあとでゆっくり話そうと言っていたでしょ。だから後にしなさい」

母は、ズラブとネオラ会話を聞いて、会話を始めたネオラに注意をした。

「はあっ……わかった……」

ネオラはため息を吐いて答えた。

それから、2時間以上もの時間が経ち、ある場所に着いた。それは、大きな滝だった。

「ねえ父さん、この滝に何があると言うの？」

ズラブは疑問を持って質問した。

「この滝の中にあるよ。入ったら分かるさ。付いて来て」

父は笑顔でそう答えた。そして、滝のすぐ側へと向かった。そして一家は、滝の右端から滝の中へと入った。するとそこには、大きな穴があった。父は、小型の懐中電灯を靴から取り出して手に持ち、スイッチを入れた。すると、穴の中が光で見えた。中は洞窟だった。

「この向こうに例の場所がある。さて進もう」

父がそう言うと、一家は父を先頭に洞窟を進んで行った。洞窟の中は本来は真っ暗であるが、父が持つ、小型の懐中電灯のおかげで

中身がはつきりと見えていた。一家は次々と進んで行った。

しばらくすると、鍾乳洞に入った。奇妙な形の鍾乳石が、上と横にある。ズラブとネオラが鍾乳洞に入ったのは、今回が初めてであった。そのため二人はとても興味と関心があった。母はそんな二人を見て、

「そういえばズラブとネオラは鍾乳洞に入るのは今回が初めてだったわね」

と、笑顔で言った。

「考えてみればそうだったな、お母さん」

「ねえ、ところで例の場所ってまだなの？お父さん」

「それはまだかなるな、ネオラ」

父は無表情ながら歩いていた。

しばらく歩いていると、小さな滝に着いた。父はその滝の前で足を止め、止まると、母とズラブとネオラも止まった。ズラブは小さな滝を見て、「鍾乳洞の中にある滝は、なぜか神秘的な感じがする。」と思っていた。

「これを見る」

父はそう言うと、小型の懐中電灯の光を、滝の下の池に当てた。実は、滝の下の池の地面は鮮やかな紫石英であるため、父が光を照らすと、池全体が鮮やかな紫色に輝いた。その滝は、本当の神秘さを見せたのであった。

「綺麗……」

ネオラは綺麗のあまりにとても感激し、目を奪われていた。ズラブも同じであった。

「ねえ父さん、例の場所って、ここなの？」

「いや、これはまだ一つ目さ。実は二つあるんだ。二つ目はこの鍾乳洞と次の洞窟を抜けたらある。それに出口はもう近いぞ、ズラブ」
「二つあるんだ。ところで父さんは、この滝の下の池の地面の正体にいつ気がついたの？」

「エディワームに住む友達が教えてくれたのさ。彼は今では同じ軍の仲間だけだな。軍学校の時に知り合って、軍学校時代に寮で教えてくれた」

「そうだったんだ……。でも綺麗だね」

ネオラと同じように目を奪われたズラブはそう言ったあと、しゃがんで池に触れてみた。水がとても冷たい。そして、池の下の地面にも触れた。記念に一つ取ろうとしたが、どう力を入れても取れないため、あきらめてしまった。そんなズラブの様子を見ていた父は、

「ズラブ、素手では一つも取れないぞ」

と、笑いながら言った。母とネオラも見えていたため、笑った。

「わかった……」

ズラブはぼそぼそとした喋り方で答えた。

「じゃあ、さっそくもう一つの例の場所に行くぞ」

父は次にそう言うと、懐中電灯の光を池に照らすのをやめて、滝

から離れた。母とズラブとネオラも離れて、父に付いて行った。

5分後、鍾乳洞を抜けた。すると、鍾乳洞に入る前と同じような周りが全部岩の洞窟に入った。出口はもう近かったのである。

「もう近いぞ。もうすぐだ」

父は、二つ目の例の場所が待ちきれなかったのか、少し浮き浮きとしながら少し速く歩いた。一家も父と同じく、少し速く歩いた。一家は次々と進んでいった。そして2分後、外に出た。そこは、海拔300m以上の丘の上だった。エディワームの自然地と村のほぼ全貌を見渡せる。もちろん、水源湖も見える。

「わぁーすごい」

ネオラは、エディワームの村と自然地を見渡して感激した。

「ここが二つ目の例の場所だ。ズラブとネオラ、お疲れ」

「やっと着いたわね、お父さん。さっそくお昼にしましょ。今日は天気が良いから気持ちいいわね」

母は、草に覆われた地面に座って、持っていたランチボックスを開けた。そして次に、

「ネオラー、ズラブ、お昼よー」

と、ネオラとズラブを呼んだ。ネオラとズラブはすぐに母の所に来て座った。そして、父は歩いて来た。父が座ると、母は、

「では4人揃ったからさっそくお昼をいただきますよ。いただきますま

す」

と言って、食べ始めた。父とネオラとズブラも、

「いただきます」

と言って、食べ始めたのであった。

「そういえば、ズラブの話しよう。なぜズラブがあの時、熊を混乱させて熊を倒す事が出来たのか。なぜ熊が持っていた狂犬病と自身が放った混乱を治し、熊とは心が通じ合ったのかをね」

父はごちそうを一つ食べた後、ズラブの事を話し始めた。それを聞いた母とネオラとズラブはすぐに父の方を見た。

「実はズラブは超能力を駆使している。ズラブは昔から、透視とか予知とか人と動物の心を読むなどのテレパシーを持っていた。ズラブは昔からそれを駆使したことを俺に話したんだ。

超能力は人間は誰でも持っている。それは今から1万年程昔の我々人類が元々住んでいた惑星、ガイアシア帝国の地球で起こした最終戦争、”炎界の一月”に使われた相当強力な核エネルギー兵器の放射能に生存者が全員、直接被爆と間接被爆で被爆したからだ。それは、全生存者の全身の細胞を突然変異させて、元素や物を操作できたり、人や動物の心を読めたりできるようにしたんだ。それによって我々を含む”炎界の一月”以後の人間は超能力を持っている。だがみんなその力が強いとは限らない。多くがその力が微力が弱力だ。俺とお母さんとネオラはおそらく極微力だよ。だから超能力を駆使できていない。逆に強い力を持った人間は少しだけだ。きつとズラブが持っているのは弱力が強力なのだろう。

超能力者は持つ力が強いほど数は少ないんだ。超能力は我々人間

だけではなく、いくつかの異星人も駆使している。それはその異星人が住む惑星の近くの超巨星が超新星爆発を起こしてその放射能が惑星降り注ぎ、それをその異星人達が浴びた事によって、人間と同じように全身の全細胞が突然変異し、元素や物を操作できたり、人や動物の心を読めるようにさせて、超能力を駆使できるようにしたんだ」

父がそう語ると、母とネオラはほっとした。ズラブがなぜ熊を倒し、なぜ熊の狂犬病とズラブが与えた混乱を治し、なぜ熊と心が通じ合ったのかが理解できたからである。

「そうだったのね……。まさかズラブが超能力者だったなんて驚いたわ」

母は、よりほっとした気持ちで言った。そして父は、右手をズラブの頭の上に乗せ、

「それにズラブ、お前が熊を倒すときに駆使したのはカウオシス？（？は1段階の事）、その後使用したのはライフリカバリー？とライフヒール？だろう。お前は他にもまだまだ隠し持っているのかもしれない。ズラブ、お前が超能力を持てたのは幸運だ」と、言った。

「うん。」

ズラブは笑顔で答えた。それを見た母とネオラは笑顔になった。

「さて、話が終わったところだし、食べるのを再開しよう。あとズラブ、食べ終わって早く遊びたいとかばかり考えて急いで焦って食べるんじゃないぞ。お前は落ち着きが無いんだからな……」

「うん、わかった……」
「よし、じゃあ早速再開しよう」

そして一家は昼食を食べるのを再開したのであった。それにズラブは、ハイキングの途中で今朝見た悪夢の事をすっかり忘れてしまっていた。

だが6日後に、ズラブが見た悪夢が本当の事になるとは誰も知らなかった……。

episode - 2 ひよんなな出会い&It・前>t・;(前書き)

《ステータス》

ズラブ・リュビナゼ

年齢：12歳

種族：人間（アルカント人）

職業：初等部学生

武器：無し

【独自に駆使している超能力】

<補助>

ライフヒール？

ライフリカバリー？

<状態異常>

カウオシス？

episode - 2 ひよんな出会い&It・前>

ズラブはまた、あの6日前に見た悪夢を観て苦しんでいた。どこかの軍隊がビトウラを侵略する夢である。ズラブは、夢の中で苦しみながら色々思っていた。

この夢は何なのか……。

何を意味しているのか……。

まさか予知夢なのか……。

そしてなぜ6日ぶりに観ているのか……。

何故、あの日観た以来5日間は観ていなかったのに、6日ぶりの今日に観ているのか……。

バサッ!!

ズラブは驚いて目を覚まし、素早く起き上った。ズラブは6日前のハイキング以来、例のビトウラが侵略される悪夢をハイキングで忘れてしまっていたのだが、今日6日ぶりに観てしまったために恐怖に襲われた。

「何だろう……本当に何だろう、あの夢は……。もう忘れてしまっていたのにまた観るなんて……」

ただ、恐怖だけがズラブの心の中を走った。ズラブはベッドから

降りて、服を着替え、部屋を出て一階に行った。

一階には母が朝食を作る音だけが響いていた。ズラブは毎朝のように普通に食卓へと向かった。台所では、毎朝のように母が朝食を作っている。

「あらズラブ、おはよう」

「うん、おはよう」

ズラブはなんとか恐怖を抑えて母に挨拶をした。そして、食卓の自分の席に座った。座ると、あの悪夢の事と超能力の事を考えて思った。「もし、あの悪夢の事が本当に起こったら、超能力で侵略してきた軍隊をどうにかすることはできないのだろうか。」と。ズラブは次に、6日前のハイキングの時に、熊を超能力で対処した事を思い出して考えてみた。しかし、「軍隊を一人ずつ目眩させるだけではどう考えても勝ち目が無いからどうにもならない」と思った。結局、ズラブはただ、「じゃあどうすればよいのか」と迷い込んでしまった。

「おはよう、お母さん」

「あら、おはようネオラ」

と、その時、ネオラが来た。ネオラは母に挨拶をした後、食卓の自分の席に座った。ネオラは、「今日は何をしようか。」と考えていた。今日は土曜日であるため休日である。それに天気は晴れで、雲は少ない。ズラブはそんなネオラを見て、

「ねえ、どうしたの？」

と、ネオラに問いかけてみた。

「ああ、今日はどうしようかを考えているの。今日は休日でしょ。それに天気は良いし」

「そうだね……。でも父さんは月曜日に帰ってしまったし……。どうしようかな」

父はハイキングの次の日の朝に軍に帰ってしまったため、ここにはいない。二人はいつもの父がいない休日は、一緒に町のどこかに行つて遊ぶことが多かった。だが、それはしばしば、ズラブが行つてはいけない場所に勝手に出入りしたことで、問題を起こしたことがあった。

「あつ、そうだ」

と、ネオラがついにひらめいた。

「ん？思いついたの？」

「うん、私が先週の学校帰りに友達から聞いて気になった場所ね」

「それって、どこにあるの？」

「それは行つてからの楽しみよ。それとズラブ、落ち着いて行動してね。そっちが問題を起こしたら私も怒られてしまうんだからね」
「……わかったよ」

ズラブは良くない気分です。好奇心が一杯で落ち着きのない彼はやはり、姉とどこかに行つて遊ぶ時も相変わらずだった。

「二人共、ご飯が出来上がったわよ。向こうに残っているのを食卓に配つて」

朝食が完成したため、母が朝食を持って来た。

「わかった」

ネオラがそう答えると、二人は料理を取りに台所に行き、料理を食卓に配っていった。全てが配り終わると、3人は各自の席に座った。

「さて、いただきますよ。いただきます」

母がそう言うと、ズラブとネオラも、

「いただきます」

と言って、3人は食べ始めた。ズラブの食べ方は何故か落ち着いていた。なぜなら今朝観た悪夢の事を気にしていたからである。彼は今日の事よりも悪夢の事を気にしていたのである。

「ねえ二人共、今日はどうするの？」

しばらくすると、母がそう質問してきた。ネオラはすぐに、

「先週の学校帰りから友達から聞いて気なっただ場所にズラブと一緒に行ってみるの」

と答えた。

「そう……良いわよ。ただしズラブの事をちゃんと見てあげてね。問題を起こさないように」

「わかっているよ、母さん……。絶対起こさないから」

ズラブは少しイラっとして答えた。

「でもズラブはそう昔から何度も言われたけど結局何度も繰り返してしまったよね。お母さん」

「そういえばそうだったわね、ネオラ。ズラブ、本当にしっかりしなさい」

「はい……」

ズラブはぼそぼそとしたしゃべり方で答えた。

「言いすぎちゃったかな……。ごめんね、ズラブ」

ネオラは落ち込んでしまったズラブを見て、言いすぎたかもしれないと思ってしまった。

「いや、良いよ。俺自身の問題だし」

「まあ、でも外れた行動は本当にしないでね、ズラブ。特に先週のハイキングの時は心臓が破裂しそうだったわ。あの時はお父さんもお母さんもそうだったから。でもそっちが超能力で対処しちゃったけどね」

「うん」

「まあ、食べ終わったら早く行こうね。でも焦って食べないこと」
「わかった」

「でも、私の方が待ってられないからね……。多分」

「まあね。何と言っても見つけたのはお姉ちゃん自身だしね……」

「うん。早く行きたいな……」

「ところで、いつ帰ってくる予定なの？」

突然、母がネオラに質問してきた。

「昼までには帰ってくるわ。必ず」

「そう、怪我とかには気をつけなさい」
「わかった」

ネオラは笑顔でそう答えた。一方でズラブは、その時もその後も悪夢の事ばかり気にしていたため落ち着いて食べていた。母とネオラはそんな食べ方を見て、「なんか珍しいな」と思っていたのであった。

それからしばらくすると、3人は朝食を食べ終わり、ネオラとズラブはすぐに出る準備をした。終わると、母と共に玄関の前に出た。

「じゃあ行って来るね。お母さん。お昼には帰って来るから」

ネオラはとても待ちきれない気分であった。

「気をつけてね、二人共。あまり遅くならないようにね」

母は二人にそう言った。

「わかった。じゃあ行ってきます」
「行ってらっしゃい」

母が最後にそう言うと、二人は家を出た。家から出た途端、ネオラはすぐに例の場所へと走り出した。

「あっ、待ってー!!」

ズラブはネオラについて行って走った。雲がとても少ない晴天の空の下、そして街道の上で。

「ねえ、お姉ちゃん、とても待ちきれないの？」

ズラブは走りながら質問した。

「当り前よ。とても気になるし」

ネオラは立ち止まってそう答えた。

「その場所ってまだなの？」

ズラブもネオラと同様に立ち止まり、問い掛けた。

「うん。少しは遠いわね。それに帰り道とは逆だし」

「そうなんだ……。えっ、帰り道とは逆って……」

「遠すぎではないわ。私、気になって逆の方向ってみただけだし、興味津々でね。ズラブみたいに」

「ふうーん……」

「まあ、とりあえず行こうよ」

「……うん」

ズラブがそう答えると、二人は再び走った。

それからしばらくすると、二人は自分達の家がある住宅街を抜け、街の中央広場に入った。中央広場は広くはないが、街の人々の集いの場であった。

中央広場の中央には、時計型の建街記念碑がある。記念碑の下の部分には、このビトゥラの街を建て始めた月日と、最初の町長（街を建てた人物でもある）の名前などが刻まれている。小さい物でありながらも、記念碑は、街のシンボルである。

今の中央広場には何人もの人が集まっている。街の住民だけでは

なく、惑星の他の場所から来た商人や、別の国から来た商人もいる。それだけではない、ほんの僅かだけであるが異種族もいる。特に一番目立つのは、モーン王国を中心に分布するヤマネに似た非ヒューマン型族種族、モーン種である。

その他は、ボウエンユ王国を中心として分布する人間とは全く変わらないヒューマン型種族（耳は尖っている上にやや細く、水平に向いている。瞳は山吹色、髪は紫色がかった黒、肌は少し褐色である。）、ボウエントである。

来ている異種族は半分が旅人、半分が商人である。

（やっぱり休日は商人や異種族が多いんだな……。こんな小さな町なのに）

ズラブは周囲ばかり見ていた。よく見たら妻と子供3人連れの商人が一人いる。ズラブはその商人の事が気になってその商人の事を見つめた。するとその3人の子供の内一人が走っている自分とネオラに気づいたのか、こちらを振り返って見つめ始めた。暗い金色（ダークブロンド）の髪の少女であるが次女だろうか。なぜなら隣には彼女よりも背が高い男の子、更にその隣には彼女よりも背が低い少女がいる。二人は兄と妹だろう。

暗い金色の髪の少女はずっと姉とズラブの事を見つめていたが、ズラブは見つめるのをやめて、走っている姉を見た。だが、その後もその少女は二人のことをずっと見つめていたのであった。

二人は広場を抜けると、別の住宅街に入った。この住宅街の中にネオラとズラブが通う学校がある。実は、二人が今通っている場所は、いつもの通学路でもあった。

「学校、もう近いみたいだね」

ズラブは走りながら言った。

「そうみたいね。でも例の場所はこれでもまだだから。あと話は後にして。お願いだから……」

ネオラも話しながら言った。けれど彼女は例の場所の事だけを考えていたのか、話したがいなかった。

「……わかった」

「とりあえず今は急ごう、ズラブ。走りながらしゃべるなんて苦ししい……」

ネオラは最後にそう言うと、走る速度を上げた。彼女は全力で走り出したのである。ズラブはまだネオラよりも3つ程年下である上に身長が少し低く、同じ速度で走るの少し苦労する事だった。そのため、少し距離が離れた。ズラブはそれでもついて行こうとお必死で走った。

しばらくすると学校の前に着いた。学校は町では一番大きい上に広い建物である。ネオラは学校の前に着くと、立ち止った。それを見たズラブも立ち止った。

「はあっ……はあっ……速いよ……お姉ちゃん」

ズラブは苦しそうに言った。

「ごめん、速すぎたね……私。自分のことばかり考えすぎちゃった

……」

「……お姉ちゃんこそ気をつけてね」

「う、うん……。とりあえずここからは歩いて行こうね」

「だね……」

ズラブが答えた後、ネオラは歩きながら例の場所へと向かった。ズラブも同じように歩きながら姉について行った。

「ねえ……ズラブ、疲れたかな？」

「まあね……」

「どこかで休む？」

「いや、いいよ。休むのはあとで良い」

「わかった」

二人は足を止めずに歩きながら進んで行った。

数分後、周りを店に囲まれた小さな公園についた。中央には井戸がある。人はなぜか誰一人もない。

「ねえ、例の場所ってここにあるの？」

ズラブは質問した。

「例の場所はまだね。でもその場所への入口はこのすぐ近くにあるから。そういえばズラブはここに来たことがある？」

「無いね。ところで今までこの場所に寄った事があるの？」

「寄っていたわよ。その左にあるパン屋にたまたま寄っていたからね」

姉は左にあるパン屋を指さしてそう言った。パン屋からは芳香が漂っている。ズラブもネオラもすぐに、その匂いにとらわれてしまった。

「そうなんだ。……で、入口って何なの？」

「それは……地下道の下。このすぐ近くに地下道の出入り口があるからね。そこが例の場所への入口よ」

「地下道って……その下にあるのは水路と避難用のシエルターだけだよ……。それに地下道の出入り口なら家の近くにもあるでしょ。何故こんな遠くにある出入り口からわざわざ入るの？」

ズラブは少し呆れた気分でそう言った。なぜなら姉にわざわざ遠い場所までについて来られたからである。それに、地下道の出入り口は町の所々にあるが、リュビナゼ宅の近くにも実はある。

「……それは後から分かるわよ。必ずね」

「でも、もう一度言うけれど地下道の下は下路と避難用のシエルターしかないと思うんだけど」

「その更に下に何かあるのよ」

ズラブはその言葉を聞いたとたん、少し驚いた。

「えっ！？更にその下にも何かあるの？」

そして更に、好奇心を持ちだした。

「本当よ」

「……そうなんだ……」

「じゃあ、出入り口に行くよ」

ネオラはそう言うと、地下道への出入り口へと歩き出した。

地下道の出入り口は、そこからすぐ近くの、パン屋の裏にあった。先ほどの小さな公園と同じく、周りを建物に囲まれている。

「じゃあ早速入るよ」
「うん」

ネオラとズラブは地下道の出入り口へと入って行った。
出入り口を抜けると、そこは地道だった。地道は、町のもう一つの歩道である。通路は宇宙船の通路のようである。所々に明かりがあるため、明るい。

「ねえズラブ？地道通った事ある？」

ネオラは突然、そう質問してきた。

「何度もあるよ。でもあの入口から出入りした事は無いんだけどね」
「そう……。実は私もあの入口から出入りした事が無いの」

実はネオラもあの出入り口から地道に出入りをしたことが無いのである。

「ところで、地道から下へはどうやって行くのか分かっているの？下といっても水路と避難シエルターだけど」
「友達から聞いているから分かるわよ」
「友達、本当に例の場所に行ったんだね」
「そつよ……」

ズラブとネオラは地道を歩いて行った。

そのご歩いていると、何度か人とすれ違って行った。しかし、地道の下である水路への入口にはまだ到達しない。

「水路、まだみたいだね。ところで地道と水路と避難シエルター

の更に下に何があるというの?」

「それは、辿り着いてからの秘密よ。」

姉は嬉しそうに言った。

「あとそれってつまり、町の一番下ということ?」

「そうね」

「まあ、でも俺も気になっているよ。お姉ちゃんみたいだね」

ズラブもネオラと同じく、興味が湧いてきていた。ズラブの言葉を聞いたネオラは、

「じゃあ少し早歩きしよう。良いかな」

と、さっきよりも嬉しそうな気分で言った。

「良いよ。じゃあ早く進もうよ」

ズラブは賛成した。そして二人は早く歩いて奥へと移動した。怖さを何一つも感じずに。

そして数分後、中央に着いた。中央は円い部屋で、トンネルが今出てきたのを含めて4つあり、中央にはとても太い柱がある。実はここは町の中央広場の真下であり、この太い柱は中央広場の健街記念碑とつながっている。

「中央に着いたね。この太い柱があのだ記念碑とつながっているんだ。つまりこの柱の真上に記念碑があるんだね……」

「そうね。今頃この上は賑やかなのね。さて、次は下に行くね。確か下への通路は左のトンネルの奥にあるわよ」

「そうなんだ……」
「じゃあ行こう」

ズラブとネオラは左の方にあるトンネルの前まで歩いた。そして、トンネルの前に着いた。このトンネルの通路は1メートルしか無く、その先には扉がある。扉の横には、その扉を開け閉めするコントローラーがある。扉はすごく厚い。姉はコントローラーをいじって、扉を開けた。

「あれ、パスワードとかかかっていないの？」

ズラブは、姉が普通に扉を開けたのを見て扉にパスワードがかかっていない事に気付き、それが気になってしまった。

「うん。何故かかかっていないのよ」

「そうなんだ……。じゃあ、お姉ちゃんが先に行つて。お姉ちゃんが入ったら次に俺が入るよ」
「わかった。」

ネオラはそう言った後、すぐに扉の内側へと入った。ネオラが入った後、ズラブが次に入った。ズラブが入ると、彼は内側にある扉のコントローラーをいじって、扉を閉めた。扉の内側は、普通の通路よりも狭い通路がある。長さは3メートルで、その右先には階段がある。

「じゃあ降りよう」
「分かった」

ズラブが答えた後、ネオラは階段を下りていった。続いてズラブも降りていった。階段を降りるとそこは地道とはあまり変わらない

い普通の通路であった。ネオラはすぐに、友達が描いた水路の地図を取り出した。しかし、それと同時になぜか少し怖くなっていた。そんなネオラを見たズラブは、

「どうしたの？お姉ちゃん」

と言った。

「ああ……ちょっと怖くてね。ここは入ったこと無いからね。何か出てきそう……」

「良ければ俺が先頭になる？それに俺、超能力があるから周囲に何がいるのかを探知できるし。それに何か悪いのが出てきたら俺が対処するから」

「本当？」

聞いたネオラは少し驚いた。

「うん。それにお姉ちゃん、俺が先頭になって歩こうか？怖いなら無理しなくていいよ。」

「そうだね……いいよ。じゃあお願いね。やっぱりズラブは超能力があるから良いよね。私とお父さんとお母さんなんか無いから」

ネオラはそう言いながらズラブに地図を渡した。

「……でもよくない事だつてあるかもしれない……」

ズラブは落ち込んだ気分で言った。悪夢の事を考えたのである。彼は、どんな悪い予知夢を観てしまうかもしれないと心の中で言ったのであった。

「……ん？例えは何？」

ネオラはズラブが言った事が気になってしまった。しかし、ズラブはどうしても言いたくはなかった。ズラブは、

「……言えないよ」

と答えた。

「……そう、でも確かに何もかも全ては良いとは限らないね。悪い点はどれも必ずあるから」

「まあね」

ズラブは安心して答えた。「もしかしたらしつこく突きつけられるかもしれない」と考えていたのであった。

「私はおっとりしているけど悪い点はもちろんあるわよ。お母さんもお父さんもそういう点は必ずあるからね」

「うん……」

「……まあ、深く考えないでとりあえず進もうよ。ズラブ」

「そうだね……」

ズラブは色々考えながらも、ひたすら進んでいった。

それから数分後、二人は両側に数本もの太いパイプ（下水道管か水道管）が張り巡らされている太い通路へと出て、そこを歩いていた。水が流れる音が鳴り響く。

「ここ結構複雑ね。思っていた通り」

ネオラは少し退屈した気分だった。水路の階は迷路のようになっ

ているからである。

「だね。お姉ちゃんの友達がこの階の地図を描くには調査に時間がかかったみたいだね」

「調査し終わるまでは相当な時間がかかったそうよ……。それに何人が迷ってしまったけどね」

「思っていた通りだね」

ズラブがそう答えた直後、横を4匹の鼠が通りすぎた。鼠はものすごい勢いで走って行った。ズラブは警戒をしたのか、鼠が前から来た時に足を止めた。同じくネオラも足を止めていた。

「……なんだ、鼠か……」

ズラブはそう呟いた。

「数匹いたね。まさかいきなり来るなんて……」

「なんか奥に天敵とかでもいるのかな。それともただ普通に通りすぎただけかな」

「普通に通りすぎただけじゃないの？ズラブ」

「……そうかもね」

「まあ、あまり気にしないでとりあえず進もうよ」

ネオラがそう言うと、ズラブは再び歩き始め、二人は再び進んだ。

しばらくすると、広い下水道へと出た。そこは太い通路で、中央には太い下水の川がある。下水からは、少しの悪臭が漂う。

「こんな場所……初めて見た……」

ズラブは興味深々になっている上に、わくわくしていた。それに
対し、ネオラは少しの悪臭で苦しんでいた。

「そ……そうね……。ねえ……ここ早く抜けない？私……こういう
匂いところという所……無理だし苦手……げほっ、げほっ」
「あっ！？……うん。じゃあ早歩きしようね」

ズラブはネオラが少しの悪臭に苦しんだために咳きこんだ様子を見
て、焦り出した。

「……うん。そうね」

ネオラがそう言うと、二人は早歩きしだした。ズラブは歩きなが
らも未だに初めて見た空間の光景にとらわれていた。

それからしばらくした後も、二人は下水道を歩いていた。と、そ
の時だった。また鼠が前から通りすがっていった。さっきと同じよ
うに、ものすごい勢いで走って行ったが、今度はさっきの半分であ
る2匹である。

「また鼠か……何処を住処にしているんだろう……。さっきの四匹
とは赤の他人というような関係かな」

ズラブはそう言った。

「さあ……そんなのは分かるわけ無いわよ」
「……やっぱり天敵とかいるのかな」
「……さあね……いなければいいけど。でも私はただ通りすがった
だけだと思っわよ」

ネオラは少し怖がり出した。そして次に、

「……それとこんなところでそんな話止めて……考えたくもない」と言った。

「……わかった、ごめん」

「とりあえず、早くこの階の下に行こうよ。」

「……そうだね」

ズラブがそう答えると、二人は再び歩き出した。

それから数分後、また両側に数本もの太いパイプ（下水道管か水道管）が張り巡らされている太い通路へと出た。そこをしばらく歩いていると、その下の避難シエルターへの階の扉の前について。扉は非常に嚴重である。避難用のシエルターだからである。

「次はシエルターだね……この扉もパスワードとかかかっているの？」

「かかっていないわよ。今開けるね」

ネオラはそう言うと、扉のコントローラーをいじって扉を開け、二人は階段を降りて、下へと行った。階段を下りると、その前には先ほどと同じような非常に嚴重な扉がある。同じように扉のスイッチを押して扉を開けて入った。

シエルターであるためにほとんどが部屋で、通路には扉が多い。ネオラは、この避難シエルターの階の地図を取り出し、ズラブに渡した。

「ここは上ほど迷路じゃないね。それにここから最深部への階段は近いし」

ズラブは、この避難シェルターの階の地図をちらっと見て、そう言った。

「そうね。だから急いで走らない？」

「良いよ。じゃあ走ろう」

ズラブはネオラの意見に賛成した。そして、2人は走って最深部への階段へ向かった。ネオラはズラブが困らないように、ズラブと同じペースで走った。

最深部への階段の扉の前に着いたのは、それから比較的すぐ後のことであった。

「いよいよ最深部ね」

「うん」

「じゃあ早速降りよう」

「だね……」

ズラブがそう答えた直後、ズラブはスイッチを押して扉を開け、姉を先に入れた。そして次にズラブが入った。ズラブが入ると、二人は階段を降りた。階段を降りると、目の前には大きく嚴重な扉があった。

「お姉ちゃん、いよいよ最下部だね。」

「うん。そうね」

ネオラはそう答えた直後、扉のスイッチを押して扉を開けた。

扉の先は、洞窟であったであった。今までは人の手で作られた通路であったが、それとは異なっており、ごつごつとした岩の洞窟である。

「最深部、こうなっていたんだ……」

ネオラはとても驚いていた。ズラブも同じく、とても驚いていた。

「自然の洞窟だね。つまり水路を造った人達が水路の建設中にこの洞窟を偶然見つけてしまったんだね」

「さて、次は奥に行こうよ。じゃあ次は私が先頭になるから」

「うん、じゃあ地図は返すね。本当にここに行きたがっていたのはお姉ちゃん自身だしね。それに地図に書かれていた通りこの奥がゴールだから。ゴールまではお姉ちゃんに任せるよ」

ズラブはそう言った直後、ネオラに地図を返した。

「ズラブ、お疲れ。じゃあ行こう」

「うん」

二人は洞窟を歩いていった。この洞窟は、ビトウラの地下水路を造った人達が偶然見つけてしまったものである。ビトウラ自体は比較的新しい町であるため、地下水路と洞窟共に昔からほとんど変わっていない。それに洞窟は意外と広い。ネオラはゴールである奥が気になっていて、うずうずとしていた。

「また洞窟に行くなんて驚いた……」

ズラブは突然そう呟いた。

「うん。お父さんとお母さんも一緒にいれば良かったかも」

「いや、今度父さんが帰ってきたときに家族で行こうよ」

「あっ、それ良いね。じゃあそうしようよ」

ネオラはズラブの意見にとっても納得した。

「うん。でも次、父さんが帰って来るのはいつだろう」

「多分そう遠くはないね」

「まあ、でもいつでも良いよ、俺は」

「でもいつか絶対一緒に行こうね」

ネオラは笑顔でそう言った。それに対してズラブは、

「うん。そうだね」

と答えた。

奥に着いたのはそれから数分後であった。奥には小さな湖がある。水が湧いているのである。

「ここがゴールだね」

ズラブはそう言うと、しゃがんで水に触れていた。とても冷たい。しかも、水の透明度は非常に高く、底が見える。湖の底は、水色の石英である。ネオラは、ペンライトを取り出し、その光を底に当てた。すると、湖は水色に輝いた。二人は綺麗さと神秘さのあまりに言葉を失った。日曜日に家族で行った鍾乳洞にあった滝の下の池よりも広い上に、光を当てると違う色を輝かせていたからである。

「この洞窟の奥の湖の底も、先週行った鍾乳洞の滝の下の池の底みたいになっていたのね」

ネオラは驚きながらそう言った。

「俺も同じように思った。しかもここは水路の下だから」

「うん。それに今までここに来た人って、私達と私の友達以外と水路を造った人達以外に何人いるんだろう」

「さあ……、それは俺にもわからない」

ズラブはそう言った直後、再びしゃがみ、湖の水を飲んでみた。

「ズラブ、その水おいしい？」

ズラブが水を飲む様子を見たネオラは、ズラブにそう質問した。

「うん。それに冷たいよ」

「じゃあ、私も飲んでみる」

ネオラはそう言うと、ペンライトの明かりを消してペンライトをしまい、しゃがんで水を飲んでみた。

「本当ね……。なんか疲れが飛んじやった」

「俺もだよ。それに喉も乾いていたから」

「喉ね……。私も乾いていたわ」

「まあ……。ここまで来たからね。それとわざわざ遠くの地下道の入口から入った理由がわかったよ。家は比較的中央広場から近いから家の近くの地下道の入口から入ると地下道の中央に早く着いてしまっうからなんだよね。でも遠くにあるあの入口からは今まで出入りしたことがないし、あそこからだ、中央より少し遠くなる上に、あそこからの道のりを通った事が無いから冒険的になるからだよね。」

ズラブは、ネオラがあその出入り口から地下道に入った理由を理解した。

「そうよ。わかったのね」

ネオラは笑顔でそう答えた。

「うん……そうだよ」

「さて。ここで少し休まない？ズラブ」

「良いよ」

「じゃあ休もう」

ネオラがそう言うと、二人は湖を眺めながら休み始めた。周囲の空気は涼しく、丁度良い温度であった。

episode - 2 ひよんな出会い&It・後>

それから5分後、ズラブは後ろに何かがいる事にディテクティン
グというテレパシーで気付き、後ろをすぐに振り返った。そこには
スピアーラットがいた。

スピアーラットとは、このアルカントdよりも内側にあるアルカ
ント星系の第3の惑星、アルカントcに住む大型の鼠で、全長は1
mもある。尾の先端は硬くて鋭く、槍のようになっている。しかも
性格は凶暴で荒い。動きは素早い上に人を襲って食べる事があるた
め、大変危険な生物である。

ズラブは非常に緊張し出した。

「お姉ちゃん、後ろ!!」

ズラブはすぐ姉に危険を知らせた。すると姉は素早く振り返った。

「スピアーラット……これは危険ね……。でもどうしてここに？」

ネオラも非常に緊張し出した。

「とりあえず、ここは俺がなんとかする」

「ズ、ズラブ!スピアーラットは危険よ!!熊なんかよりも遥かに
凶暴で荒くて素早いし、人だって襲うわ!!」

「大丈夫、任せて」

ズラブはそう言うと、スピアーラットと目を合わせた。スピアー
ラットは唸っている。ズラブの緊張感は徐々に増した。遂には限界
に達した。

と、突然、ズラブの頭の中で一つの超能力が目覚めた。ズラブは

それをすぐに試みた。それはライザー？であった。ライザー？とは攻撃超能力の雷系の1段階である。ズラブはそれを”キャノン”という直線状の波動形状にしてスピアー・ラットに飛ばした。右手からは小経口の放電の弾が発射し、スピアー・ラットに当たったのである。感電したスピアー・ラットは体中が痺れ、目眩に陥って沈んだ。

「ズラブ、これってまさか新しく覚えた超能力!？」

ネオラはとても驚いていた。

「うん、今いきなり覚えた……」

「やっぱり本当に闘う気なの!？」

ネオラは少し深刻な表情になっていた。

「うん、だから任せて。とりあえずお姉ちゃんは逃げて!!それにこの洞窟にこいつ以外、危険な動物はいないよ!!今テレパシーで確認してみた。さあ、今すぐ逃げて!!」

ズラブがそう言った直後、ネオラは早く、逃げた。しかし、ズラブの事が心配でたまらなかったため、少し近くの死角に隠れて、そこからズラブの様子をこっそりと見た。

スピアーラットは目眩が軽減したため、少し意識を取り戻してズラブを再び睨んだ。ズラブはテレパシーでスピアーラットに何度も「お願い、大人しくなって」と言ってみたが、スピアーラットは全く大人しくなるうとはしていない。ただ、ズラブの事を睨んだ。今度は鋭い爪を立てている。

ズラブは決心をし、スピアーラットに「さあ、かかって来い」とテレパシーで言った。そう言われたスピアーラットはズラブに飛びかかった。しかしズラブは素早くたため、スピアーラットは湖に落

ちてしまった。

湖に落ちたスピア ラットは、ばたばたと溺れていた。

しかし、数秒後、湖から勢い良く上がり、湖から出た。すぐに回復したのだった。湖から出ると、再び唸った。しかもさっきよりも凶暴になっている。そしてズラブに飛びかかった。だが、ズラブはまた見事に横に避けた。

「やっぱり熊よりも素早い……」

ズラブは恐れながら言った。言った直後、スピアラットはまたズラブに飛びかかったが、ズラブはまた避けた。その後、ズラブは同じ事を5回繰り返した。

そして、5回繰り返した後、ズラブはついにスピアラットのあまりの早さについて行けなくなり、飛びかかったら素早く避ける自信をなくした。そしてそう考えている内に、スピアラットはまた飛びかかってきた。しかしズラブは避けず、スピアラットを素早くつかんだ。スピアラットは、投げ飛ばされないように、両後脚でズラブの両脚を挟んだ。ズラブの両脚はスピアラットの両脚に挟まれているため、動けなくなってしまった。逃げることもできない。ズラブはただ、スピアラットと両手同士（スピアラットは両前脚）で抵抗し合っていた。スピアラットは牙を出している上に腕の力は強い。

ネオラはそんなズラブを放っていられなくなり、

「ズラブ、もう止して!! 危ない!!」

と、ズラブを助けに死角から飛び出て駆け付けた。ズラブは素早くネオラの方を見て、

「危ないから来ないで!!」

と、ネオラに言った。その時、スピアーラットはその隙に、ズラブの左腕に強く噛みついた。

「うっ！！」

ズラブはかなりの痛さに苦しんだ。血まで流れている。ズラブは地面に倒れてスピアーラットを押しつぶし、スピアーラットの口を左腕から離そうとした。ズラブは5度もスピアーラットを叩きつけた。しかしスピアーラットは、口をズラブの左腕から離そうとしない。

「ズラブ、私が離すわよ！！」

ネオラは非常に心配しながらそう言った。スピアーラットに噛まれて血が流れているズラブの左腕を見てしまったからである。しかしズラブは、

「だから来ないで！！」

と言った。

「ズラブ、死ぬわよ！！それで良いの！！」

ネオラは必死でズラブを説得しようとした。しかしズラブは、それでも言う事を聞こうとはしなかった。

「だから手を出さないで！！お姉ちゃんまで巻き込まれて酷い目に遭うよ！！」

ズラブはそう言った直後、カウオシス？を使ってスピアーラットを目眩に陥らせた。しかし、スピアーラットは目眩になってもまだズラブの左腕に噛みついていて、決してズラブの左腕から口を離そうとしなかった。

ネオラはついに我慢が出来なくなつて、ズラブの元に早く行つて、スピアーラットをズラブから全力で離し、壁に投げつけた。壁に投げられたスピアーラットはすぐに立ち上がり、今度はネオラの方を睨んだ。

「……言つたでしょ、手を出したら酷い目に遭つて」

ズラブは左腕を押えながら言った。血はもう大量に出血している。当然、激痛が左腕中を走つた。次の標的にされたネオラは恐れながら少しづつ後ろに下がった。

「……ど……どうしよう……ズラブ……。やっぱり私……手を出すべきじゃ……なかった……よね……？」

ネオラはもう、どうしたら良いのかわからない気分だった。スピアーラットからは逃げても当然、追いつかれて捕らわれる。そして下手をしたら食われたりして死ぬ。ネオラが恐れながら少しづつ後ろに下がりながらも、スピアーラットは唸りながら少しづつ前に近づいて行った。と、ズラブはその隙に、ライザー？を”キャノン”として飛ばし、スピアーラットに当てた。感電したスピアーラットは、狂いながら吠えた。ズラブは更にライザー？をキャノンとして連続で素早く3回当てた。スピアーラットはあまりのも痺れに動けなくなつてしまった。

「今の内逃げよう」

ズラブはネオラにそう言った直後、ズラブとネオラは走って逃げ出した。しかし、スピア ラットはすぐに回復しズラブに全力で猛突進してきた。ズラブはすぐに気付き、後ろを振り返った。ズラブはすぐに避けた。スピアラットはズラブの2m前で爪を使って止まり、ズラブの方を振り返って、ズラブを見つめながら吠えて威嚇した。

「くそっ……やっぱり無駄だったか……」

ズラブはそう言った後、早歩きで後ろに下がって行った。案の定、スピア ラットは同じペース近づいて来る。ズラブの体はもう、左腕の怪我の痛さなども含めて、限界に近づいていた。そのため、素早く避ける自信など無かった。ネオラはただ、ズラブの様子を不安になりながら見ていた。

だが、後ろの事など何も分からなかったズラブは、一步後ろにある石を踏んでしまったため、地面に転倒した。スピアラットはその隙に勢い良く飛び掛かった。

ズラブは全力をかけて勢いよく転がって避けた。と、避けたその時、ネオラの横からライザー？よりも数倍太い直線状の稲妻が通り、スピアラットに命中した。スピアラットは倒れた。ネオラは自分の横を振り返った。少女が歩いて来た。腰までの長さもある暗いダークフロンツ金色の長い髪、緑色の目をした可憐な姿の美少女であった。

ズラブは彼女を見て何かをぱっと思いついた。そう、彼女は中央広場を通った時に見た、妻と子供3人連れの商人の3人の子供の内一人である、走っているズラブとネオラの事に気づいてこちらを見つめた銅色の髪の娘であった。

年齢は9〜10歳だろう。それに武器は何も持っていない。

その少女は急いでズラブの元に駆けつけた。そしてズラブの前でしゃがみ、

「大丈夫!？」

と心配そうに質問した。ズラブは、

「うん、大丈夫……」

と答えた。

「怪我、ひどいよ……お兄ちゃん」

「いや、自分で治せるんだ。実は不思議な力を持っているからね」
「無理しないで……」

少女はそう言うと、ズラブの左腕の怪我の上に手をかざした。すると、ズラブの左腕の怪我は治り、体力も回復した。それはズラブが持っている補助超能力、ライフヒール?の次段階、ライフヒール?だった。ズラブはそれを見て驚いた。「まさかこの子も超能力を駆使しているのか?」と。

「まさか君も超能力あるの……?それにさっきの光線も超能力……?」

「多分……」

少女がそう答えた直後、ネオラが駆けつけて来た。

「ズラブ、大丈夫!？って……」

ネオラは、少女によってすっかり治ったズラブの左腕を見て驚い

た。

「大丈夫。それにスピアラットはこの子が倒してくれた。しかも俺の怪我の治療までもやってくれた……」

ズラブはネオオラにそう言った。

「お兄ちゃん、名前は……？」

突然、少女はそう質問した。

「ああ……俺はズラブ。この町に住んでいる。そしてこっちが姉のネオオラだ」

ズラブがそう答えた後、少女は、

「私はユネ・ミランシヴィリ……。ピテュートって国から来たの。お父さんとお母さん、そして一つ年上のお兄ちゃんと一つ年下の妹と一緒に、ここに旅しに来ているの……。お父さんとお母さんが商人だから」

と、自分を紹介した。

「両親は商人なんだ……。でもどうしてここに駆けつけてきたの？」

疑問が一つあった。それはユネがここに駆けつけてきた理由である。

「実はあなた達2人がこの町の真ん中の広場を走って行くのを見たの。それからずっとあなた達2人の事が気になってしまったけど、

あなた達2人が危険な目に遭う様子が頭の中で映って……それで、家族が見ていない隙に走って……そしてここまで来たの」

「でも、でもどうやってここまで道の道が分かったの？」

「……不思議な力で道が分かったの……」

それはいずれも、ズラブも持っている能力であった。

「でも、助けてくれてありがとう……。あっ、あと良ければ一緒に上までに戻らない？」

「……ありがとう。」

ユネは笑顔でそう答えた。

「じゃあ行こう。君の親もきつととても心配しているよ」

「あと、その鼠も一緒に良い……？」

「えっ？どうして？」

「その鼠、はぐれてしまつて悲しんでいるのが分かるの……。それに今は弱っているだけ……。それにこの鼠が荒々しくなるのは人間が敵意を向けるからだと思つわ……」

ズラブはそう言われた直後、テレパシーでスピアーラットの心を読んだ。

このスピアーラットは妻と子供が餓死してしまつたのであった。それから近くのオアシス都市に立ち寄り、更にはその都市に立ち寄っていたどこから来た集団の商人達の宇宙船にたまたま乗つてしまつた。が、ばれてしまい、その集団の商人達は、スピアーラットに散々暴行を振るつたのであった。そして、集団の商人達はそこにこのビトウラに寄り、そのついでにこの洞窟に捨てられたのである。それに、元々は比較のおとなしい性格であつた事も分かつた。

凶暴になったのは、集団の商人達に散々暴行を振るわれからである。それに、例の集団の商人達がこの町に来たのはつい1週間前、つまりズラブの誕生日の日だった。

「良いよ」

ズラブはそう言うと、スピアーラットを負った。次に、

「じゃあ行くっ」

と言って。歩き出した。3人は、町に戻るために、自分たちが入った地下道の出入り口へと向かった。

それからしばらくが経った後、3人は地下道の中央の部屋に出た。と、突然、ズラブはあることが気になり出した。ユネが持つ超能力の事である。

「そう言えばあの電撃はいつ覚えたの？それと回復も」

「あれは、最近覚えたの……」

「最近なんだ……。でも、その不思議な力を持っているのは俺と一緒にだね」

「ズラブさんは何を持っているの？」

「回復と病気などの治療と相手を混乱させるのと電撃。俺はこれらは最近覚えたんだけど。それ以前は人とか動物と心で会話をするとか心を読むとかそんなのだけ」

「私とほとんど同じね」

ユネがそう答えた直後、ズラブはこの時ふと何かに気づいた。それは、ユネが故かずつと不安そうに喋っている事である。実は、ユネが親元から勝手に離れたからである。ユネは親が怒る事を恐れて

いるのである。

「ちなみに言うと、電撃以外は先週、家族でハイキングに行った時に覚えたんだ。熊に襲われた時にね」

しかしズラブはそんな事を気にするのをすぐにやめて、普通に喋った。

「そうなんだ……」

「でも、俺も君もまだ色々隠し持っているかもしれないよ」

「うん……」

「ねえ……そう言えばこのスピアラットはどうするの？」

「飼う……。もし親がそれを認めないなら元の住んでいた砂漠に帰す……」

ユネは、少し悲しそうに答えた。もう孤独な動物をどうしても1匹にしたくなかったからである。

「砂漠って……ところでこの町にはいつまでいるの？」

「今日、昼過ぎには離れるの。実はここの港に宇宙船を停めているの」

「でも次は何処に行くの？」

「分からない……。でも私の親なら飼うのが無理になっても元の砂漠に帰すために元の砂漠に寄らせてくれるわ、絶対に……」

ユネはどうしてもスピアラットを1匹にしたくはないと、底から思い込んでいた。

「どうしても飼いたいんだね。でも飼えると良いね」

ズラブは笑顔でそう言った。ユネは、

「うん……」

と、小さめな喋り方で答えた。

それからさらに数分後、3人は入った地下道の出入り口から出てきた。外はもう昼の直前なので明るい。今まで暗い場所にいたため、日が、よりまぶしく見える。ズラブはスピアーラットを降ろした。

「ズラブさんとネオラさん、ここまで一緒に本当にありがとう……」

「ああ……君こそ助けてくれて本当にありがとう。でも君にとつては大きな迷惑でもあったね……。家族から勝手に離れる羽目になったから……。あと……一緒に家族を探して家族の所に戻る？」

「家族が今いる場所は不思議な力でわかるから一人で戻れる……。それに今日の事はあまり気にしないで……」

「悪いのは今日ここに来ると決めて本当に来た私なのかもしれない……。ズラブもユネちゃんもごめん……。本当に……」

と、突然ネオラが、がっかりしながら言った。

「……いや、俺が悪いんだお姉ちゃん！俺があの日ハイキングのときに最初からテレパシーで周囲の危険を探知していたら……」

「……良いよ……。もう過ぎたことでしょ……」

ネオラはそう優しく言った。

「でも君……本当に良いと思っているの？」

「うん……もし私が居なかったらこの鼠はずっと暗い中で独りぼっ

ちのままだったかもしれないし」

ユネはそう言った直後、スピアーラットの怪我に手をかざし、スピアーラットの怪我を治し、さらには体力も回復させた。スピアーラットはすっかり元気になって立ち上がった上におとなしくなっていた。

「もうこの鼠は大丈夫よ。それと言い忘れたけど実は私、将来は親と同じように商人になってさまざまな国を旅し廻るのが夢なの。この広い銀河系とマゼラン雲をいつか旅し廻りたいの」

その言葉を聞いたズラブはすぐに、

「あつ、俺も様々な国を旅し廻るのが夢なんだ！もしいつか夢がかなったら必ずどこかで会おうね……」

と嬉しそうに言った。

「……うん！」

ユネは嬉しそうに答えた。

「じゃあね。ユネ。またいつか会えると良いね」

ズラブは最後にユネの手を両手で包んでそう言った。

「そうね。私も……じゃあね……」

ユネは最後にそう言って、スピアーラットと共に走って行った。ズラブはその後も、ユネの事ばかり考え続けていた。好きになった

のである。ユネが離れた後は、不安な顔になっていた。

「……ズラブ、もしかしてあの子の事好きになったのね……」

ネオラはズラブの顔を見てそう言った。ズラブは、

「うん……」

と、素直に答えた。

「……あの子もズラブと同じように超能力を持っていたなんて驚いたわね。それにとても優しかったわね」

「本当にまた会えるかな……」

ズラブはまだ不安な顔であった。

「夢を叶えればいいのよ。前を向いてね。したら必ず会えるわ」

ネオラは、ズラブの頭を撫でながらそう言った。

「うん……そうだね」

「じゃあ私達は家に帰ろう。お腹も空いたところだしね。それにいつまでも心配ばかりするなんてズラブらしくないわよ」

「うん。……絶対に夢を叶える！」

そう言ったズラブの心は立ち直った。

「やっと立ち直ったわね。じゃあ帰ろう」

「うん」

そして二人は、家へとゆっくり歩いて行った。ユネは、帰り道のどこにも中央広場にもいなかった。家族が、そことは別の場所にいたからであろう。

それから十数分程後、ズラブとネオラは家に着いた。

「ただいま、お母さん」

ネオラはそう言って先に入った。次に、後ろにいたズラブが入った。

「あらお帰りなさい。何か問題とか起こらなかった？」

「ううん……起こらなかったよ」

ネオラはスピアラットに襲われた事を黙っておいた。

「所で2人は何処に行ったのかしら？」

「地下の一番下よ。一番下は洞窟で、その一番奥に底が全て水色の石英の小さな湧水の湖があるの」

「地下の一番下ね……、そういえばお父さんが昔行ったわね。私は行ったことがないんだけど」

「じゃあ今度お父さんが帰ってきたら一緒に行かない？」

「良いわよ、もちろん」

母は笑顔で答えた。

「じゃあ絶対に行こうね」

「そうね」

姉は母と楽しそうに話していた。もはやスピアラットに襲われ

た事を忘れてるように見えた。一方でズラブは、左腕を見ながらユネの事を考えた。あの時スピーアラットに噛まれてできた大きな怪我は、ユネが治してくれたので当然、とても淡い傷跡だけが残っている。母はそんなズラブを見て、

「あらズラブ、左腕ばかり見ているけどどうしたのかしら？怪我でもしたの？」

と質問した。ズラブは少し焦りながら、

「あつ……何でもないよ。それに怪我なんかしていないし……」

と答え、スピーアラットに襲われて、さらに噛まれて怪我した事を黙っておいた。

「ならよかったわね。それと何か思い込んでいるように見えるけどどうしたの？」

「ああ……今日行った場所の事を考えているんだ。とてもいい場所だったから」

ズラブはユネの事も黙っておいた。

「あらそう……。でもお母さんも絶対に行くわね。次お父さんが帰ってきたらね」

「うん、そうだね！」

「じゃあお母さんは今からお昼ご飯を作るわ。多分、すぐに作り終わるわね」

「じゃあ、俺は部屋で休んでいて良い」

「もちろんよ。ズラブもネオラも今は休んだ方が良いわよ。とても疲れているように見えるからね」

「じゃあ、私も休むね」

ネオラがそう言った後、二人は、自分の部屋へと急いで行った。ズラブは部屋に着くと、すぐにベランダに出て、そこにあるハンモックの上に座って、宇宙船の港を見てみた。宇宙港は、漁船などを止めている普通の港の間にある。宇宙船の港は2本だけであるが、宇宙船が5隻だけ停まっているのが見える。しかし、ユネのはどれか分からない。ズラブは船を見て、「とても羨ましいな。」と思っていた。

それからしばらくが経った後、ネオラが来た。昼食が完成したので、ズラブを呼びに来たのである。ネオラはズラブを軽く叩いて起こした。叩かれたズラブは目を覚ました。

「お姉ちゃん……何……？」

「もうお昼ご飯が出来たのよ」

「あつ、そうなんだ……」

ズラブはそう言うと、ハンモックから起き上がった。まだ少ししか寝ていないので、とても眠そうだった。

「ズラブ寝ていたのね。私は寝なかつただけだ」

「まあ、あれだけ闘ったからね、俺は……」

「そうだったわね」

「うん……。でもあの時は死ぬかと思つたし……」

「でもユネって子が助けてくれたから本当に良かったわね……」

「そうだね……」

ズラブはそう言うとハンモックを降りて、食卓へと向かった。ネオラは後ろを付いて行った。

食卓の上にはもう、料理が全部置いてある。母が疲れた2人のた

めにやったのである。

「あらズラブ、寝ていたみたいね」

母はズラブの眠そうな顔を見てそう言った。

「うん、少しね……」

「たっぷり動いたみたいなのね」

「そうだね。」

「じゃあ食べましょ、二人共」

母がそう言うと、ズラブとネオラは自分の席に座った。そして三人でばらばらで、

「いただきます」

と云って、食べ始めた。ズラブは食べながらユネの事を考えた。だが、食べ方は落ち着いていた。

「ねえズラブ、今日はこの後、もうずっと休むつもりなの？」

突然母がそう質問してきた。

「そうだね。とても疲れたから。もうくたくた……」

「そう……。ところで今夜、私が天体望遠鏡で夜空を観ても良いかしら？まだ使ったことがないのよね」

「うん、もちろん良いよ」

ズラブは笑顔で答えた。

「ありがとう……」

「じゃあ私も観ていいかな？そういえば私、まだズラブの天体望遠鏡を使ったこと無いからね」

と、突然、ネオラが母の言葉に乗ってそう言った。

「もちろん……お姉ちゃんも観て良いよ。とりあえず俺はもう休むから」

「今日はお疲れ、ズラブ」

母は笑顔でそう言った。

「ありがとう、母さん。今日の夜はたつぷり星空を観てね」
「やっぱりズラブは優しいわね……本当にありがとう」

母はさっきよりも笑顔で答えた。

「そうだね……。母さん」

ズラブは照れながら答えた。

「私、実は他の惑星とか宇宙に行ってみたいのよね」
「俺と同じだね、母さん！いつか一緒に行こう！」

ズラブはとても嬉しそうに言った。

「あら、そうね。本当にそうなると良いわね」

「うん。夢は絶対に叶えようね」

「本当にありがとう……」

母はさつきよりも嬉しくなっていた。ズラブも同じくらい嬉しくなっていた。

それから昼食が食べ終わった後、ズラブは自分の部屋のハンモックに戻った。ズラブはハンモックに座って、宇宙船の港を見た。まだ宇宙船は5隻だけだった。

「ユネ、もうそろそろ行っちゃうのかな……」

ズラブは少し寂しそうに言った。と、その時、1つの宇宙船が浮き出した。

「あっ……」

ズラブはその宇宙船に精神を集中してみた。中にはユネが乗っていたのであった。つまり、ユネの一家の宇宙船であった。ユネは、あのスピアーラットと共に、自分の部屋から外を見ている。船はさらに上へと上がっていった。

「そっだ！」

ズラブはあることにひらめき、ハンモックからすぐに降りて、急いで屋上へのはしごを登り、屋上へと上がって屋上の真ん中に立った。ベランダよりもずっと見晴らしが良い。ズラブはユネの一家の宇宙船に向かって手を大きく振った。一方でユネはそんなズラブに気が付き、

「あっ、ズラブさん……。分かっていたのね」

と言って、すぐに手を振った。そして、ユネの一家の船は、広い

大空へと飛び立った。ついには見えなくなってしまった。

「ユネ……いつかまた会おうね」

ズラブは笑顔でそう呟いた。

しかしこの日の夕方、ズラブが観た悪夢が本当の事になるのを、
誰一人も知らなかった……。

episode - 3 突然の脅威&It:前> ; (前書き)

《ステータス》

ズラブ・リュビナゼ

年齢：12歳

種族：人間（アルカント人）

職業：初等部学生

武器：無し

【独自に駆使している超能力】

<攻撃>

ライザー？

<補助>

ライフヒール？

ライフリカバリー？

<状態異常>

カウオシス？

episode - 3 突然の脅威 & 1 t ; 前 & g t ;

その日の夕方、謎の艦隊がアルカントdの付近に超空間通過ドラ
イブ（ワープ航行）で全艦一斉に現れた。

その艦隊は、戦艦3隻、母艦9隻、巡洋艦18隻、駆逐艦27隻、
小型駆逐艦36隻、輸送艦27隻の総120隻で編成されている。

艦隊はただ真っ直ぐとアルカントdへと向かって行った。だが、
ディオシード連合皇国軍の艦なのかどうかは分からない。

その頃、例の艦隊から一番近くにある軍事軌道コロニー、アルカ
ント軍第2軍事軌道コロニーは、艦隊の存在に全く気付いていな
かった。

軍事軌道コロニー、それは軍の軌道コロニーかつ要塞である。無
数の砲台などで武装されており、殺伐とした感じを放っている。

それにこのアルカント第2軍事軌道コロニーにはズラブの父、ダ
ヴィドがいる。もちろん父も例の艦隊の存在には気づいてはいない。
彼は、息子のズラブとは違って超能力を駆使していないので存在は、
誰かが知らせるか、司令部がコロニー中に警告をしない限り知るわ
けがない。

ダヴィドはその頃、コロニーの第3区にある第9集合兵舎の自分
の部屋のベッドの上に座っていた。休んでいるため、アーマースー
ツは脱いでいる。

彼は家庭の面では父親であるが、軍の面ではディオシード連合皇

国軍アルカント王国軍第2部第23戦闘攻撃大隊に所属しており、階級は中尉で副隊長の一人である。

彼は色々考えていた。特に家族の事である。なぜなら今日は、あのハイキングから丁度一週間経ったからである。その中で彼は、ハイキングの事とズラブと彼が持っている超能力の事を最も考えていた。

彼はズラブの事を、「奴はあのハイキングの時に超能力を覚えた後はどうしているのか。そして超能力と共にどう生きているのか」と考えていたのであった。彼は軍学校時代の教習で、超能力の事をほぼ全て知った。それに、超能力に対して強い興味と関心を昔から持っている。子供の頃から超能力を駆使している人間や他種族に憧れていたからである。しかし、自分はその力が微力であるために一つも駆使していない。

だが、微力や弱力の者、最初から駆使していない種族は、サイコクオーツや特殊な修行によって得る事や、力を増強する事ができる。しかし、それは命と身体に大きく関わる物であり、下手をしたら死んでしまうという大変危険な物である。それでも彼は、今でも憧れ続けている。

ダヴィドはベッドに座るのが飽きたのか、立ち上がってベランダへと出た。ダヴィドは一番上の階の部屋に住んでいるため、どの階の部屋よりも第3区の光景が見渡せる。

軌道コロニーには、惑星のような環境が作られている空間がいくつかある。その空間一つの単位は“区”である。一般の軌道コロニーなら、都市だけではなく湖や森林なども作られているために、惑星にいるかのように思える。軍事軌道コロニーの場合は、軍人達等が暮らす居住街や軍人の為の娯楽施設などがある居住都市、軍学校や研究所が集結したアカデミー都市などである。

湖や森林はある物の、徹底的な計画的に作られているために、無機質さが少し感じる。

ダヴィドは、長く軍に就いているため、この都市の光景には当然飽きていた。

それだけではなく、コロニー自体にも飽きていた。

光景を見ていたダヴィドは突然、服のポケットから煙草とライターを取り出した。彼は煙草を咥えて煙草の先端に火を付け、煙草を吸い始めた。煙草を吸い始めた彼は、再び家族の事を考えた。

とその時、携帯電話が鳴った。

「ん、何だ？」

ダヴィドは携帯電話を服のポケットから取り出した。それは親友であるレイダリからの通信であった。レイダリはエディワーム出身の親友であり、ダヴィドとは最も仲が良い。別の部隊に所属している物の、通信による会話はいつもしている。ダヴィドは通信をとった。

「ああレイダリ、どうしたんだ？」

「ああダヴィド……今退屈しているのか？」

レイダリは暢気に話した。彼は暢気な性格であるからである。

「そうだな……。暇だ。レイダリもひよっとして同じなのか？それにそっちの部隊も何もすることが今はないのか？そもそもお前は隊長なんだろ」

実はレイダリは所属する小隊の隊長である。彼は第15戦闘攻撃小隊に所属しており、階級は大尉である。

「ああそうだ。何もすることがないな。部隊もさ。だからオレは今

休んでいるさ」

「全く同じだな」

ダヴィドは少し笑ってそう答えた。

「……あつそつだ。聞き忘れたけど奥さんとお子さんは元気だったのか？そう言えばオレは警備をしていたからな、あの時は。意外と長い警備だったぜ」

彼はダヴィドが家族の家にいた間はほとんど、警備をしていたのであった。それに、ダヴィドとは通信を取っていなかった。

「相変わらず元気だったよ。奥さんも娘も息子もな」

家族の話になると、彼は少しずつ気分がのってきた。

「ああ……。でも来週オレは遂に久しぶりの休暇がとれる。次はオレが休む番になるな。もちろんダヴィドみたいに自宅に帰るよ」

「そうか……。まあ、自分の好きなことに出来る限り専念するんだぞ。意外と短い期間だからな。」

「おう……。あつ、待てつ、ちょっと待ってくれ。そういえばこれも聞くのを忘れていたな。これで終わりだが」

レイダリはもう一つ質問をするのを忘れていたため、慌てて言った。

「ん、どんな質問なんだ？」

「息子さんの12歳の誕生日プレゼント、何にしたんだ？そういえばこれも聞いていなかったな」

「あつ……。そう言えばそれは俺からも言い忘れていたな……。14万

6000グレドもする高級な天体望遠鏡だ。」

「じゅ……14万6000グレドもした天体望遠鏡だと!?……しかし良い物をプレゼントしたんだなお前。あとそれは全部自分の金で買ったのか?」

レイダリは、ダヴィドが息子のズラブにプレゼントした天体望遠鏡の事を聞くと、非常に驚いた。

「いや……親父とお袋、奥さんの3人と一緒に買ったさ。まあ、半分近くが俺の金だけどな。収入が一番多いのは俺だしよ」

「そうか。息子はとても喜んでいたのか?」

「ああ。でも予想以上に喜んでいたな」

「まあ、息子の笑顔も見れたようだから良かったじゃないか」

「そうだな……」

ダヴィドは笑顔でそう答えた。

「じゃあ良かったな……じゃあ、俺はもうこの辺で切るぞ。じゃあな」

「おう」

ダヴィドがそう答えると、レイダリは通話を切った。ダヴィドは携帯電話をポケットにしまい、煙草を再び口に啜えて吸った。しかし、今まで退屈だった気分が、親友のレイダリと楽しく話したのか少し嬉しい気分になっていた。軍での忙しい生活を癒してくれるのは、家族や友人が主であるからである。

彼は、またいち早く家族に会いたいと思っていたのである。

その頃、司令部は常に動いていた。司令部は何と言ってもコロニーの脳かつ第2部全軍の脳であるからである。

司令部の部屋、オペレーションルームは円形の広大な部屋で、断面は椀のようになっている。中心には巨大なホログラムがあり、第2軍事軌道コロニーとその周囲の立体映像が主に映されている。

オペレーターの数は多く、彼らはアーマースーツを着たまま作業をしている。ただし、頭部の装甲はほとんどが脱いでいる。だが、武器は身のすぐ側に置いてある。もし、近くと部屋で危険が起こった時の場合の為である。基本的に全軍の全兵士は全員、装甲を着る事と武器を持つことが義務されている。

その時、ある一人の男性オペレーターに第30偵察中隊の隊長からの連絡がかかった。中隊は現在、コロニーから543km離れた場所を警備している。男性オペレーターは、通信を素早く取った。

「こちら司令部。どうかしましたか？」

男性オペレーターがそう言った直後、

『こちら 30-01（ローサーティ・ゼロワン）。5km先に謎の艦隊を確認！』

と、隊長が少し焦り気味で答えた。

「それはディオシードの艦ですか？それと艦の数を教えて下さい。」
『戦艦3隻、母艦9隻、巡洋艦18隻、駆逐艦27隻、小型駆逐艦36隻、輸送艦27隻の総120隻からなる艦隊だ……。でも全艦我が連合皇国の艦じゃない!!』

「とりあえず落ち着いて下さい。……ではまず、艦との連絡を試みて下さい。それと、艦がどの国かは、艦に国章が描かれているはずです。」

男性オペレーターはそう冷静に答えた。

「分かりました。では……えっ……嘘だろ……」

と、突然、何か異変が起こったようである。男性オペレーターはすぐに、

「30-01、どうかしましたか!? 応答して下さい!」

と、さっきとは逆に、急激に不安になってそう質問した。

「艦隊が我々に対して一斉に攻撃を始めた! 後援……後援を頼む! 早く来てくれ! 頼む! 早く!」

何と、謎の艦隊が第30偵察中隊に対して一斉に攻撃を始めたのである。男性オペレーターはすぐに、

「分かりました……!」

と答えた。その直後、最高司令官が男性オペレーターに自分の席から話しかけてきた。

「どうしたんだ? 第30偵察中隊に何か起こったようだな」

「最高司令官! 第30偵察中隊が謎の艦隊を5km先に発見したようです。それに今、隊に対して一斉に攻撃を始めました!」

それを聞いたレノ最高司令官は、

「なっ……何だと! ……ところでその艦はこの国の物なのか!」

と、驚いた。それどころか、オペレーター全員も驚いた。

「それがわかりません。でも通信をして来た隊長によると全艦我々
デイトシードの艦では無いそうです!!それに120隻もあります
!!」

「120隻だと……とりあえず、今から出動できる艦隊を出動させ
るんだ。出動できる艦隊や攻撃部隊はあるのか？」

「最高司令官、ありました!!」

と、その時、レノ最高司令官の近くにいる一人の女性オペレータ
ーがそう言った。それを聞いた最高司令官は、

「よし、では今すぐ出動させる!!」

と、すぐに命令した。

コロニー中に警報が鳴り響いたのはそれからすぐ後の事であった。
その頃ダヴィドは、兵舎にある自分の部屋の中にいた。

「なっ、何だいきなり……」

警報に気づいたダヴィドは、同じく鳴っている携帯電話をすぐに
取り出して情報を確認した。それを見たダヴィドは一瞬で凍り付い
た。

「……おい……何だ……。何だよこれ……」

ダヴィドは謎の艦隊の事を見て言葉を失った。謎の艦隊がある位
置が、ビトウラのほぼ真上だからである。ダヴィドはもはや、ビト
ウラとその周辺の地域を中心に惑星を侵略するのではと確信したか

らである。それにダヴィドは家族の危険も感じたのだった。

ダヴィドは無線通信機をベッドに置いて、すぐにアーマースーツを着始めたのであった。

その頃、コロニーの外では、出動命令をされた艦隊が出動し始めた。サリオンノ級母艦・セディルズ級巡洋艦・コラルギ級駆逐艦・ニレノ級小型駆逐艦などと言ったディオシード連合皇国軍の艦達は何艦もコロニーから離れていったのである。

それだけではなく多数の”UZ - SF5200 スランゼス”というカイスフィード（ディオシード連合皇国軍の主力戦闘機。スランゼスは名称）の攻撃戦闘部隊も飛び立っていった。

出動命令をされた艦隊と戦闘機の攻撃部隊は、謎の艦隊へと向かって行ったのである。

その頃、ビトウラにいるズラブは、自分の部屋のベッドの上に寝込んでいた。彼は、ただ退屈していたのである。それに、ユネが町から離れてから数時間が経った今でもユネの事を考えていた。空はもう夕日に染まっていた。

彼にとって今日は色々あった日なのであった。

「うっ……」

と、突然、彼は何か危険を感じ始めた。謎の艦隊が、町のほぼ真上にいる事に気づいたのである。それに、攻撃している事にも気づいていた。

（ま……まさか、悪夢の事が今から本当の事になるの……？う……嘘だろ……）

彼は再び、強い恐怖に襲われた。呼吸は早くなり、全身からは汗

が出てきた。それに恐怖は、今まで例の悪夢を観た次の日の朝の時からよりもずっと遙かに強い。

ズラブは深く悩み始めた。本当にここに侵略してくるのか。もしそれが分からなくても今から街中に非難警告を知らせるべきか。

ズラブはますます迷っていったのである。落ち着かなくなつた彼は、ベランダに出て、そして屋上へ上がって空を見上げた。艦隊は静止軌道よりも少し上にいるため、肉眼では当然見えない。しかし、彼はテレパシーで様子を見てみた。

（艦隊と一つの部隊が激しく闘っている……。ん……。さてよ。父さん……。まさか！？）

と、突然、ズラブは父があゝの艦隊と闘っているのかが気になりだして、父を探ってみた。ズラブは、父は艦隊とは闘っていない事とあの部隊が偵察中隊である事を確信した。ズラブは、父が第23攻撃戦闘大隊の副隊長である事を、母とネオラと同じく知っている。

だが、父は軌道コロニーのどこかへと向かつて走っているのが感じた。父が闘っていない事に気づいても、ズラブはちつともほつとしてはいなかった。最大の問題である「あの艦隊がここに侵略してくるかどうか」がまだ分からないからである。

（本当に、起こってしまうのかな……。でも起こるのは嫌だ。……でも悩んでいるままだと良くない。こんな今の自分には何が出来るんだろう……）

ズラブはひたすら悩み続けた。

その頃、静止軌道より上では、出動命令をされた艦隊とスランゼスの戦闘攻撃部隊が、謎の艦隊の元へと到着した。

出動命令をされた艦隊の内、一隻のセディルズ級巡洋艦の一人の

男性オペレーターは、謎の艦隊がこの連合国家の艦隊であることを調査し、ついに分かったのである。そしてそれを、司令部に伝えた。

「司令部、全艦アテラジア統合帝国軍の艦です。戦艦はラウガルス級、母艦はオルカノス級、巡洋艦はイリーア級、駆逐艦はフェイルス級、小型駆逐艦はソリエ級、輸送艦はデニアス級です」

それを聞いた艦と司令部両方のオペレーター達は騒ぎ出した。

『アテラジアだと！？そんな馬鹿な！！……しかしなぜここに……まさか、ここを侵略する気なのか！？』

と、レノ最高司令官が言った。侵略という言葉聞いた艦と司令部両方のオペレーターの騒ぎは更に増していったのである。

『皆落ち着け！！……とりあえず、侵略だろうが艦の攻撃を何とかしてでも止めるのだ！！』

レノ最高司令官は冷静になった。それを聞いた男性オペレーターは、

「はい、最高司令官。わかりました」

と、答えた。

艦隊と戦闘機の戦闘攻撃部隊は、更にアテラジア統合帝国軍の艦隊へと向かった。と、アテラジア統合帝国軍の艦隊は、こちらに攻撃を始めた。戦闘が始まったのである……。双方、ビーム砲を撃ち合ってしまった。しかし、双方の全艦はフィールド（防御層）を貼っている為に、艦本体には当たらない。

『司令部！！アテラジアの艦隊が我々に攻撃を開始しました！！』

一隻の母艦の女性オペレーターが司令部にそう言った。

「よし、攻撃開始だ！！」

レノ最高司令官は攻撃を命令した。そして次に、無表情で、

「アテラジア……どうやらゴアル皇帝の意志は違っていたようだ……。どうやら彼がラウガルス意志を継ぐと言ったのは嘘と騙しだったようだ……。実際彼は帝国主義だったのか……」

と、呟いた。それを聞いた近くにいた男性オペレーターは、

「最高司令官、まさか何か分かっていたんですか……？」

と、質問した。

「……あくまで私自身の考えだ」

レノ最高司令官はさっきとおなじように無表情で答えた。彼は無表情のままであった。

「……でも最高司令官……ゴアル皇帝が陰謀を持っていたなんて考えられますか？」

男性オペレーターはレノ最高司令官の発言を気にしていたのであった。

「だからあまり思い込むな。あくまでも私自身の考えだからな」

「は、はい……。」

「それよりも任務に取りかかれ。今は別の話を話している場合じゃないんだからな。君も私も手を離す暇は無いはずだ。」

「わかりました……」

男性オペレーターはそう答えると、再び任務に戻りだした。

その頃戦場では、アテラジア統合帝国軍の艦隊との戦いが激しく続いていた。絶えなく続く光弾線砲の砲撃、飛び舞いながら艦に攻撃をする沢山のスランゼス、戦いは序序に激しくなっているのだった。

と、その時、アテラジア統合帝国軍の艦から沢山の戦闘機が出撃していった。アテラジア統合帝国軍の主力戦闘機である”CG-SF3600、クレスセス”というカイスフィード（クレスセスは名称）である。何機ものクレスセスは、蜂の巣から天敵へと向かって一斉に飛び出す蜂の群のように、艦から一斉に出て行ったのである。

もはや、艦隊もスランゼスの攻撃戦闘部隊も、アテラジア統合帝国軍の艦隊だけに集中攻撃している暇は無くなった。向こうが戦闘機の戦闘攻撃部隊を一斉に出動させた事で、戦いは一層厳しくなったのである。

対抗して、こちら側の艦隊も、まだ艦内にいるスランゼスの戦闘攻撃部隊を次々と出動させて行った。

あれからどのくらい時間が経っただろうか……

自分の部屋に既に戻っていたズラブは、戦闘が激しくなっていたのを既感じていた。でもやはり、惑星に侵略してくるかどうかはまだ分からない。ズラブを襲っている強い恐怖はまだ治まるうとは

していない上に治まる感じはしない。それによって、心が落ち着かなくなつた彼は、部屋を飛び出した。

部屋を出た途端、すぐ外を歩いていた母とぶつかった。

「あつ、ごめん母さん」

「良いのよ、大丈夫。ところでズラブ、どうかしたの？なんか汗を一杯かいているし呼吸が早いけど……」

母は言うと同時にズラブの事を見て、彼の状態にすぐ気付いた。

「いや……なんでもないよ……。あ、うん……。ちよつと水飲みだね……」

ズラブはそうごまかした。本当の事を言うのが怖かったのである。

「……あらそう。でも今ぶつかってしまつてごめんね。痛かった？」

母がそう答えると、ズラブは少しほつとした。

「いや、悪いのはよそ見していた自分だから良いよ」

ズラブは最後にそう言つて、一階へと向かった。母はその後、ずっとしばらく、ズラブが行つた方向を見つめた。

「……まさか……」

母は、「ズラブは父の身か何かに異変が起きている事をテレパシィで感じたのではないか」と、思い込んだのである。母は急いで一階へと向かった。

母はまず、一階にある食卓の部屋に出た。誰もいなかった。それ

に、一階自体に人の気配を感じない。ネオラは今、自分の部屋にいる。

次に、一階の部屋全てを見廻った。やはり誰もいない。つまり、一階にはズラブも誰もいないのである。

「どこ行ったのかしら……」

母はズラブの事が少し心配になっていた。彼女は次に、食卓の部屋へと戻った。そう、父に電話をかけてみようと考えたのである。

それに家の固定電話は、食卓の部屋にある。

そして母は、食卓の部屋に着いた。戻ってきて、ズラブもネオラも誰一人もない。母は固定電話で、父の携帯電話と連絡を取ってみた。

「……………」

しかし、電話はつながらなかった。その後も何度か試みたのだが、やはりつながらない。

よって、母はますます不安になって行ったのである。母は、床に座って頭を抱え込み、悩み始めた。

「お父さん……ズラブ……」

母はとても不安げに小さな声で呟いた。

その頃ズラブは、何の目的も行き先もなく、非常に落ち着かない心で、ただひたすらなつてビトウラの町を走っていた。彼はやけになっていたのである。

（本当に俺はどうすればいいの……？本当に悪夢の事はこれから本

当の事になるの……？)

彼はそればかり思っていた。

それに彼は、「もし悪夢の事が本当に起こったなら」という事を、悪夢を始めて観た時から絶対に信じたくはなかった。信じるのが非常に怖かったのである。

と、その時、彼は立ち止まって、

(自分、何でこんな事から逃げてしまっただろう……。最近の自分は自分らしくない……。まるで別人だ……)

と、心の中でそう呟いた。彼はその後、ため息を吐いて、ゆっくりと歩き出して、ある場所へと歩いて向かった。

ズラブが向かった先は、港であった。彼はその内、宇宙船を止める港一本をとぼとぼと歩き、最終的にはその一番端に着いた。夕日がよく見えている。そして彼は、座り込んだ。立っている時よりも潮の臭いがする。

ただ夕日を眺めていた彼は、さっき立ち止まった時に心の中で呟いた事を突然思いついた。そしてそれは、自身の頭中を廻った。

(……このままじゃ、先には進めない……。何としてでも何とかしないと……)

ズラブは何度も心の中でそう呟いた。しかし、どうすれば良いかはなかなか思い浮かばなかった。その状態がその後、しばらく続いた。

それからしばらくすると、彼は落ち着いた。そして心の中で、

(……やっぱり何にしても強く立ち向かわないと行けないんだ！迷

っている場合なんかじゃない！)

と、強く言った。更に、彼はある決心をした。予知を試みる事である。彼は試みる事が少し不安であったためか、試みる前は試みる事を恐れていた。しかし、遂には試みた。

1 隻の巡洋艦、2 隻の輸送艦と駆逐艦、3 隻の小型駆逐艦がここに降りて、そこから侵略をする様子、更には、艦とに付いてきた数機もの戦闘機までも来る様子が映った。ビトゥラとその周囲を侵略の拠点にするのであった……。

「やっぱり、本当の事になるんだ……」

ズラブは、悪夢の事が本当の事になる事をついに確信した。

そして彼は更に予知を試してみた。他にどこが侵略の拠点にされるのかを予知してみたのである。

何と、ビトゥラだけではなく、他の様々な場所までも侵略の拠点到されるのであった……。

同じように、一隻の輸送艦と小型駆逐艦と、それに付いてきた数機もの戦闘機のグループでそれらの地に降りるのであった。更にはその後の事も分かった。それからはずつ侵略し、後に他の艦と戦闘機を呼んで、惑星を更に侵略するのであった。

「いや……多分これは今のままだところなってしまうという場合の予知なのかもしれない。何とんでも現実の事にするのを止めないと……」

ズラブはどうしても完全に現実の事になるとは思いたくなかったため、予知の事を改めてそう考えた。

そしてズラブは、もう一つのある事も確信した。父にテレパシー

を送る事である。彼は父に、ある事を伝えようとしたのである……。

その頃、父のダヴィドは、自分の部隊の拠点にいた。しかも、部隊員全員を呼んだために、部隊全員が集まっていた。部隊の拠点は、自分達の戦闘機が駐まっている場所である。それは、ある母艦のハングアー区画であった。

「ダヴィド、俺達は出勤命令されていないんだが本当に出勤する気なのか？それに俺達全員を急に呼び出して……」

隊長のシューゼ（階級は大佐）は、そう言った。

「ああそつだ。きつと奴らはこの惑星を侵略するに違いない。何とかしてでも侵略を止めないとな……」

ダヴィドはシューゼ隊長と部隊員全員を説得しようとしていた。しかし、シューゼ隊長も部隊員全員もなかなか理解しようとはしなかった。

「侵略はまだわからないぞ。でも出勤すると行っても今の場合は奴らを攻撃するだけになるけどな」

「……」

「それに出動するには出勤命令か出勤を頼んで出勤許可をされないと無理だ。それに部隊の隊長は俺だ。お前は隊長じゃないだろ。出勤を頼む事は俺しかできない。許可を受け取るのも俺だ。それに部隊と部隊員を指揮するのも俺だ」

「あつ……でも……」

レイダリがそう言った直後、ズラブからのテレパシーが届いた。

「父さん、今テレパシーで予知したんだけど例の艦隊はこの惑星を侵略する気だ！！1隻の巡洋艦、2隻の輸送艦と駆逐艦、3隻の小型駆逐艦と何機もの戦闘機から成るグループが惑星本土のそれぞれの地の地に降りて、そこを侵略の拠点にして侵略するんだ。それにその拠点の一つがビトウラとその周囲だ！！だから出来る限り艦と戦闘機を攻撃して破壊しないと惑星が危ない！！それにこれは他の部隊にも連絡して欲しい。父さんの部隊一つだけではきつと無理だ！！」

「はっ……！！？」

「どうしたんだ？レイダリ」

シューゼ隊長は、ズラブからのテレパシーを聞いていたために、それにとらわれていて固まっていたレイダリに疑問を持った。

「ああ……。とりあえず出勤許可を頼んで欲しい。今すぐだ」

「……だから俺はまだ認めていない。それに部隊員全員もお前の意見を認めていない。俺が命令しない限り無理だ」

シューゼ隊長はまだ、理解してくれなかった。ダヴィドはますます不安になって行った。と、その時だった、

「隊長さん、聞いて欲しい。例の艦隊はこの惑星を侵略する気だ！！まず1隻の巡洋艦、2隻の輸送艦と駆逐艦、3隻の小型駆逐艦と何機もの戦闘機から成るグループが惑星本土のそれぞれの地の地に降りて、そこを侵略の拠点にして侵略するんだ。だから出来る限り艦と戦闘機を攻撃して破壊しないと惑星が危ない！！それにこれは他の部隊にも連絡して欲しい。部隊一つだけではきつと無理だ！！」

何とズラブがシューゼ隊長にテレパシーを送ったのである。シューゼ隊長はテレパシーに対して、

(おい、誰だいきなり……。それにそんな証拠はあるのか……。?)

と、思った。シューゼ隊長はズラブのテレパシーも理解しようとはしなかった上に信じようとも思っていなかった。

「どうしたんですか？隊長」

一人の隊員が、ズラブからのテレパシーを聞いていたために、それにとらわれていて固まっていたシューゼ隊長に疑問を持っていた。

「なんでもない……。気にするな」

シューゼ隊長は、ズラブからのテレパシーを無視した。と、その時だった。

「ん!？」

シューゼ隊長は、ある様子を頭の中で見せられた。それは、ズラブが見た予知であった。ズラブがシューゼ隊長に、自分が見た予知を見せているのである。あまりにも驚いたシューゼ隊長は、左手を額に付けた。

「隊長!！」

そんなシューゼ隊長を見て、シューゼ隊長を心配し出した何人も隊員が、シューゼ隊長の元へと駆けつけた。

「ズラブ、まさか……」

父は、ズラブがシューゼ隊長にテレパシーを送っていたことに気付いたのである。彼はただ、1mmも動かずに、そこからシューゼ隊長を見つめていた。

しばらくした後、シューゼ隊長は予知を見終えた。見終えた直後、左手を戻した。

「隊長、一体どうしたんでしょうか？」

一人の隊員が話しかけてきた。

「……皆聞け。今から出動する！！」

ズラブに、ズラブが見た予知を見せられたシューゼ隊長は、出動を決意したのである。それを聞いた何人も隊員達は驚いた。そして、シューゼ隊長は、司令部に出動を頼んだ。

「司令部、こちら 23-01（ファイトウエンティスリー・ゼロワン）。第23戦闘攻撃大隊のアテラジア統合帝国軍の艦隊の元への出動許可をお願いします。全隊員準備が既に出来ております。今からの出動可能です」

そう言うてからしばらくした後、司令部が、

『了解。第23戦闘攻撃部大隊、出動を許可する。』

と、言って、出動許可を下した。そして、シューゼ隊長は隊員達の方を見て、

「聞け、出勤許可を下された。今から出勤だ!!」

と言った。

「はい!!」

隊員達はそう返事をする、急いで自機の元へと向かった。先に乗ったのはシューゼ隊長であった。シューゼ隊長の機体は、というタイプの隊長専用のスランゼスで、一般機である。よりも武装などが強化されている上に武装の数が多いスランゼスである。

ダヴィドや他の殆どの隊員（一部が という偵察タイプ）は というタイプの一般の戦闘攻撃用のスランゼスである。ダヴィドは自機の操縦席に入る直前、何かをふと考えた。それは、ズラブがテレパシーを自分とシューゼ隊長に送った事であった。

（ズラブ……ありがとうよ、本当に）

ダヴィドは心の中でそう呟いた。そして、自機に乗った。自機に乗ると、まずは機体を起動させ、次に風防を閉じた。そして次は、OSであるウパノスクを起動させた。

（行くか……）

そして、シューゼ隊長から順に、次々と第23戦闘攻撃大隊のスランゼスが母艦から飛び立って行った。部隊は、アテラジア統合帝国軍の艦隊の元へと真っ先に向かった。

「ズラブ、絶対に止めてみせるよ……。お前の予知通りにはさせないからな……」

その頃ズラブは、家へと走って戻っていた。彼は全力で走っていた。母をごまかして、勝手に家を飛び出したからである。ズラブは、母に迷惑をかけたと確信していたのである。

(いち早く家に到着しないと……)

ズラブは頭の中で何度もそう言った。できるだけ早く家に着かないと、母はより心配するだろうし叱るだろうからである。と、突然、彼は躓いた為に転んだ。彼は右脚の膝を擦り剥いてしまった。

「痛っ……。こんな所で怪我するなんて……」

ズラブはすぐに起き上がって、その場に座った。

「こんな怪我なんか平気だ……」

そして、右脚の膝の上に手をかざし、ライフヒール？を試みた。すると、擦り傷は完全に治った。

「ふう……。とりあえず家に帰らないと」

ズラブは立ち上がって再び走り出し、家へと真っ先に向かったのである。

episode - 3 突然の脅威<後>

ズラブが自分の家に到着したのは、それから数分後の事であった。ズラブは、母が自らの帰りを待つて家の前に立っていると思っていたが、誰もいなかった。

「はあっ……はあっ……着いた……」

ズラブは全力で走った為に疲れていた。それに、喉が渴いていた。その後ズラブは、疲れながら家の中へと入ったのである。家の中はしんとしていた。一階中にはドアの音が響いたはずだが、母は何も言っ来てなかった。

(母さん……まさか本当に心配しているのかな)

ズラブは一層不安になった。そして、テレパシーで母の居場所を探知した。母は食卓の部屋にいる。ズラブは静かに食卓の部屋へと向かい、静かに食卓の部屋へと入った。母は、食卓の自分の席に座って悲しんでいた。ズラブはそんな母を見て、緊張し出した。

(やっぱり、本当に心配させたみたい。今すぐ謝らないと)

そう思ったズラブは、母に謝罪する事を決めた。

「母さん……俺、いきなり……」

そう言い始めた直後、母はすぐにズラブの方を振り向いて、

「あっ……ズラブ、帰ってきたのね。おかえり」

と、笑顔で言った。ズラブはほっとした。

「あつ……ただいま。そういえばごめんね。何も言わないで勝手に外へ出て行ってしまつて……」

「いいのよ、別に。だからあまり気にしないで。そう言う事は誰にもあるからいいのよ」

母はなぜか全く怒らなかつた。それに、怒ろうとする感じさえもしなかつた。

「……でも母さん、なんか心配そうだったけど」

「ああ……、ちよつと目眩がしたからね。でも気にしないで。すぐに回復すると思うから」

母は、ズラブに心配をかけたくなかつたため、そうごまかした。

「そう……。俺、疲れたから水飲むね。帰りは全力で走つたから」

「あらそう。それに思ったけど今日のズラブはとても元気ね。昼間ではお姉ちゃんと地下の最深部まで行つたのに、ついさっきまではどこかに行つたからね」

「うん、まあね……」

ズラブはそう答えながら、すぐ側の台所へと歩いた。そして着くと、コップに水を汲んで水を飲んだ。

「はあつ……」

ズラブはとても喉が渴いていたため、そう息を吐いた。水を飲む前から母はただ、席に座つていて、目の前の光景だけを見つめてい

て、ぼつとしていた。気になったズラブは、

「母さん、さっきからぼつとしているけど……」

と、声をかけてみた。

「……ああ、なんでも無いのよ。何でも気にしないでズラブ」

母は、さっきのようにすぐに振り返って笑顔で答えた。

「う、うん。わかった」

ズラブは母の事が実は不安になっていた。もしかしたら、「自分がテレパシーでビトウラの真上の宇宙で今、戦いが起こっている事」と、この惑星が侵略される事などを探知・予知した事を知ってしまったのか」と。ズラブはそう考えるとますます不安になっていった。

「母さん、あまり身体と心を無理しないでね。少しは休んだ方が良
いよ。毎日無理をすると気付かない内に突然倒れてしまうことがあ
るからね」

母の事が不安であったズラブは、そう言った。母が不安になって
いる姿を見ていられなくなっていたのであった。

「ありがとう……。やっぱり休みは必要ね。じゃあ部屋に戻って休
むね」

「うん。そういえば俺も今からそうしようと思っていたんだ。疲れ
たからね。お互いだね」

「うん……」

母はそう答えた直後、席を立てて自分の部屋へと戻って行った。ズラブは、母が去ってから1分程、母が去った方向を見つめていた。

「……母さん」

ズラブは不安そうに呟いた。そしてその後、自分の部屋へと戻っていった。

自分に部屋に着くと、ベッドの上ですぐ寝込んだ。

(本当に、予知通りにならなければいいな……。それにもし占領されたら日常は一瞬で変わってしまうんだろう。それどころか銀河系とマゼラン雲の運命が一瞬で変わるんだと思う……)

ベッドの上に寝込んだズラブはそう考えていた。

その頃、遙か上空の宇宙では、激しい戦いがまだ続いていた。ダヴィドが所属する第23戦闘攻撃大隊が現場から20?離れた地点に到着したのはこの時だった。

「こちら 23 - 01、第23戦闘攻撃大隊、たった今20?前に到着しました」

シューゼ隊長は、司令部にまずそう言った。

『今いる周辺には特に異常は無いのか?』

司令部はそう答えた。

「ありません。それとこれも連絡します。どうやら例の艦隊はこの惑星を侵略するのだと思います。惑星の数地点に1隻の巡洋艦、2

隻の輸送艦と駆逐艦、3隻の小型駆逐艦を投入し、それらを侵略の拠点として惑星を侵略するのだと思います。他の艦隊や部隊にもこの命令を伝えて下さい。お願いします」

レイダリは次にそう伝えた。

『わかりました。今から全艦隊と全部隊に伝えます』

司令部はそう答えて通信を切った。

「こんなのルエンジンズ大戦以来数年ぶりだ……。それに、久しぶりに戦う事になってしまうとはな……。」

司令部との通信を終えた後、シューゼ隊長は現場を見て、そう言った。ルエンジンズ大戦は超暦14986年〜超暦14988年の事であった。シューゼ隊長は当時、階級が今よりも低かった上に、隊長ではなかった。しかし、ダヴィドと同じく第23戦闘攻撃大隊に所属していて戦っていたのである。

『なあシューゼ、先ずはどうする気なんだ？それにしても戦闘は数年ぶりだな……。』

と、ダヴィドが質問してきた。

「ああ、輸送艦を中心に攻撃だ。でも、他の艦や戦闘機にも注意しないと行けない。でも、他の艦と戦闘機も攻撃しないと……。あと、確かに戦闘はルエンジンズ大戦以来数年ぶりだな。そういえばあの時は互い若かったな」

『まあ、そうだけだな。でも今はそんな事話している場合じゃないだろ』

「分かっている。とりあえず早く向こうに着かないとな。」
『ああ……』

それからしばらくすると、現場に着いた。予想以上に戦闘は激しかった。

「よし、全隊員攻撃開始だ!!」

シューゼ隊長が全隊員にそう言うと、全隊員は攻撃を始めた。先ずは、クレスセスの一戦闘攻撃部隊が出迎えて来て、こちらに攻撃をしてきた。

「くっ、いきなり出てきたか……」

目の前の先には、二機のクレスセスが、ビーム機関砲を撃ちながら迫っている。ダヴィドは全力で、二機のクレスセスを僅か先で除けた。

「くそ……数年ぶりの戦闘だから戦力が数年前よりも劣っている……」

ダヴィドは、数年ぶりの戦闘である為に、数年前よりも戦力が少し落ちていることに気が付いた。訓練は何度もしているものの、実戦であるために、強い緊張感が心の中を走り続けた。

それに、出迎えてきた戦闘攻撃部隊は、自らの部隊と同じく、大隊であった。戦闘攻撃部隊であるため、ほとんどが一般的な型（戦闘攻撃タイプ）である。

「でも……絶対にやられるわけにはいかない……やられてたまるか……ズラブの予知通りには絶対にさせたくないからな……!!」

ダヴィドはそう言うと、勢いよく踏ん張り出した。
ダヴィドはまず、素早くインメルマンターンをし、自機に向けて攻撃をしてきた2機のクレスセスを追った。そして素早くビーム機関砲を、右の一機に向けて撃った。しかし、気付かれたために、二機共素早く避けてしまった。

「くそっ……」

しかしダヴィドはあきらめず、二機を素早く追った。と、その時だった、後ろからビーム機関砲のビームが多数来た。

「……一機に後を付けられている……」

一機のクレスセス（型）が、後を付け出したのである。ダヴィドの緊張感はさらに増した。

（よし……こうなったら……）

ダヴィドは次に、急降下した。後を付けているクレスセスは、それでもダヴィドが乗っているスランゼスを追った。

（追ってやがる……。しつこいな……）

そしてその時だった。後を付けているクレスセスが、超小型誘導弾を2対2回発射した。

（うっ、くそっ……）

ダヴィドは機のを速度を上げ、超小型誘導弾から素早く逃げた。超

小型誘導弾はダヴィドが乗っているスランゼスとの間隔が開いてしまっても、機体を追い続けた。ダヴィドは機体を上・右・下・左へと激しく動かしながら超小型誘導弾から逃げて行った。

（こんな所でもやられたくない……ズラブの予知通りにはさせたくないからな……どうしてもだ……）

ダヴィドは、超小型誘導弾から逃げていながらも、心の中でそう強く思い続けていた。それでも超小型誘導弾からの逃走は終わらない。

（まだ終わらないな……。もう少し激しくしてみるか……）

そう思うと、もう少し動きを激しくしてみた。しかし、それと共に重力加速度の苦しさが襲った。

（くっ……これ以上激しくするのは多分危険だ。多分これが限界だろう……）

と、その時だった。偶然、自勢力か敵勢力かは分からないが、どこかの艦が戦闘機が撃ったビーム砲のビームが、超小型誘導弾二本を貫き、破壊した。

「ふう……、偶然だけど少しだけ助かったみたいだ。でも残りの二本を何とかしないと……まだ終わってはいない」

ダヴィドは少しだけ落ち着きを取り戻した。しかし、残りの二本はまだ残っているため、ダヴィドが乗っているスランゼスを追い続けている。

そして次は、機体を何回か回転させながら逃げた。途中で、超小

型誘導弾が違いぶつかり合って破壊させるためである。しかし、なかなかぶつからない上に、周囲は戦闘機やビームなどが飛んで来る可能性があるため、大変危険であった。しかし、それでもダヴィドはやり続けた。

と、その時であった。一機のクレスセス（型）も、ダヴィドが乗っているスランゼスの後を付き、光ビーム砲を撃ってきた。

「ちっ……非常に厄介な事になったな……」

ダヴィドの緊張感は再び増してしまったのである。更には、前方からビーム機関砲のビームが来た。クレスセス（型）が一機迫ってきたのである。ダヴィドは、前から迫ってきたクレスセスを素早く避けた。

（このままだと行けない。でも、どうしてもズラブの予知通りには絶対にさせたくはないんだ！！だからここでもやられるわけにも行かない！！）

そう思った時であった。ある戦闘機がビーム機関砲で、超小型誘導弾二本とクレスセス一機を、超小型誘導弾で破壊したのである。

（！？）

ダヴィドはすぐに後ろを振り向いた。スランゼス 型戦闘機が一機近くにいます。シューゼ隊長であった。

「た、隊長！！」

『ダヴィド、実はお前は艦などの方をどうにかしたいんだる本当は。だからその方をお前に任せる。だから他は俺らに任せる』

「ほ……本当に俺一人だけを別に戦わせて良いのか……！！？」

「ああ、頑張れよ!！」

「あ……ありがとうよシューゼ」

ダヴィドの緊張は一瞬にして収まったようであった。

『実は俺はあの時、ガキに予知を見せられたんだ。それも、お前があの時に言っていた事と内容が全て一致していた。だから出勤を決めた訳なんだ。多分、超能力を持っているガキだったんだなあれは今の場合だとこうなってしまうという事を予知したみたいだ。惑星が軌道コロニーのどちらに住んでいるかは分からないけどな』

シューゼ隊長は、ズラブに予知を見せられた事を話した。それを聞いたダヴィドは、

(ズラブ、やっぱりそうだったのか……)

と、少し嬉しく思った。

『じゃあ行つてこい。任せたぞ』

シューゼ隊長は最後にそう言って、ダヴィドが乗っているスランゼスから離れた。

(よし、行くぞ……)

ダヴィドは心の中でそう強く言って、一番近くにあるデニアス級輸送艦へと全力で向かって行った。前から雨のようにやって来る、ビームを避けながら。彼はただ、そのデニアス級輸送艦だけを目指した。

しかし、向かうのは決して楽ではなかった。途中で、近くに

クレスセスと、敵艦が発砲をして来る。しかしダヴィドは、それを上手く避けながらも向かった。

「よし、大体近づいてきた……」

しばらくすると、ダヴィドは例のデニアス級輸送艦に少しだけ近づいた。シューゼ隊長の命令が拡散されたのか、すぐ近くにいる味方の艦が、輸送艦に向けて集中攻撃をしていた。

そして、その地点で素早く、機体に一対搭載されている40mm口径の粒子ビーム砲の粒子ビームを、最高威力で直線状の波動形状で撃った。ダヴィドが撃った一対の粒子ビームは、例のデニアス級輸送艦へと真っ直ぐに向かった。

しかし、例のデニアス級輸送艦は、フィールドを貼っている為に、ダヴィドが撃った直線状の波動形状の粒子ビームを遮断した。

(くそっ……無理か……)

ダヴィドはそう悔しく思ったが、それでも例のデニアス級輸送艦へと向かい、もう一回粒子ビーム砲を最高威力で撃った。しかし、また遮断されてしまった。

が、その時、後ろから沢山のビーム砲のビームが来た。後ろを確認すると、4機ものクレスセスが迫って来ていた。

(またこんな事になるとは……)

ダヴィドは更に悔しくなった。しかもその時、全機は一対一本ずつ、超小型誘導弾をダヴィドが乗っているスランゼスに向けて発射した。一層悔しくなったダヴィドであるが、彼はそれでも諦めようとはしなかった。彼はまず、例の艦へとビーム砲を連続で撃ちながら真っ直ぐに進み、その次は左へと急激にバレルロールをした。

更にその次はスプリットSをした。超小型誘導弾だけではなく、4機のクレスセスも後を追っている。しかも、ビーム機関砲を撃ちながら追っていた。

ダヴィドは次に、機体を何度も回転させ、機体を上、下、左、右へと激しく動かした。すると、途中で、4機のクレスセスが撃っていたビーム機関砲のいくつか、自ら撃った超小型誘導弾5本に当たり、爆発した。よって、超小型誘導弾の数は減った。しかし、他はまだ残っている為に、気を決して抜かなかった。その後、例のデニアス級輸送艦がすぐ近くにあった。

「いつの間にかここまで来たか……」

ダヴィドは、デニアス級輸送艦に向けて、ビーム砲を撃とうとしてきた。だが、デニアス級輸送艦は気付いたために、ビーム砲を発砲してきた。後ろには超小型誘導弾3本と、クレスセス4機がいるために、逃げるのは難しい。ダヴィドはとりあえず、右へとターンした。ターンを始めた時、デニアス輸送艦が撃ったビーム一本が、ダヴィドを追っていたクレスセス4機の内、一機の右部に当たってしまった。撃たれた事でバランスと制御を崩してしまったその機体は、艦の上に墜落して爆発した。

それでもダヴィドと、彼が乗っているスランゼスを追うクレスセス3機と超小型誘導弾、デニアス級輸送艦との闘いは終わってはいない。

(標的に付いたから、ここでやられるのは本当にあっけない……)

ダヴィドは心の中でそう言った。しかし、逃げていたために、デニアス輸送艦からは離れてしまった。しかし、デニアス級輸送艦は撃ち続けている。

「さて、離れてしまったけどここからはどうしようか」

ダヴィドは、今からはどうしようかを考えながら飛行した。標的であるデニアス級輸送艦を一番どうにかしたいが、追っている超小型誘導弾3本と、クレスセス3機もどうにかしたいと思っていた。

そう思っている間に、遙か前方からクレスセス（型）が、ビーム砲を撃ちながら、急速で向かって来ていた。

「そこ避ける！！」

レイダリはそう言って、向かって来ているクレスセスのすぐ近くに来た時に、当機に超小型誘導弾を一对一本ずつ発射した。超小型誘導弾はそのクレスセスに命中し、爆破した。

しかしそれでも、後を追っている超小型誘導弾3本とクレスセス3機は追い続けている。

（くそっ……本当にしつこすぎる奴らだ……早くどうにかしないと標的に集中出来ないからな）

と、その時、クレスセス3機と超小型誘導弾が破壊された。

（誰だ今度は……）

後ろには一機のスランゼス（型）がいた。ダヴィドはシューゼ隊長だと思ったが、調べてみると、親友のレイダリであった。しかも、後ろにはスランゼス（型）が2機（隊員）いる。

「れ……レイダリ！！」

ダヴィドは非常に驚いた。

『だ……ダヴィド！？奇遇だな……こんな所で……』

レイダリも同じく、非常に驚いた。彼は、自分が救ったスランゼスのパイロットがダヴィドとは全く思ってもいなかった。

「本当に……本当にありがとうよ……。俺だと分かっていたのかどうかは分からないけどな」

『ああ。何よりもオレはお前が生きていて凄く嬉しいぞ。不安だったからな。そういえばお前の部隊は自分から出動をしたそうだな。それは聞いているぞ。お前の部隊の隊長が司令部に拡散命令をさせた命令も聞いているしな』

「そうだったのか」

『まあ、今はとりあえず、奴らを止めよう。ところでお前は部隊と一緒にじゃないのか？一人みたいだけだよ』

「ああ……部隊の他の隊員はやられてはいないけどこれは……」

ダヴィドは、自分一人だけが部隊と離れて戦っている理由を、言おうかどうか迷った。

『まあ良い。とりあえず奴らを止めようぜ。侵略を防ぐためにな』

しかし、レイダリはそんな事を無視して、誘った。

「そうだな。あと良ければ俺はお前らと一緒に行くぞ」

『ああ、いいぞ。勿論な』

レイダリはそう言うと、二人の隊員と共に、例のデニアス級輸送艦へと向かった。ダヴィドはその後ろをついて行った。これによって、4人による編隊が形成された。

例のデニアス級輸送艦に近づくと、艦は気が付いて、ビーム砲をこちらに撃ってきた。4人は、それを上手く避けながらも近づいた。『ダヴィド、気を付けろよ。こんなところで死んだらあつけないからな』

レイダリはビームを必死で避けながら、突然、必死な喋り方でそう言うて来た。

「それぐらい分かっている。自分自身でもな」

ダヴィドもビームを必死に避けていたために、レイダリと全く同じような必死な喋り方で返事をした。

『そうか……わかった』

レイダリは最後にそう言うて、通信を切った。

ダヴィドは通信を終えた後、一気に気合いを燃やして、レイダリとその隊員達と同じように、デニアス級輸送艦に粒子ビーム砲を連続で撃ちながらしながら突き進んでいった。しかし、フィールドはなかなか破られない上に、輸送艦は光ビームをこちらに連続で撃っている為、一点に集中攻撃はできない。

そして、輸送艦のすぐ近くに着くと、右にターンして輸送艦の上を沿りながら飛行した。すると、後ろから光ビームが数本来た。妨害をしに来た敵の戦闘攻撃部隊である。

『後ろに気をつけろ!!』

レイダリは、隊員とダヴィドにそう言った。部隊はこちらと同じく4機から成っている。それに、全てクレスセスの型である。

(やはり艦の破壊は無理なのか……?)

ダヴィドはふと、そう思ってしまった。するとその時、後ろにいる戦闘攻撃部隊は、こちらに向けて、超小型誘導弾を撃ち放った。

「くそつ、またこれか!」

これによって、レイダリとその隊員二人・ダヴィドの4人はバラバラに逃げてしまい、4人のスランゼスによる編隊は崩れてしまった。超小型誘導弾から逃げて、一機に一機ずつ、後を攻撃しながら追っている。

『いいか、3人もやられるな!』

レイダリは素早くそう言った。

(最低限でもどうにかしないと。せめて自分が出る限りでな……。きっとズラブはとても心配し続けているからな)

その頃、遙か真下のビトウラにいるズラブは、必死で強く願っていた。父の無事と予知が本当のことにならないようにと願っていたのである。

「……」

ズラブには、今の戦場の様子が見えているが、それは、痛々しい為に、それと共に精神には強い苦痛が走る。ズラブは、強い苦痛に押されながらも見た。

勿論、今の父の様子も見えている。攻撃をしながら追っている一

機の敵の戦闘機クレスセスと、その機が放った超小型誘導弾に追われている様子だ。

「父さん……」

ズラブはとても不安な気持ちでそう呟いた。そして、かなり不安すぎた為、気分が落ち着かなくなって、ベランダへと出た。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

息は浅く、そして早くなっていた。全身からは汗が出ている。そしてズラブは、真上を見た。夕日がほとんど沈んでいる為に、紺色になっている。

「はあっ……」

そして、悩み込んでしまい、床に座り込んで頭を抱えた。

（こんな遙か真下にいる自分には何か出来ないのかな……でも、このままだと父さんが危ないし、予知が確実に本当の事になる）

ズラブは頭の中でそう言いながら悩み続けた。

（どうしよう……こんな時はどうしようか。今持っている能力だと何も出来るはずがないし……）

悩みは深くなつて行った。それに彼は、今の戦場の様子を見ながら考え込んでいた。その為、苦痛も走っている。

「……」

なかなか答えが出ない。それに出ようともしない。ただ、混乱と強い不安だけが頭の中を走る……

「……」

更には父の今の様子までもが映った。父はまだ、一機のクレッセスト、その機が放った超小型誘導弾に追われている。そして更に今、もう一機が、父が乗っているスランゼスを追い出した。

(……はっ!!)

そして突然、何かがふと思い浮かんだ。

(……これで、少しはどうかかな……)

ズラブは頭の中でそう言うと、まずは部屋の中へと戻った。

彼は少し緊張していた。思い浮かんだ事を実行する事であった。しかし、父の事を考えると、「やっぱり実行をしないと行けない」と思った。

彼はまずベッドの上に座り、そして瞑想を開始した。父の今の様子だけに集中したのである。父はまだ、ずっと同じ状態であった。

彼は、父が乗っているスランゼスを追っている超小型誘導弾2本の内、一本にまず、精神を強く集中してみた。破壊を試みてみたのである。しかし遙か上空であった。それでも彼は、強く集中し続けた。

そして、その超小型誘導弾は破壊され、爆破した。

「はっ!?!」

その頃、父ダヴィドはその様子に驚いた。

(なぜ誘導弾が急に爆破した……!?)

そう思ったその時、後ろを追っていたクレスセスが爆破した。超小型誘導弾が、後ろを追っていたクレスセスに自ら当たったのである。

(……???)

彼は、超小型誘導弾が偶然故障したのだと考えておいた。だが、実はスラブテレパシーによる操作したのであった。

(……まあいいか……こんな事であまり考え込んでも……。とりあえず今は何よりも輸送艦が目的だからな)

ダヴィドは心の中でそう言った。

その頃スラブは、強力すぎる超能力を使用した為か、目眩に催されて倒れた。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

彼は疲れきってしまったていて、ベッドの上に寝込んだ。でも、少しはほっとしていた。

その頃、父のダヴィドは、例のデニアス級輸送艦へと戻っていた。追われていたために、離れてしまっていた。

「レイダリ、大丈夫か？俺は大丈夫だ」

『ああ、オレは何とか大丈夫だ。残りの二人もな。今どこにいる？』

ダヴィドはレイダリから返事が来てほっとした。

「良かった……。今あの輸送艦に向かっている」

『どれだ……。あ、いた。今そっちのもとに向かうぞ。すぐ着くからな』

「ああ」

しばらくすると、レイダリが乗ったスランゼス（型）とあの隊員二人それぞれが乗ったスランゼス（型）二機の総三機がこちらにきた。そして合流すると、再び編隊飛行を組んで、例のデニアス級輸送艦へと向かった。丁度、艦の後ろ側であるために、光っているエンジンが見える。

『よし、とりあえず一番中央のエンジンに集中してカイサーブルの粒子ビーム砲を最高威力で撃つぞ』

レイダリはそう言った。近づいてみると、艦は、味方の艦が攻撃をしたのか、少しやられていた。

そして、エンジンに近づいてきた。艦は何も気づいていない。実は、ズラブがテレパシーでレーダーとフィールド装置を故障させたのであった。

全機は、人型戦闘機形態のときに使う武器、60mm粒子ビームカイサーブルの粒子ビーム砲を最高威力にし、そして、一番中央のエンジンに集中発射した。4本もの粒子ビームは、エンジンへと入って行った。

そして、そのエンジンは爆発した。

その後、更に、艦の所々が爆発し出した。

それからしばらくすると、艦は大爆発を起こしたのであった。

(やったー!)

ダヴィドは喜んだ。

『よし……良くやったな皆……。とりあえずどんどん行くぞ』

レイダリがそう言った直後だった……。まだ残っているイリーア級巡洋艦、フェイルス級駆逐艦、ソリエ級小型駆逐艦、デニアス級輸送艦の数艦が、フィールドを最大値にして惑星へと降りて行った。侵略を開始したのである。

「ま、まさか……」

ダヴィドは突然、心が凍った。そして、

「……くそっ、侵略する気が……」

と、侵略を開始を確信して悔しんだ。ダヴィドは一番近くにいる一隻のフェイルス駆逐艦へと向かおうとした。と、その時だった

『ダヴィド、無事か!?!』

シューゼ隊長から通信がかかってきたのである。

「ああ、無事だ。たった今、輸送艦を一つ破壊したところだ」

『良かった……こちらは部隊全員無事だ』

「そうか……でも今、侵略が開始されるようだ。見ているか？」

ダヴィドは再び不安に襲われていた。

『ああ……まさか、どうにかする気なのか？』

「ああ……」

ダヴィドはそう言うのと通信をすぐに切り、一隻のフェイルス級駆逐艦へと急いで向かった。

『お、おい、ダヴィド!!』

今度はレイダリがそう不安になって言った。

「大丈夫だ、任せろ!!」

しかしダヴィドは、レイダリも無視し、フェイルス級駆逐艦へと全力で向かった。そして、少し近づくと、60mm粒子ビームカイサーブルの粒子ビーム砲を最高威力にして撃った。

案の定、フィールドは破れない。それでも彼は、一人で駆逐艦を破壊しようとした。

と、その時、後ろから何機ものクレスセスから成る戦闘攻撃部隊が攻撃してきた。

「ちっ、来たか……」

ダヴィドは左に激しくターンをして逃げた。

その頃ズラブは、侵略を開始した事を見ていたために、このままでは侵略される事を確信してしまった。

(やっぱり予知はどうやっても破れないんだ……くそっ!!)

ズラブは激しく悔しんだ。それに彼は、あまりもの悔しさで泣いていた。それに先ほど艦一隻を超能力で止めようとして再び試みてみた所、突然超能力が駆使できなくなってしまうていた。そのため、超能力自体が駆使できなくなっている。

侵略が今、始まろうとしていた……。

《ステータス》

ズラブ・リュビナゼ

年齢：12歳

種族：人間（アルカント人）

職業：初等部学生

武器：無し

【独自に駆使している超能力】

<攻撃>

ライザー？

<補助>

ライフヒール？

ライフリカバリー？

<状態異常>

カウオシス？

episode - 4 引き裂かれし世界< ;前> ;

アテラジア統合帝国、それは、ディオシード連合皇国と同じく、6年前の超暦14988年までの7年間に及んで繰り広げられた銀河系全域とマゼラン雲全域を戦乱に巻き込んだ大戦、ルエンジス大戦でルエンジス帝国から分裂した4連合国家(他の二つはラジギード連邦王国とカルダシア同盟国家)の一つである。

当連合国家は、銀河系のグリーカ区画・ヒスランダ区画・ガリユンド区画・ゴートス区画・ラテイリス区画・ブリユティス区画・ゼヌジヴァシオ区画・ウィノディエシア区画、そして大マゼラン雲のヴァスト区画・クアレピサク区画の総計10区画で構成されている

首国は、グリーカ区画にあるアテシユ皇国であり、首都は同国のアテシユ星系にある当星系の第3惑星、アテシユcにある当国家の首都、オリユグラード。そして元首はアテシユ皇国の皇帝でもあるゴアル・ドレウトスである。

アテラジア統合帝国は、連合国家成立時に、当時の元首であったラウガルスが、自連合国家を中心に、他の3連合国家と平和な関係を築く事を約束し、平和を誓った。そして、彼が後に死んだ後にゴアルが皇帝に就いたが、彼はそんなラウガルスの意味を継いだのである。

しかし、そんなアテラジア統合帝国が突然、ディオシード連合皇国のコーカス区画にある国家、アルカント王国のアルカント星系に

ある当星系の第4惑星、アルカントdに攻めて来たのであった。

これによって、攻めてきた艦隊の近くに拠点（軍事軌道コロニー）を置く、アルカント王国軍第2部の軍とは戦闘が繰り広げられた。

そして今、惑星自体への侵略を開始したのであった……。

（……結局俺は何の役にも立たなかったというのか……？ただ追われてばかりいるだけで……）

ダヴィドは、敵の戦闘攻撃部隊に追われながらそう非常に悔しく思っていた。後ろからは、沢山のビームが来ている。一方で、イリア級巡洋艦数艦、フェイルス級駆逐艦数艦、ソリエ級小型駆逐艦数艦、デニアス級輸送艦数艦は、惑星へと降下して行っていた。

『ダヴィド！！危ない！！』

と、その時、シューゼ隊長がそう言って来た。敵の戦闘攻撃部隊の更に後ろには、所属している第23戦闘攻撃部隊のスランゼスがいた。もちろんシューゼ隊長もいる。彼らは、ダヴィドを追っている敵の戦闘攻撃部隊に攻撃をした。それにより、敵の戦闘攻撃部隊は分散され、ダヴィドは救われた。ダヴィドは気合を出し、他の隊員とシューゼ隊長を追った。

『ダヴィド……ひょっとして悔しんでいるのか……？』

と、シューゼ隊長がそう言った。

「ああ、そうだ……」

ダヴィドはそう悔しそうに答えた。と、その直後、彼は惑星へと降りて行ったデニアス級輸送艦とソリエ級小型駆逐艦の様子が気になってしまい、機体を少し傾けて様子を見た。ずいぶん下に降りている。

（もうここまで降りたのか……もう数十分後か一時間後は地上に降り立っているな……。くそっ……。少しでも早く出勤していたら……畜生……）

ダヴィドは更に悔しき、左の拳を操縦桿に思いっきりぶつけて、

「畜生……！」

と言った。

『ダヴィド、落ち着け！！何悔しんでいるんだ！！』

シューゼ隊長は、ダヴィドの言葉を聞いた直後、ダヴィドにそう叱った。それを聞いたダヴィドは、一瞬にして心が静まった。

『……悔しむ気持ちは誰だっかわかっている。俺だっけそうだ。もちろん隊員全員、いや、軍全員も……。俺はな、「出勤する前のあの時、すぐにダヴィドの言う通りにして、いち早く出勤していれば良かった」と強く後悔している。艦を一隻でも破壊できたかもしれない』

「……」

『実はな、さっき隊員何名かと別の巡洋艦一隻を攻撃していたんだ。』

でも攻撃している最中に艦はフィールドを最大値にして降り出した……少しでも早ければ間に合ったのかもしれない……」

「そうだったのか……」

「ダヴィド、おまえは良くやったよ。一隻破壊したんだからな。俺なんか未遂だ……」

シューゼ隊長は少し悔しんでいた。ダヴィドは喋り方から聞いてそれを確信した。そしてダヴィドは、

(……もし、侵略の拠点の一つがビトウラであるならば……セレーネ、ネオラ、ズラブ……いや、町民も町も無事でいてくれ!!いや……ビトウラだけじゃなくて、全ての侵略の拠点となる地の人々の皆……誰一人も決して死ぬんじゃない!!……地も絶対に無事でいてくれ!!……俺は後から絶対に助けに行くからな……)

と、心の中で、そう強く願って言い、気合を一層増して、クレスセスを攻撃して行った……。

その頃、司令部は、敵の艦隊が惑星への侵略を開始した事によって、騒ぎが一層増していた。

「巡洋艦数艦、駆逐艦数艦、小型駆逐艦数艦、輸送艦数艦が惑星へと降下して行っております!!このままでは数十分後か一時間後には地に到達してしまいます!!」

と、一人の男性オペレーターが言った。

「とりあえず、別の部隊と惑星にいる駐留部隊に出動命令をするしかありません!!」

次に、別の一人の女性オペレーターがそう言った。

「ならば今すぐ、空いている部隊と惑星にいる駐留部隊に出動命令を下んだ。皆悩むんじゃない！！悩んでいると軍はやられる」

レノ最高司令官は、すぐに対処を決めてそう命令を下した。

しかし、司令部の誰もあまり気が付いて行つた。ラウガルス級戦艦が、第2軍事軌道コロニーの方に方向を向けていたのである。第2軌道コロニーを主砲の攻撃で破壊しようとして少しずつ近づいて行つていた。それにオルカノス級母艦3隻とイリーア級巡洋艦4隻、フエイルス級駆逐艦6隻、ソリエ級小型駆逐艦9隻も付いて行つていった。

その頃、ビトウラにいるズラブは、侵略を確信した為に、もの凄く強い恐怖に押されていて、強く怯えていた。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

ズラブの怯えは、精神が崩壊しそうなほどであった。彼は今まで戦争を体験したことが無い。ルエンジス大戦の頃はまだ幼児であった。幼児の頃の記憶ははつきりと覚えている物の、戦争自体を体験した覚えはなかった。ただ、当時の情勢は少し知っていた。

と、その時、ネオラが静かにドアを少し開けて、ズラブの事を覗いた。ネオラに気付いたズラブは、すぐに彼女の方を振り返った。

「何？お姉ちゃん……」

ズラブは元気が無さそうな喋り方でそう言った。そんな喋り方で喋ったのを聞いたネオラは、

「何元気をなくして暗くなっているの……？ 凄く元気がないよ……。
ひょっとしてユネちゃんの事？」

と、言いながらズラブの元へ歩いて来て、彼のすぐ左に座った。

「……全く違う……」

彼は相変わらずさつきと同じような喋り方で答えた。そんなズラブを見たネオラはズラブを心配し出し、彼の左手を優しく包んだ。

「別に怒るわけでも無いから……。そのまましていると、身体も心も壊してしまうわよ……。壊してしまったら私もお母さんもお父さんもきつと今のズラブみたいに凄く心配してしまうし……」

「……うん……」

「それに私もお母さんもお父さんもズラブの味方だからね……。たとえ何があっても……だから……」

そう優しく言った後、ズラブの事を抱いた。ズラブはネオラによる慰めで、少しでもだけ落ち着いた。ズラブに昔から色々世話を焼いている姉のネオラであるが、そんな彼女はズラブの事を、彼の味方となって支え続けていた。それに、どんな事があっても彼女は決してズラブの事を裏切らなかつたのである。根からズラブの事を想っている上に、優しくしていた。

そして、しばらくすると、ズラブは話すことを決心し出した。

「……言えにくいんだけど……実はね……」

しかし、怖くて言えにくいのか、恐る恐る喋った。

「ん……？」

「実は……重大な事なんだけれども……」

「何……?」

「……このビトウラの遙か真上の宇宙で……実は今……戦いが起こっているんだ……」

それを聞いたネオラは、心が一瞬にして凍り付いた。そして、ズラブを離れた。

「……それって……もしかして本当なの……?まさか嘘じゃないよね……」

「嘘じゃないよ……」

「お……お父さんは無事なの……?」

ネオラの恐怖は増していった。

「大丈夫……さっき見たけど無事だから……多分今もね」

超能力が謎に使えなくなっている為に、今の父の様子を見られないズラブであるが、彼はそう答えた。

「で、でも戦いなんですよ……私、とても不安……。このままじゃ落ち着いていられない……とても……怖い……から……」

さっきの自分と同じようになっていくネオラを見たズラブは、彼女の事をどうしようかと戸惑った。ネオラの恐怖と不安と怯えは増していくばかりで、精神が崩壊しそうにもなっていた。

「だっ……大丈夫!？」

ズラブは慌ててそう言った。

「……無理そう……」

ネオラは額に手を当てて、怯え苦しみながらそう答えた。そしてその後、ベッドの上に寝込んだ。

ズラブはライフリカバリー？でネオラの不安や恐怖を沈めようと思ったが、超能力が謎に使えなくなっている為に当然無理であった。試みても勿論何もおこらない。

(くそっ……なんでこんな時に使えないんだよ!!)

ズラブはそう強く悔しんだ。

その頃上空では、1隻のイリーア級巡洋艦、2隻のフェイルス級駆逐艦、3隻のソリエ級小型駆逐艦、2隻のデニアス級輸送艦と何機ものクレスセスが地上を目指して降下していた。スランゼス何機がそれを止めに攻撃しているが、歯が立たない。

「こちら、37・01!!只今ビトウラの54km上空にいる!このままでは下のビトウラ町を中心とする地域も戦いの被害に巻き込まれる。それに、敵はビトウラ町かそれを中心とする地域のどこかに降りる可能性もある。直ちにその地域の市町村に全民の避難命令をお願いします!!このままだと下が危険です!!」

と、そこで戦っている戦闘攻撃部隊の一つ、第37戦闘攻撃部隊の隊長が司令部にそう告げた。それを聞いた司令部は、

『わかりました。直ちに命令をその地域の全執行機関に下します』

と、答えた。そして司令部は、ビトウラを中心とする地域の全市

町村の執行機関に全民の避難命令を下していった。

しかし、その外では、第2軍事軌道コロニーを破壊しにコロニーへと向かっているラウガルス級戦艦1隻、それに付いているオルカノス級母艦3隻、イリーア級巡洋艦4隻、フェイルス級駆逐艦6隻、ソリエ級小型駆逐艦9が随分とコロニーに近づいていた。それにラウガルス級戦艦は、そろそろ主砲を発射しようとする最高威力へとエネルギーを溜めていた。

「大変です！！戦艦1隻と母艦3隻、巡洋艦4、駆逐艦6隻、小型駆逐艦9隻がこちらに近づいています！！……あつ、今主砲を発射するつもりです！！フィールド最高値に！！」

と、一人の女性オペレーターが気付いたため、そう言った。その直後だった。ラウガルス級戦艦は主砲を発射した。粒子波動は、急速に軌道コロニーへと進んでいった……。

（間に合わなければコロニーは確実に大きな損害を受ける……。酷ければ全て壊滅だ……。もちろん我々……。いや、第2部自体が壊滅する……）

多くの司令部員達が非常に恐れながらそう思っていた。よって司令部は、大きな緊張に包まれてしまっていた……。

……しかし、軌道コロニーはギリギリ、フィールドを最高値にしたため、防ぐ事ができた。

だが、フィールドが粒子波動を遮断したと共に、フィールドと粒子波動がぶつかった衝撃で軌道コロニーは強く揺れた。司令部でも

コロニーのどこでも軍人や兵士は揺れによって床や地面に倒れた。しかし、防ぐ事に成功した為か、司令部員全員はほっとした。

「……こつちも手間が無くなったみたいだな……。すぐに次々と部隊を出動させなければ……」

と、レノ最高司令官がそう呟き、立ち上がった。彼は少しもほっとしてはいなかったのである。

その頃、遙か下のビトウラでは、第2部からの”全町民の避難”の司令を受け取った執行機関が、司令の通りに全町民の避難命令を開始した。

それにより、町の所々、各家の固定電話機からは警報が鳴り響き、次にそれらから電子透過スクリーンが自動に発動して、そこに警告などのメッセージが表示された。

「えっ!?!」

警報が鳴り響くと、ネオラは気分が一瞬にして気分が一瞬で変わって緊張し出し、起き上がった。ズラブも同じように気分が一瞬で変わって緊張し出した。そしてその時、

『ビトウラ執行機関から全町民に告げる。ただ今、遙か上空で突然侵略して来たアテラジア統合帝国軍の艦隊の一部との戦闘が繰り広げられている。これにより、町とその周辺の地域が戦闘などの被害に巻き込まれる可能性がある。全町民、および町に来ている者、直ちに地下の避難シェルターへ避難せよ。繰り返し言う。全町民、および町に来ている者、直ちに地下の避難シェルターへ避難せよ』

と、執行機関がそう避難警告を言った。それを聞いたズラブは、

「……とりあえず早く非難しないと！！母さんもつれて。母さんは今、居間にいるはずだから」

と、素早く冷静に判断してそう言った。

「わかった！！」

ズラブに対して姉はそう答えた。その直後、二人は共に部屋を出て、一階の居間へと急いで向かった。

その頃母は、固定電話機の電子透過スクリーンに書かれてある警告と避難命令のメッセージをただ見て、啞然としていた。驚き過ぎる言葉を失ったのである。

「母さん！！」

その時、ズラブとネオラが駆けつけて、居間に入ってきた。気が付いた母は、すぐにズラブとネオラの方を振り返った。母は非常に不安そうな顔であった。それを見たズラブとネオラは驚いて、母の事を突然心配し出したのであった。

「大丈夫……？」

ネオラは静かにその声をかけた。

「……大丈夫よ……。二人共、とりあえず地下の避難シェルターと一緒に避難しないとね」

「母は今にも気絶しそうだ」と、ズラブとネオラの二人は、母の喋り方を聞いて・母の感じを見てそう思っていた。しかし、二人は

母の事を考えて、それに対する不安を表面上では表さないで、無表情でいた。

「そ……そうだね……とりあえず行かないと危ないからね」

ズラブはそう言った。それに対して母は、

「うん、わかったわ……。じゃあ行くわよ。」

と答えた。その後三人は家を出て、避難シェルターへの直接通路がある入り口へと急いで向かった。入り口は、地下通路にある。

外には、同じ住宅街区画に住んでいる住民達数名が、地下通路へと急いで向かって走っていた。それより前までの通常の平和な町の光景は、一塊も無くなっていた。それを一番感じていたのはズラブであった。悪夢の事が本当の事になるのかどうかと父の事などが不安過ぎて気分が非常に落ち着かなくなったあの時、一度家を出たからである。

(こんなビトウラの光景、今まで見たこともない……)

ズラブはそう思って息を呑んだ。ネオラと母はズラブ並みには感じてはいない。しかし、避難の事とその原因に対する不安で、頭が一杯であった。それはズラブも同じである。

3人はひたすら走った。その後、地下通路の出入り口に入って地下通路に入った。更にその後、避難シェルターへの直接通路に入り、シェルターへの階段を降りた。

避難シェルターの階は、一世帯が入れる部屋が沢山ある。3人はその中の自分達の一家用の部屋へ向かった。

部屋の前に着くと、母が急いでパスワードを打ったりなどの操作をして、部屋の扉を開けた。

「ズラブ・ネオラ、早く入って」

そう言われたズラブとネオラはすぐに部屋の中へと入った。二人が入った後、最後に母が入り、扉を閉めた。扉を閉めると、部屋の外の様子と外が遮られたため、静まった。扉が閉まると、ズラブと母が二つ目のベッドの一段目、ネオラが一つ目のベッドの一段目に座った。

「……………」

三人は沈黙していた。だが、心の中では戦いの事を不安に思い続けていた。ただ、時間だけが少しずつ変化していく。

「……………ねえ、ズラブ」

と、突然、ネオラが目の前にいるズラブに声をかけた。

「何……………?」

「怖くないの?大丈夫?」

「……………少しは大丈夫。だからあまり気にしないで」

「そ……………そう。わかった」

「お姉ちゃんはどうなの?」

「……………ズラブよりは大丈夫じゃないかも……………多分、お母さんもね……………」

そう言われたズラブは、何と返事をすればいいのかが分からなくなってしまう。超能力は当然使えないためにどのくらい不安なのか、父は今無事なのか、地上は今どうなっているのか、空の上では今どうなっているのかがわからない。その為、内心ではイラ

イラしていて、落ち着かなくなっていた。

「……ズラブ、話しにくい事なんだけれど……」

と、次は母が話しかけてきた。それに、話そうかどうか迷っていた感じの恐る恐るとした喋り方であった。

「……何？」

ズラブは母のような喋り方とは逆の、普通の喋り方でそう答えた。

「……ズラブ、本当はお父さんの様子が超能力で見えていたんでしょ……。違う？」

そう聞かれると、母の事を恐れ出した。「母さんはひよっとして怒っているのではないのか」と。ズラブは恐れながら、

(何とか言わないと、母も自分自身も何とかならない……)

と思っていた。隣にいる母をちらっと見ると、ズラブをただ無表情で見つめていた。

(……どうしよう……早く何か言わないと……)

ズラブは迷いながら深く考え続けたのであった……そんな心情に気がついたのか、ネオラが、

「ねえ……ひよっとして落ち着かないの？だから答えられにくいのね」

と、声をかけてきた。ズラブは素直に、

「……うん」

と、小さな声で答えた。

「落ち着かないのなら私が代わりに話す？あの時ズラブ自身が部屋で言った事をね。言いたいののはきつとそれだよね」

「そうだけど……。うん、やっぱり自分で言うよ……。じゃあ今から話すね、母さん」

ズラブはネオラに優しく話しかけられたのか、言う事の勇気が付き、自分から言うことを決心した。

「……実は……。父さんは部隊全員と戦闘に参加しているんだけど……父さんも部隊の全員もみんな無事だよ。避難命令が出される数分前の地点の事まで分かるんだけど……。その後突然、誰かに止められたかのように超能力が突然使えなくなっただ……。本当だから。だから今は……。父さんがどうなっているのか、遙か上の宇宙の様子はどうなっているか、攻めてきた艦隊はどうなっているのか、この後はどうなってしまうのかが分からないんだ……」

そう言い切った後、ズラブは心の中で、

（やっぱり何か厳しいことが言われるか言われ続けられるかも知れない……）

と、激しく緊張しながら思っていた。ただ、心臓の鼓動が激しくなっていく。それに、周りも自分も静かになっっているために、鼓動の音はより大きく聞こえている。

「ズラブ……」

突然母は言う事を決めたために、話し始めた。

「な……何？」

ズラブは恐る恐る返事をした。

「……教えてくれてありがとう。何だか一層ほっとした……」

母は少し微笑んでそう言った。同時に心は一層安心したのであった。ズラブも同じく一層安心した。

「えっ……良いの、母さん？」

「良いのよ……」

「ど……どうして……？」

「だって……今まで何も分からなかったから。でも避難命令が出る数分前って、ついさっきの事じゃない。きっと今も生きているわよ」

「えっ……？」

その直後、母は右手をズラブの頭に当てて、ズラブの事を撫でて、

「大丈夫よ……。だから無事を強く願って……」

と、優しく言った。

その数秒後、外で爆発する音が何度も響いた。その瞬間、三人の心は一瞬にして変わりだした。

「何!？」

ズラブは慌てて立ち上がった。とその直後、一瞬にして超能力が使えるように戻った。

「はっ、超能力が再び使えるようになった……」

そう言うと、すぐに外の様子を、テレパシーで見た。ビトウラ全体はドーム型のシールドで包まれている。だが今、イリーア級巡洋艦1隻、フェイルス級駆逐艦2隻、ソリエ級小型駆逐艦3隻、デアニアス級輸送艦2隻、クレスセスの戦闘攻撃部隊等からなるグループがついにビトウラの周囲に到着し、シールドを破壊するために攻撃しているのである。

「ズラブ、何か見えたの!？」

と、すぐに母がそう言ってきた。

「……侵略してきた艦隊の一部が、このビトウラを侵略の拠点にするために、ついにビトウラの海に着いたんだ。今は、今現在ビトウラ全体を包んでいるドーム型のシールドを破壊しようと攻撃している……」

「本当なの!？」

母はそう慌てて質問した。

「うん……。でもシールドが破壊されない限りは大丈夫だと思うけど……でも第2部の戦闘機の部隊が必死に止めようと攻撃している」

そしてズラブは更に、テレパシーで更に遠い範囲を見てみた。い

くつかの惑星に駐留している部隊と、第2部のいくつかの部隊がこちらに向かっている。父とその部隊も混じっている。

「あっ……今、いくつかの惑星に駐留している部隊と第2部のいくつかの部隊がこっちに向かっている。……それに……父さんもいる……」

それを聞いた母とネオラは、非常にほっとした。

「良かった……お父さん……」

母の不安は全て消え去った。

「後は、戦闘が無事に終わると、父さんの無事を祈るだけみたいだね」

「ズラブ……もう超能力が使えるのね……。私もズラブの話聞いて安心しちゃった……」

ネオラも母と同じように不安が全て消え去っていた。

(……ん?)

と、突然、ズラブは何かを強く疑問に持った。それは悪夢にあっただビトウラ自体の侵略である。ビトウラは今、全体がシールドで包まれているために、当然、外にいる侵略してきた艦隊の一部と、中にある町民などは決して出入りができない。出入りするにはシールドを破壊するか、あるいは止めるしかないのである……。

(まさか……)

ズラブは色々思い込んだ。もしかしたらこの後、シールド装置が故障したり、破かれたりするのではないのかと。

「……どうしたの、ズラブ？」

色々思い込んでいたために固まっていたズラブを見たネオラは、ズラブに疑問を持った。

「……あつ……何でも無いよ。大丈夫」

ズラブはそう答えてごまかした。

その頃、第2軍事軌道コロニーでは、攻めて来たラウガルス級戦艦1隻、オルカノス級母艦3隻、イリーア級巡洋艦4隻、フェイルス級駆逐艦6隻との戦いが繰り広げられていたため、戦闘にも指揮にも混乱していた。それだけではなく、近くにある第2軌道コロニーも攻められている為、第2軌道コロニーの前でも戦闘が繰り広げられていた。

しかも、ある情報もつかんだ。他の軍事軌道コロニーの付近からも、アテラジア統合帝国軍の艦隊が攻めて来たのである。

それだけではない、アルカントdよりも内側にあるアルカント星系の第3惑星、アルカントcにもアテラジア統合帝国軍の艦隊が攻めてきている。

(……早くどの軍も侵略を止めないと……。もう隙間がない。このままでは星系は完全にアテラジア統合帝国の手に落ちる)

レノ最高司令官は、右手を頭につけながらそう思っていた。と、その時、隣にケオズ大将が来た。彼はアルカントc出身であるためか、肌の色は褐色である。周囲に褐色肌の人物はいない為に、彼は

目立っていた。

「最高司令官」

「何の用だ、ケオズ大将」

レノ最高司令官はすぐに振り向いてそう返事をした。

「これ以上、更に部隊を地上に投入するつもりでしょうか？」

「いや、それはまだだ。増やすかどうかはこれからの様子次第だ」

「そうですか……」

「それよりも今は、このコロニーに攻めて来た奴らの方を重視するべきなのかも知れない。今部隊を投下しても、きっと彼らも奴らの戦闘に巻き込まれる」

「はい……。ところで先程、右手を頭に付けていましたが具合悪いのでしょうか？」

ケオズ大将は、先程のレノ最高司令官の様子が気になっていた。

「ああ……。大丈夫だ。気にする必要はない。ただこれからの事に色々悩んでいただけだ。このままだと惑星、いや星系自体がアテラジア統合帝国の手に落ちるからな」

「……確かに。他のどの軍事軌道コロニーも攻められていますから」

ケオズ大将がそう言うと、二人は巨大ホログラムの方を見て、巨大ホログラムを見つめた。

その頃、ズラブの父であるダヴィドは、所属する部隊である第23戦闘攻撃部隊の隊員達や他の部隊達と共に、下へと降下していた。

(早くしないと……)

ダヴィドは心の中でそればかり考えていた。彼の心はもう落ち着きがなかったのである。しばらくすると、下が見えてきた。今は夜近くであるため、ビトウラは、当町とその周囲に攻めてきたイリーア級巡洋艦1隻、フェイルス級駆逐艦2隻、ソリエ級小型駆逐艦3隻、デニアス級輸送艦2隻、クレスセスの戦闘攻撃部隊等からなるグループによる町全体を包んでいるシールドへの攻撃と、それに対する味方の戦闘攻撃部隊との戦闘の明かりだけが見える。

「やっと見えてきたか……。早くしないと町のシールドが破られてしまう可能性があるかもな……」

そう呟いた直後だった。

『なあダヴィド、突然だが言いたいことがある』

レイダリからの通信であった。

「何だ？レイダリ」

『お前もしかして心配になっていないか？』

「いや……あまりだ。でも早くビトウラに着かないとな。町全体を包んでいるシールドが破られて、部隊が町の内部に攻め込んでしまう可能性がある」

『そうだな……』

そう話している内に、下の光景が大きくなっていった。攻撃の様子もはつきりと見えてきている。

(待ってるよ。セレーネ、ネオラ、そしてズラブ)

と、その時、光ビームが下から数本、誘導弾が数発来た。来た事が気付かれたのである。しかし、光ビームの方向にいた全員は、素早く光ビームを避けた。

(どうやら気付かれたな……)

ダヴィドは心の中でそう言った。その直後、目の前から沢山の戦闘攻撃部隊が攻撃しながらやって来た。

「また再び戦闘か……。下に行きたいけど、こいつらをどうにかしないと行けないのかもしれない。でも多分、下のビトウラの方が敵は多くて敵しいと思うな……」

ダヴィドは気合いを絞り出し、同じ部隊の仲間達と共に戦闘を始めた。ダヴィドはまず、2機のクレスセスを追った。

「早くどうにかしないと……。何と言ってもビトウラが危ない」
2機のクレスセスはまず、左へと激しくターンした。ダヴィドは超小型誘導弾を一对二発ずつ発射し、同じように左へと激しくターンして追った。

『ダヴィド、頑張れよ。こんな所まで来たんだから死ぬんじゃない』
と、突然、レイダリが通信でそう言った。

「ああ、そんなの分かっている。俺からも言うつがお前も死ぬんじゃない。」
『おう。じゃあまた後でな』

レイダリはそう言うと、通信を切った。その直後だった。上から
沢山のビームが豪雨の如く降ってきた。

「!？」

慌てて上を見ると、上には敵の戦闘攻撃部隊が沢山いる。宇宙に
いる艦隊が、戦闘攻撃部隊を投入したのである。

(奴ら、戦闘攻撃部隊を更に増やしたか……)

その頃地上では、シールドに対する攻撃が収まることなく激しく続いていた。

攻撃しているのは、ほとんどが人型戦闘機形態の状態のクレスセス、戦闘車両、強襲型輸送艇などであった。

兵士も多くが自ら持っているカイサーブルなどで攻撃している。ガンモードで銃撃しているのがほとんどである。

周囲には、共に降りてきたアルカント軍第2部のいつくもの戦闘攻撃部隊が攻撃、上空では、アルカント軍第2部の沢山の戦闘攻撃部隊との戦闘が起こっているために、不安ながら攻撃をしていた。

その頃、上空にいるダヴィドは、未だにクレスセスの戦闘攻撃部隊と戦っていた。地上の方に行こうとしても、多くのクレスセスが攻撃などで妨害をする為に、未だに困難であった。

(……一体いつになったら地上の方に行けるんだろうか)

ダヴィドは相変わらず、イライラしながら敵の戦闘攻撃部隊と戦っていた。宇宙の方からは、もの凄いペースでクレスセスの戦闘攻撃部隊や地上へと向かう強襲型輸送艇などが増えていくばかりである。一部の部隊は、地上へと降りて行っている。

それに地上からは、主に戦闘車両やスランゼスからの砲撃や誘導弾が数本来る。

ダヴィドは今、どの機にも追われてはいないが、一機のクレスセスを攻撃しながら飛行をしている。先程向けて超小型誘導弾を発射した2機のクレスセスの内、一機である。もう一機の方はすでに超小型誘導弾が命中して、爆破した。その為、先程発射した超小型誘導弾一対二発の内、一対一発が残っていて、その戦闘機をダヴィドが乗っているスランゼスと共に追っていた。

しかしダヴィドは、下からの攻撃をなぜか一番恐れていた。なぜなら下の方は、クレスセスの武器や、戦闘車両等による粒子攻撃、自機に積んである超小型誘導弾よりも大きく強力な誘導弾などがほとんどだからである。

(俺はこの先、一体どうなってしまうんだ……。そしてビトウラム)

ダヴィドは、高度になっていく戦闘が続いて行くと同時に、頭の中は混乱が進んでいった。それでも、状況は全く変わらず、進行していくだけである。

そんな時、先程発射した一対一発の超小型誘導弾が下からの攻撃によって破壊された。ダヴィドは焦って素早く、爆発から右へとターンして避けた。

「畜生……」

ダヴィドはそう怒って右の拳を操縦桿にぶつけた。しかし、ダヴィドはその怒りを戦闘にぶつけ、気合いをさらに上げて、例の一機のクレスセスを、ビーム機関砲をやけくそに撃ちながら高速で追った。

(……どうしても一機でも逃がしたくない……)

追っているクレスセスに近づくと、そのクレスセスは、機体を右へ左へと交互に繰り返してステップした。そして、ある程度行くと右へと急ターンした。ダヴィドはすぐにハイ・ヨー・ヨーをして、追った。すると、クレスセスが早く焦点に入った。

「……よし……」

そしてダヴィドは、粒子ビーム砲を撃った。すると、一本がメインエンジンに入り、機体は後部が爆発して、落ちて行った。そしてその数秒後に爆発した。

「はあっ……やったか……」

少し喜んだその直後だった。後ろから3機のクレスセスがビームで攻撃をしてきた。

(……ちっ)

ダヴィドは急いで機体を降下させて逃げた。下へ、下へと下がって行くごとに、下の光景が拡大していった。

(……まだシールドは破られていないのか……？空が暗いから見えにくいな。本当にまだ破られていなければ良いけどな……)

下の光景を見て、心の中でそう呟いた。と、その直後、下にいる一機のクレスセスのサイサールの粒子ビームが、機体のすぐ横を通りすぎた。

「わっ！！」

ダヴィドは反射的に反対側の右へとターンした。そして、降下するのをやめて、機体を水平にさせた。

(下の方を何も考えないで甘く見てしまったか……少しでも左にいたら確実に当たって危険な事になったのかも知れない)

そんな事を考えていると、自機を追っている三機の内、一機のク

レスセスが上からビーム機関砲で攻撃をしてきた。

(危ない!!)

気付いたダヴィドは、反射的に素早く右へと急ターンした。それに、一対三であるために、緊張と恐怖を感じていた。それに今は、先程までいた空中の戦場よりも下の位置にいる。

(俺は随分と下に下がったんだな……。シューゼ隊長と部隊の仲間達は俺がどこにいるのか一体分かっているのだろうか……?)

必死で逃げながらもそう思っていたダヴィドであった。

その頃、地上のビトウラでは、ビトウラ全体を包んでいるシールドに対する攻撃などが未だに激しく続いていた。

一方で、地下の避難シェルターにいるズラブ・ネオラ・母のセレーネは、心が相変わらず、うずうずとしている。中で、一番うずうずしているのはズラブであった。やはり落ち着きがない性格の為である。彼は、父などを今すぐどうにかしたいと深く思い続けている。彼は今、父が宇宙で戦闘をしている時に、テレパシーを使って父を追っている超小型誘導弾を破壊したり、デニアス級輸送艦のフィールド装置などを止めたように、父を追っているクレスセス三機をテレパシーでどうにかしようと思ったが、一切できない。どんなに精神を集中しても当然無理であったズラブはそれでこう思った。

(なぜあの時はテレパシーであんな大きな事ができたのに、今は一切できないんだろう。まさかさつき超能力が突然使えなくなったのに関係があるのかな?それとも何だろう。あれは偶然?)

そんなズラブの様子が気になったネオラが突然、

「……ズラブ、やっぱり落ち着かないのね」

と、声を掛けてきた。それに対してズラブは、

「うん……」

と、小さめな声で答えた。

「大丈夫なの？」

「……いや、あまり。でも父さんは今もまだ生きているから大丈夫
なんだけど……なんかね……」

「他のことも深く考えているのね、ズラブは」

「うん……」

ズラブが答えたその直後だった……。

ドゴオオオオオオオン！！

上から爆発音が響き、室内が少し揺れた。

「い、一体何！？」

ネオラは慌ててそう言った。ズラブはすぐに、テレパシーで上の
様子を見た。

「……あつ！！」

様子を見たズラブは驚いた。何と、アテラジア統合帝国軍の複数
の重砲戦車の重砲攻撃が合わさった集中攻撃が、シールドを破壊し、

更には貫いて、シールド装置を破壊したのである。

「ズラブ！！何か分かった！？」

母は、すぐに飛びついた。

「……シールドが……破壊されたんだ！！」

「……ええっ！！」

ズラブが見た上の様子の事を聞いた母とネオラは同時に驚いた。

「それだけじゃない、シールド装置も破壊された……。それと……軍隊が今、町に入ってきて来た……」

何と今、シールドとシールド装置が破壊されたために、軍隊が続々とビトウラ町内に入ってしまったのである……。

「……そんな……」

ネオラはあまりにもショックを受けたのか、言葉を失ってしまった。

その頃、上空で戦っている父、ダヴィドは、そんな事には全く気付いてはいなかった。当然、戦闘をしているからである。ダヴィドはまだ、3機のクレスセスと戦っていた。後ろからは、ビームだけが来る。

それに彼は今、右へ、左へ、上へ、下への回避を繰り返している。しかも、下からの攻撃に注意をしながらだった為、心はとても安定しておらず、非常に不安定であった……。

(注意を保たないとな……)

彼は心の中で何度もそう呟いていた。

そんな時だった。内一機のクレスセスが追撃された。

「んっ?」

ダヴィドはすぐに後ろを調べた。そこにいたのは同じ第23戦闘攻撃部隊の隊員の一人であるアンドレイであった。彼はまだ20歳で、階級は一般兵かつ部隊の中では一番若い物の、腕は部隊の中ではとても優れている。それに、まだ軍学校を卒業したばかりである。

「あ……アンドレイ!!」

『副隊長!!……良かった』

アンドレイはダヴィドが生きている事を知って安心していたようだった。実は彼は心配性である。その為、ダヴィドはもしかして死んだのかとも思ってしまったていて、彼の事を心配していた。

『あつ、副隊長……そういえばどうして一人だけでこんな低い所に……』

「ああ……これは……ってお前、とりあえずこいつらを仕留めるぞ!!見逃すんじゃない!!それと気を抜くな!!」

『あつ、はい!!』

気がつけば、アンドレイが乗ってるスランゼスの後ろに、先程までダヴィドが乗っているスランゼスを追っていた2機のクレスセスの内、一機がいた。気を一端抜いて、ダヴィドと会話をしてしまったからである。しかも、アンドレイが存在に気付いた瞬間、クレスセスはビーム機関砲を撃ち放った。

「行けねっ……………」

アンドレイは焦って回避した。更には、アンドレイとダヴィドは距離がとて離れてしまった。

「……………全く」

ダヴィドはアンドレイに対してそう呟いた。そして、気合いを入れてスピードを全力を使って上げ、自機を追っているクレスセスから回避した。それによって、自機を追っているクレスセスとは、距離が広がってきた。

そして次には、急いでスプリッツをし、更にその次は、インメルマントーンをした。しかし、敵機の後ろにはなかなかつかない。

(くそっ……………まだつかめないか)

しかし、ダヴィドはあきらめずに踏ん張り続けた。それに彼は、アンドレイの危険も加えて、踏ん張りを一層強めた。彼はその後、様々な方向に動いて、一機のクレスセスの後ろに付こうとした。だが、なかなか付かない。

そんな時だった。2本の対空誘導弾が下からこちらへと向かってきた。

「……………来たか。しかも2本……………」

その為か、彼は焦ってクレスセスとは逆の方向へと一旦回避した。そして彼は、機体を様々な方向へと動かしながら逃げた。

(もう奴(今まで自機を追っていたクレスセス)に跡を取られても仕方が無いようだな……奴はもし俺を追うならばきつと後回しになる。それにしてもアンドレイはどこへ行ったのか……)

ダヴィドは途中で頭の中でそう言った。例の一機のクレスセスは結局、ダヴィドの後を付いて、ダヴィドが乗っているスランゼスを、対空誘導弾2本と共に追った。最悪な事に、別のクレスセス2機が上から来て、共にダヴィドが乗っているクレスセスを追ったのである。

(……増えたか!！)

苦難は一層増した。彼は同じ部隊の仲間を呼ぼうとしたが、彼にとってはもうそれどころではなかった。彼は非常に緊張しながら逃がっている。その為、途中で、

「……このままどうすれば助かるのだろうか……」

と、小声でつぶやいた。

その頃アンドレイは、先ほど自機の後を付いた一機のクレスセスと戦闘を繰り広げていた。ダヴィドの今の様子は知らない。アンドレイもダヴィドと同じように下からの攻撃を恐れながら戦闘をしていた。

……それと同時に彼は、ダヴィドの事が非常に気になって心配していた。その為に、一層踏ん張って戦っていた。

(……多分、副隊長は……とりあえず早くこいつ(一機のクレスセス)を倒さないと先が……)

戦闘していると同時に、時間だけがただ過ぎて行く。「一刻も早

くせねば」と、アンドレイは心の中でぶつぶつと呟いていた。

(……………俺はやっぱり……………まだ、未熟なんだ……………。くそっ……………俺は！……………俺のどこが……………どこが優れているんだよ……………！！！)

アンドレイは、気持ちが途中でネガティブになったのか、頭の中でそう悔しく思った。

……………とその時だった。2機との間に、下から粒子ビームが走った。一機の人型戦闘機形態のクレスセスが放った、粒子ビーム重ライフルからであった。それにより、敵機は横へと焦って急激にターンして逃げたために、遠く横に並んでしまった。しかも、相手の方が自機よりも前の方に出ている。

「よし、行くぞー！！」

アンドレイは、敵機が前の方に出ているのをチャンスに、敵機を急いで追った。そして、敵機の後ろを取る事がついにできた。

「よし……………後ろ取った」

そして、ビーム機関砲を撃った。敵機は、上へと、下へと、右へと、左へと逃げて行った。アンドレイは間隔を開けて攻撃しながらその後を同じように追って行った。

それからしばらくした後、ビーム数本程がエンジンに命中して、機体は少しバランスを崩した。アンドレイはその隙に、ビーム砲を数本エンジンに向けて連続で撃ち放った。そして、機体は破壊された。

「……………喜んでいる暇はまだ無い、副隊長の所に行かないと」

アンドレイはまだ喜ばなかった。ダヴィドの事を考え続けていた

からである。その直後だった。ダヴィドが乗っているスランゼスが、数機ものクレスセスと対空誘導弾に追われている様子が遠くに映った。

「……………副隊長……………!!」

様子を見たアンドレイはすぐにアンドレイを全力で追った。

そして、しばらくすると、アンドレイが乗っているスランゼスを追っている数本もの対空誘導弾とクレスセスの後ろについた。しかし、ばれないようにさせる為か、距離を長く置いている。アンドレイは一機のクレスセスに粒子ビーム砲を撃ち放ち、その一機を追撃させた。

『アンドレイ、来たのか……………』

ダヴィドはアンドレイに気付いたために、アンドレイに通信でそう言った。

「あつ……………はい!!」

『とりあえず今すぐこいつらを何とかしてくれ!!頼む!!』

「はい!!わかりました!!」

アンドレイはそう答えた直後、すぐにダヴィドが乗っているスランゼスを追っている残り二機のクレスセスの内一機に向けて、ビーム砲を撃った。しかし、ダヴィドが乗っているスランゼスも、そして追っているクレスセス二機と対空誘導弾二発も非常に激しく動いている為に、追うのが大変であった。それに、なかなか命中はしない。

(……………動きが非常に激しい……………でも何とかしないと……………)

そう思い続けながら攻撃を続けているアンドレイは、突然、今のままでは大変だと確信し、超小型誘導弾をクレスセス一機ずつに超小型誘導弾を一对二発放った。そして、一機のクレスセスが命中して爆破した。追撃が成功したのである。

「あと一機と二発をどうにかすれば良いのかも……」

アンドレイがそう少しだけ喜んで呟いた直後であった。ダヴィドが乗っているスランゼスが突然、下へと急降下した。対空誘導弾二発はそのまま同じルートを追ったが、クレスセス一機はかなり前へと進んで、そこから下へとターンし出した。アンドレイは、クレスセス一機の方を狙っている為に、途中でクレスセス一機へと向かって斜めに下へと上昇した。しかし、クレスセス一機は素早く横へと急ターンして避けてしまった。それを見たアンドレイは、同じように横へと急ターンして、クレスセス一機を追った。しかし、クレスセス一機は。更に別の方向へと逃げていたのであった。だが、アンドレイ自身が放った超小型誘導弾一对一発はまだ残っている為に、機を追いつけている。

その頃ダヴィドは、未だに降下をし続けていた。下の様子が少しずつ拡大していく。そして、様子が大体分かる高さまでにも来た。……町全体を包んでいるシールドが既に破られていて、軍が攻め込んでいる為に、戦場になっている事に今気づいたのであった。

(……シールド……破られてしまったのか……。……軍はもう徹底的に町中に浸透していやがる。……でもシェルターにいる町民達はきつとまだ無事かもしれない。もちろんズラブもネオラもセレーネも。いち早く町に行かないと……。町が危ない!!!……。でも先に、後ろにいる誘導弾をどうにかしないと……。)

そう思った直後、目の前からビームが数本来た。

「わっ！！」

ダヴィドは自身の考えばかりにとらわれていた為に、焦ってそれらを素早く横へと避けた。が、奇跡的に内一本のビームが、ダヴィドが乗っているスランゼスを追っている対空誘導弾二発の内一発に命中し、その一本は下へと落ちて行った。

「……よし、一本となったか……。……とりあえず早くしよう」

自機を追っていた対空誘導弾が一つ減ったために、少しだけ安心して喜んだダヴィドは、ビトゥラへ降りる強い目標を持ちながら粘り出した。

ダヴィドはまず、上へと急上昇した。そして次に、下へと急ターンをした。だが、対空誘導弾の後ろを取れなかった。

「……まだ取れないか……」

ダヴィドはその後、左へと急ターンし、更にはスプリットSをした。そしてその次は、上へと急ターンをした。だが、また対空誘導弾の後ろを取ることが出来なかった。しかし、ダヴィドは一切落ち込まずに、対空誘導弾との奮闘を続けた。

その後、ダヴィドは4回も同じ状況が続いた。失敗の連続である。

(……失敗の連続……か。……くそっ)

次は少し速度を上げて逃げた。対空誘導弾との距離を離すためである。だが、なかなか離れない。それに気付いたダヴィドは次に、下へと急降下した。そしてその次は、大きく上へとターンした。

(……少しは離れた感じだな)

ダヴィドは、対空誘導弾が少し離れたのを確信した。その直後は右へと急ターンし、更にその次は、下へと急ターンした。

「……取った」

そして、遂に対空誘導弾の後ろを取り、ビーム機関砲を撃った。対空誘導弾は次々と被弾し、遂には爆破した。

「……ふう」

安心した直後、後ろからアンドレイが乗ったスランゼスが来た。

『副隊長……!』

アンドレイは例の一機のクレスセスを、ついさっきに追撃したようである。

「あっ、アンドレイ、追撃したのか?」

『……はい』

「……そうか」

『……あの、副隊長』

と、突然、アンドレイが何かを質問して来た。

「……何だ? アンドレイ」

『これから次はどうするか考えているみたいですね……』

「ああ……、ビトウラへと降りる。もうシールドが破られていて軍

がとても浸透しているからな。それにあそこは大切な家族が住んでいる……。だから早く行かないと……」

『……僕も行かせて下さい』

アンドレイの返事を聞いたダヴィドは、アンドレイの事を心配し出した。なぜなら、ビトウラとその付近の今の状況は想像以上に非常に厳しいからである。ダヴィドは、軍学校を卒業したばかりのアンドレイの事を想っており、アンドレイをそんな所に一緒に行かせるのを心配していた。

「……アンドレイ、大丈夫なのか……？想像以上に厳しいことは分かっているのか？」

『……はい』

「そうか……」

そう言った直後であった。複数のスランゼスが後ろや上から来た。同じ部隊の仲間達であった。シューゼ隊長もいる。

『ダヴィド、アンドレイ……生きていたか！！』

シューゼ隊長はとても安心していた。

「ああ……。そっちこそ無事だったか」

ダヴィドも同じく安心した。そう答えた直後、シューゼ隊長が、

『……アンドレイの実力はどうだったか？ダヴィド』

と、突然そう質問してきた。

「……やっぱり高いな。俺自身の実力が少しだけ劣っているのを実感したような気がするしな……」

『ああそうか……』

シューゼ隊長がそう答えた直後、ダヴィドは、

「なあ、シューゼ、これから部隊でビトゥラに降りないか？」

と、質問した。

『……本気なのか？』

質問を聞いたシューゼ隊長の表情は、一瞬で真剣に変わった感じだった。

「ああ、想像以上に危険で厳しいことは分かっている」

『それは……本当なのか？ダヴィド』

シューゼ隊長の表情は、まだ変わってはいない感じだった。

「……ああ、本当に決まっている。……先程までの戦闘は下からの猛攻が来た。だから下を恐れながらの戦闘だったな……。それに下からの攻撃は戦闘機以上の火力だしよ」

ダヴィドがそう言うと、先程まで冷たい感じになっていたシューゼ隊長の表情は少し変わり出し、彼は、

『まあ、そうだな。俺も一回、低い位置で戦闘をしたからな……』

しかし、お前……良く生き抜いて来たな。まだ実力あるじゃないか。無いとは全く言えないな……』

と、答えた。

「……そうか。まあ、シューゼもだな」
『おつ』

「それより、早く下に降りないか？ビトウラには大切な俺の家族もいる……。まだ全町民と共に避難シェルターにいると思うが、もし避難シェルターを開けられたら大変だ」

『そういえばそうだったな。お前の家族が住んでいるんだよな。よし、全員で降りるぞ。ただし、離れた地にな……』
「ああ！！」

第23戦闘攻撃部隊は、急いで下へと向かって行ったのであった。

その頃、避難シェルターにいるズラブは、父などの様子をテレパシーで見続けていた。

（やっと降りて来た……しかも部隊全員で。いち早く来てくれれば！！）

ズラブは安心した気持ちで、心の中でそう言った。しかし、それとは逆に、母は絶望していた感じであった。ネオラはそんな母の側にいて、母の事を支えていた。ズラブはちらつと母の方を見ると、必ず母の事を考えるのであった。

その時だった、ネオラと目が合った。目が合ったネオラは、
「……どうしたの？」

と、質問して来た。

「あつ……いや、別に。所で母さんはどう？」

「あまり心配しないで、ズラブ。所で何か様子が見えたんでしょ？」

「うん。父さんと父さんが所属する部隊が、部隊全員で地上へと向かっているよ」

「そう……」

そう答えたネオラであるが、彼女はあまり安心していないように見える。母も同じであった。ネオラの事が気になったズラブは、彼女に、

「ねえ、お姉ちゃんはまだ不安があるの？」

と、声をかけた。

「うん、あまりね……」

「……」

ズラブは、そう答えたネオラに対して、何と答えればいいのか分からなかった。が、その直後、ネオラは、

「でもズラブは強気で良いよね……。私なんか強気じゃないから……。さつきからずっと同じ感じだし……」

と、僅かだけ微笑んで言った。自分に少し呆れていた感じだった。

「そんな事無いよ……。じゃあ何で今日の午前中、町の一番下に行く事にとても好奇心があつたの？」

ズラブは、今日の午前中の、町の一番下に行く事に対してとても好奇心を持っていたネオラの事を思い出してそう言った。しかしネ

オラは、

「……さあ、さっぱり分からない……」

と、変わらない感じの心情でそう答えた。ズラブは、そんなネオラに対してため息を吐いて、

「ねえ……自分を決めつけていない？ 言うておくけど自分をそうネガティブな感じで決めつけるのは良くないから……」

と、言った。

「う……うん」

「……まあ、俺だつて完全に強気とは言えないよ。完全に前向きとも言えないし。だからあの時は……」

ズラブは、今度は、今起こっている戦いの事が夢としての形の予知で現れて観てしまっていた悪夢の事が、宇宙で戦いが起こり始めた時に、本当になるのかどうか・本当の事になるのを決まっても受け入れる事を恐れていたなどの、あの時の事を思ってそう言った。

「あの時つて……何……？」

ネオラは当然、あの時は、ズラブと緒にいなかったもので、そんな事は当然知ってはいない。

「実は俺……今日のこの戦いの事を……夢としての形の予知で現れて……観てしまっていたんだ……」

ズラブは素直に言う事にした。

「…………えっ!？」

話を聞いたネオラは案の定、驚いた。

「うん…………でもそれを宇宙で戦いが起こり始めた時に本当になるのかどうか・本当のことになるのを決まっても受け入れる事を恐れていたから…………」

「そう…………だからあの時、部屋ではあんな心情になっていたという事ね…………」

さつきは不安そうに驚いていたネオラであるが、次はそれとは逆に、優しげにそう言った。

「うん…………」

「とても…………不安だったでしょ…………?」

「…………そうだね」

「…………地下水路を歩いたあの時、ズラブが言った事の原因がやっと分かったわ…………。そういう事だったのね」

ネオラは、午前中にズラブと2人で町の一番下に行く途中に地下水路を歩いている時に、2人でズラブ自身の超能力の話をしている時にズラブが言った、「…………でもよくない事だつてあるかもしれない…………」という、超能力には悪い部分もあるという事を訴えた発言の事を思い出し、それを理解したのであった。

「分かってくれたんだね」

「…………うん」

ネオラはそう答えると、少しだけ微笑んだ。そして次に、

「ねえ、ズラブ？」

と、質問をして来た。

「ん？今度は何？」

「……色々、話してくれてありがとう」

ネオラは微笑んで、そう言った。

「えっ、どうして？」

「……ズラブと色々話していると、自信が付いてきた感じがする。なんか、少し元気になったから……」

ネオラはズラブと色々話したのが、自信が付いてきた感じがして、少し元気になったのである。

「本当に？」

「うん、だから……ありがとう……」

ネオラは最後に、笑顔でそう言った。ズラブには、不安がとても無くなっていった感じに見えたのであった。

その頃、第2軍事軌道コロニーの司令部は、未だに変わらぬ混沌とした状況であった。コロニーの側にいる艦隊との戦闘や、惑星の戦闘などで、手を一切抜けられない状態であった。

レノ最高司令官は、なぜか寡黙・冷静であった。実は、頭の中で何かを色々考えているのである。実は、彼は超能力を駆使しており、今はテレパシーで色々と見ているのであった。彼は、ボウエントとのハーフであるという事は知られている（髪の色はボウエントの一

一般的な頭髪の色である紫色がかつた黒、肌の色はボウエントの一般的な肌の色である褐色との中間である）が、超能力を駆使していると言ふ事は誰にも知られていない。

彼は、今の銀河系とマゼラン雲の状況をテレパシーでつかんでいた。なんと、アテラジア統合帝国軍は今、このアルカント王国だけではなく、デイオシード連合皇国の他の数ヶ国、ラジギート連合王国の数ヶ国、カルダシア同盟国家の数ヶ国にも軍を送って侵略をしているのであった……。そう、アテラジア統合帝国の皇帝、ゴアルは、自らの陰謀である他の3連合国家への侵略を開始したのである。レノ最高司令官はそんな事を既に、前からテレパシーで読んでいたのであった。ゴアルは前に皇帝であった故・ラウガルス、自連合国家を中心とする銀河系・マゼラン雲の平和という意志を継ぐと言ったのは実は嘘であり、ゴアル自身は実は、ラウガルスとは逆の、帝国主義の持ち主であるのであった。

「引き裂かれし世界……か」

レノ最高司令官は、小さな声でそう呟いた……。

新たなる戦乱の時代が今、幕を開けた……。

《ステータス》

ズラブ・リュビナゼ

年齢：12歳

種族：人間（アルカント人）

職業：初等部学生

武器：無し

【独自に駆使している超能力】

<攻撃>

ライザー？

<補助>

ライフヒール？

ライフリカバリー？

<状態異常>

カウオシス？

episode - 5 戦乱の時代へ<前>

超暦14976年、それまで1200年間もの長い間、銀河系全域とマゼラン雲全域を統治し続けてきた大帝国が統治力を失い始め、崩壊を見せ始めた。

ルエンジス帝国である。

ルエンジス帝国は元々、超暦10032年に聖エルセリア皇国から分裂した連合国家の一つであった。

当時は小さな星系連邦国家にしか過ぎなかったルエンジス帝国であるが、次第に勢力を増してついには銀河系全域とマゼラン雲全域を完全に統治したのであった。

それはかつての、自連合国家の母である、銀河系の三分の一程を統治した聖エルセリア皇国を凌いだ規模である。

ルエンジス帝国はその後、1200年間もの長い間にわたって銀河系全域とマゼラン雲全域に、ほぼ平安な時代をもたらしたのであった。

だが、そんな大帝国の時代は、長くは続かなかった……。

統治力を失い始めた超暦14976年から帝国の政治、経済などは非常に不安定になっていった。

そして、多くの星系国家が帝国に対して反感を持ったり信頼を無くしたりしていき、反ルエンジス帝国の同盟を陰で組んでいったのである。

超暦14981年、ルエンジス帝国と反ルエンジス帝国勢力による大戦、ルエンジス大戦が始まった。銀河系全域とマゼラン雲全域を戦乱に巻き込んだこの大戦は、超暦14988年までの7年間に及んだのであった。

その後、反ルエンジス帝国勢力が勝利を手にし、大帝国、ルエンジス帝国は崩壊した。そして、銀河系とマゼラン雲は、ディオシード連合皇国、アテラジア統合帝国、ラジギード連邦王国、カルダシア同盟国家の4連合国家に分裂した。

銀河系とマゼラン雲はまた再び戦乱になるのかと思いきや、当時のアテラジア統合帝国の皇帝であったラウガルスが当連合国家成立時に、自連合国家を中心に4連合国家互い平和な関係を築く事を約束し、平和を誓ったのであった。こうして、銀河系とマゼラン雲は再び平和に戻った。

しかし、それから6年後の今、それよりも数年前に突然他界したラウガルスの後継者にアテラジア統合帝国の皇帝となったゴアルが、他の3連合国家に対して当然侵略を開始した。

銀河系とマゼラン雲は今、新たな戦乱の時代へと突入するのであつた！！

episode - 5 戦乱の時代へ&It・前>t ; (後書き)

まだ未完成です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966u/>

GALACTIC YANA - FOUR BATTLE FLAGS -

2011年12月11日01時50分発行